地名研究会報

第４５号
平成７年６月４日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４５回例会　平成６年６月５日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・上野堯史・大田照夫・納　栄蔵・小園公雄・木場武則・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田功美子・平田信芳・松浪由安（計１１名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　P.154 ～ P.160

（話題となった地名および事項）　高屋山陵・高山・四十九所神社・山頂の石組み・鵜戸神社・岳と嶽

高屋山陵

平田　この高屋山陵にはまだ行ったことがありません。溝辺の高屋山陵の方が指定されていますから内之浦の高屋山陵は顧られないのですが、この中に登った方がおられますか。

小園　今でも行けるのでしょうか。

平田　山の上でしょうけどね。

小園　山道で登れるでしょうかね。

平田　登れるでしょう。国見岳ですから、村人が春先には登るのではないでしょうか。国見岳という名は山に登る行事があったことを示しますからね。

納　昔は高山から国見岳に登って、下のキシタ（岸良）か。岸良まで行くものでした。今はどうですか。

小園　道はあるんですか。

肥後　現在は林道が通ってやしもはんか。

納　道はあります。高山の発電所のある所までは、自動車で行けましたから。

高山・四十九所神社

平田　高山も車で通過しただけですが、高山はほとんどが「タカヤマ」と読むのですね。「コウヤマ」と読むのは、あすこだけじゃないかと思うのです。「コウ」は、いわゆる「国府」か、郡衙の「郡（コホリ）」か、それに由来していると思います。恐らく肝属郡の中心地ということでしょう。それであすこの総社が四十九所神社になるわけです。旧記雑録の一番古い方の史料に四十九の神様の名があるのですが、現在の神社と一致させることができません。難しい神様の名が沢山書いてあります。一致させることが出来たら肝属郡の範囲は一遍で判って来る。十三所神社というのも出て来ます。十三所神社は佐多の方にあります。十三の神社が判れば馭謨郡の範囲が判って来る。そういうことが判っていても難しい神名だから誰も追求しようとはしないのですけども。肝属郡の神社は、すべて調べる必要があると思います。どこかで、その神様の名前が出て来ると思うのです。残されているとは思うのです。まだ歩き足らんところがあるようです。これが鹿児島県の古代の郡域を決める一つの出発点になります。判っていてもなかなか出来ないのです。

小園　伊敷にある伊邇色神社・宇治瀬神社などはかなり由緒が古いと思われながら載っていないし、新しいのじゃないかと思いながら見ると載っているのがある。例えば、止上神社というのは割合古いと思うのですが載っていない。それに比べて屋久島の益救神社とかね、鹿児島神社は載ってますけどね。何か、届けたのと届けなかったのがあるのじゃない

か、どうかな。あれは調べたのかなと思って。

平田　延喜式の神名は、国司から報告されたものだろうからね。

小園　それにもれたということは、なかったということだな。

平田　そうじゃない。あっても、報告しなかったということだろう。

山頂の石組み

小園　この国見陵は、石棺とか何かあるのですかね。自然石を置いてあるとか。

平田　山頂に登ればのこと。

小園　鳥居まであったり、ということですから。

平田　自然石を積み重ねた、とある。しかし、まわりが八尺だから、そう大きくはない。

小園　環状石。

平田　そんなことまで考えますか。

小園　登ったら判るのだろうけど。

平田　山の上に石を組んである所というのは。

小園　屋久島の原なんとかという所、モイどん、森山というのがあるんですよ。きれいなマンジュウ形の、ですね。地元の人々は「平家城」だと言っています。先日、登ってみましたが、城じゃない。山の頂上に、石が囲ってあるのです。その石が何なのか、ですね。

平田　烽火台なんかは。

小園　小野重朗先生は“モイどん”という。“モイどん”という中で、その山を表現されていた。結局、土地の習俗というか、一つの信仰の対象としたもの。

平田　そこは、見晴らしのいい所だと思う。

小園　そうですね。

平田　山の上のそう言った所に石を組んである所が、いくつかあるのですけどね。山に登って、一つずつ確かめてみて、どの山を見通せるかを調べると案外そこには、何か。

小園　そこは、屋久島が全部見渡せますからね。

平田　火立番所とか、火立山とか。烽火台の跡みたいなのは誰も調べてはいないのだろうけど。

小園　その下には神社があるし、そこの小学校は神山小学校という。

平田　ほう。それならば誰かを祀ったとか、葬ったのかもね。

小園　何か、古代信仰の対象みたいな気がする。土地の人々は平家城というのですが。

平田　屋久島の尾之間にあるの？

小園　尾之間と安房との間にある。きれいなマンジュウ形の山です。

上野　山の上に石があるのは信仰的な意味もあるでしょうけど、奄美で山に登ったら、まわりに石はなく、そこにだけ石がある所がありました。これは軍事的な意味で持ち上げたのかなと思ったのです。要するに、石を上から落とすのは一番いい戦術だと思います。だから信仰的なものとは思えない。石がずらずらずらーっと並んでいるのです。何千とね。山城の一貫としてあげたのかなと思ったのです。

平田　石を並べて、その上で火をたくと、まわりに火がつかないでしょう。石の上は燃えやすいから烽火用に使ったかなと思って見ているのですが。

小園　今は茂った山になっていますけどね。多分烽火をあげる時は、周囲を切り払って火事の恐れがないようにしなければいけないわけですから、山城の場合は、ほとんど切って山を裸にしている。

平田　近くでいえば、福山町に狐ヶ丘という所があるでしょう。一番高い所に岩が重ねてある。それから川内に純心女子大が出来ましたが、その背後の山、寺山の上にも大きな石が集めてある。

小園　桜で有名な都城の母智丘。あの山の頂上にも、巨岩、こんな塊石が積んである。

平田　そんな所を写真にとって、地図の上でつないでいったら、何か出て来るのではないかと思って

いる。

小園　屋久島のは大きなものではない。まるい、直径が30cmから40cmぐらいの石がぐるっと集められている。

平田　古くから石を持ちあげたのだろうな。

小園　誰かが持ちあげたに違いない。

平田　しかし、大変な仕事だよね。

小園　狐ヶ丘のあれなんかは、どう考える。あれを持ちあげたんでしょうかね。たまたま、噴火石が残っておって、あれだけが積みあげられた。

平田　まわりにも石があってもよさそうだけど、あそこしかないのだよね。

小園　あんなのは、いくつかありますよ。やはり烽火でしょうかね。

平田　いくつかあるから、そんな気がするのだけど。

上野　角ばった石だったら、元々あったと考えるけど、丸石みたいなものだから明らかに下から運んだ。川で生まれたような石を持ちあげた。

小園　口之島の山は、つぶてクラスの石が集められている。

平田　そう。

小園　それは確かに軍事的なものだけど。

平田　山の上にそんなものがあるのだけど、登るのがきついから一々登って調べていないのだよね。

上野　山の上の石だけ写真にとって調べるということですね。

平田　そして、地図に点を落としていけば、案外つながりが出て来る。そんな気がしてるんだけど。

小園　実際にそこに登って行くとなると、大変なこと。

大田　大きい石がある所は、烽火の方が近いのではないですか。鶴田町にも鏡石という所があるのですが。

平田　鏡石ですか。

大田　それと、１Kmぐらい離れとるですかね。薩摩町の狩宿に獅子隈山という所があり、そこにも大きいのがあるのです。そこを考えた場合、鏡石から烽火をあげると祁答院地方一帯に分かるのです。伊佐郡の方には獅子隈山を使わんと向うには分らないわけです。それで獅子隈山と連係をとったのじゃないかと見ているのですけど。それから横川にも、鏡岡というのがあります。

平田　また鏡ですか。

大田　鏡岡。

小園　丸岡じゃなくて。

大田　丸岡の北側になります。鏡岡というものがあります。そこはまだ行ってはいませんが、烽火をあげたら横川地方にほとんど分かると思います。

青柳　鏡山はよく見えますね。

平田　横川の？

青柳　はい。

平田　鏡山？鏡岡？

大田　鏡岡と土地では言いますけど。

平田　それから「シシクマヤマ」の「シシ」というのは、どんな字を書くのですか。

大田　現在は獣の獅子ななっておりますけど元々は「シホウにイタル」じゃないかと思っています。

平田　はぁ？

大田　四至に至る。

小園　境。

平田　ははぁ、四至隈。

大田　それが訛って、獅子隈になっているんじゃないかと思うのですけど。

小園　シシクマのクマは、動物の熊ですか。

大田　スミの隈。

小園　「隈」。スミという意味だもんな。

平田　結局、山の境界だっただろうからね。昔は自然境界の一つのシンボルだろうから。

大田　神話のかかわりは、どうだろうかと思う。

烽火であったとすれば。

平田　何か知らんけど、鹿児島県のあちらこちらに山の上に大きな石を集めた所があるので、これはなにものだろうと思っているのですが。

小園　これは興味がありますね。山頂にあるそういった巨石は。

平田　元気があれば、登るのだけど。

大田　山の上に大きな石があって、古代の祭祀の場所だと市来家隆先生が仮定されているのですが。紫尾山と関連し合っているような感じの所です。

小園　それと、狐ヶ丘のは持ちあげることが出来るような石じゃない。

平田　相当大きな石だよ。

小園　母智丘のも大きい。10個から20個ぐらい、こんな大きな石がある。私は直感的に、これは持ちあげたのだろうと思いましたけどね。

大田　かかえあげたのか、どうか。そこに自然にあったのを使ったのか、何か工夫があったとは思うけど。

平田　今思い出したけど、出水の愛宕神社の山頂に、そんな石がまとまっている。それと、いつかは登ってみようと思っているのが黒之瀬戸の上の山。笠山という所だけどね。あの辺では重要なポイントになる。あの山頂あたりは、いろんな所に連絡するのに絶好な所だから、いつかは登ってみようと考えている。恐らく、その上にも石が集められている可能性がある。

大田　それと串木野にも、鏡平ですか。何かそういう地名があるのではないですか。

平田　串木野ですか。

大田　串木野の人に聞いてみたのですが、調べていないので判らんということでした。

平田　串木野の金山のことをまとめた人から本が送って来ましたが、その本に「火立ヶ岡」という地名がありましたので烽火台の跡でもあるのかと問い合わせたのですが、藪になっているのでしょう。まだ返事が来ません。火立とか日立というのはやはり火をたいた場所ですから。

小園　そうすると時代的にはどうなるのですか。

平田　相当古くなって来るのではないかな。

大田　クマソ時代の烽火じゃないかと私は思う。

平田　クマソは別として。

小園　隼人あたりに遡れないかなという感じ。

平田　うん、ちょっと古い。

小園　離島なんかでは江戸時代でも連絡をとって烽火をあげたということがあるわけですが。

大田　薩摩町の場合、実は下の方にも上の方にも完全に囲んで作ったような所がある。境田城から永野城に連絡する烽火台の所じゃなかろうかと想像しているのですが。1560年、島津が攻めて来た時のもの。そういう時代のものじゃなかろうか、と話しておられるのを聞きました。

平田　一番新しいところで知られているのは薩英戦争の時、イギリス艦隊の鹿児島湾侵入を山川から烽火をあげて鹿児島に知らせております。薩摩藩の番所・烽火の配置は、記録にあります。

小園　遠見番所とか。

平田　遠見番山とかいう地名が残っているから。しかし、大きな石がある所は、それとはルートが違う。これは奈良・平安時代まで遡らなければいかんのじゃないかな。

小園　例えば狐ヶ丘でもそうですけど、なだらかな粘土層っぽい軟い土の上に載っているでしょう。母智丘もそうなんです。ゆるやかな傾斜があって、土を盛ったような形の上に載っているようです。

平田　そうとすれば、修羅に乗せて石を運んだのだろう。

小園　そんなことしか考えられないですね。

平田　それはとも角、今話題になったように皆が不思議に思っている石組みがあちこちの山頂にある。

鵜戸神社

小園　遅く来て言うのは場違いですが、鵜戸のところを読んだのですかね。

平田　鵜戸には入っていない。これは高屋の話。

小園　母養子山のという箇所の下の方に、鵜戸と全く同じようなことが述べてある。

平田　あぁ、洞穴のこと。

小園　乳が出る、と。乳房に水を撫でつければ、子供が飲むというような、ですね。これは鵜戸神宮と全く同じようなことでしょう。洞穴があって小さな泉が出ている。流れ出たとは書いてないけど、湧いてたまっている。

平田　これは鵜戸神宮と全く同じですね。

小園　鵜戸神宮の場合は乳房みたいな形になっていて、上から水が垂れて来るという。此処の場合は下から湧き出るという。

平田　泉のことを言っているわけでしょう。

岳と嶽

浜崎　地名を表す時に書く文字のことですが、例えば 160ページ の上に黒園嶽、下の方に叶嶽とか。「タケ」は、いわゆる「嶽(ガク)」です。この本には開聞嶽とは書かずに開聞山と書いてあります。近頃の地図をみますと大野岳とか開聞岳とか、いわゆる「岳」を書いてあります。それで、町で小学校の副読本を作る時に、大野岳の上に大野嶽神社があるとこんなふうに文字の違ったのを書くようになるわけです。地理学的にみて、山の地名などは「岳」の方に統一されているのか。その辺のところはどうなのでしょうか。

平田　昔は、よく「嶽」を書きましたけど。

浜崎　地方では、皆「嶽」です。ほとんど「嶽」であって、しかも登記所の地籍図などをみても、難しい字の「嶽」になっている。それで、どっちを書くべきか。地籍図のとおりにすれば、皆、字名は「嶽」になっているのですが。

平田　当用漢字を使うということなんでしょう。新聞社の用語もやさしい画数の少ない字を書くようになっていますね。明治の頃は、岳・嶽・山・岡とどんなものを地理学的には、こう呼ぶのだと使い分けがあったでしょうけど、今はそれがなくなって、ごっちゃになっている。

浜崎　国土地理院あたりで、そのでこぼこを統一しとるということはないですか。

平田　それは、ないようです。

浜崎　はぁ。

平田　その地方・地方の使い慣れている言葉にしたがっているのじゃないですか。

浜崎　本屋に聞いてみますと、これは役場から集ったものを原稿にして、印刷しております、と。

平田　恐らく、そうでしょう。

浜崎　頴娃町の場合は、役場のどこで出したかというと、建設課か、どこだろうか。教育委員会ではなさそうです。皆が適当に原稿を作って、印刷屋に渡した。そんな印象を受けるのです。それで小学校の副読本も非常にまちまちになっているのです。こんなのを何とか統一しなければ。

平田　しかし、これは強制力はないもんな。

浜崎　国土地理院あたりで、「岳」はこんなふうに統一すると言ったような何か基準があるのじゃなかろうかと思うのですが。

平田　それについては、明治の地理の参考書とか地理学概論なんていうのを読んだ方が反って区分がしっかりしていると思います。

浜崎　登記所にある字名は難しい「嶽」で「岳」ではない。こんなふうに決っとると言えば、行政当局の方は。

平田　登記所のものも江戸時代の役人たちが書いたものに拠っていますから。

浜崎　あれは明治22年に、字名が全国的に。

平田　統一してますからね。それぞれの村役人が

書いていた文字をそのまま踏襲して用いている。

浜崎　間違っているのは間違ったとおりに登記してしまってあるわけですから。

平田　その辺は整理されていないから仕方がないのじゃないですかね。

小園　韓国岳であっても「嶽」を使ったのもあるけど、江戸時代は「岳」を使っている。人名とかはなかなか変更出来ないけれども、地名とかいうのは最近は簡略化の方向ですね。

浜崎　普通の簡略の方でも、実は今度「遣唐使」の記念碑を作ったのです。

平田　あぁ、石垣浦に。

浜崎　それで、平山画伯に頼んで書いて貰った。「薩摩国石籬浦」と。薩摩国の「薩」も「メ」になるのか「立」になるのか、これを調べるのに一苦労しました。いわゆる康熙字典の方は「メ薩」になっていますね。ところが、役場の町民課の方に行くと、戸籍係の方に法務省の民事局からの通達がある。人名に限って「薩」の字は「立薩」でもよろしい、と。そういう通達がちゃんと行っているのです。

小園　本来は「メ」でなければいけないのですな。

浜崎　薩摩国は「メ」です。薩南工業高校なんかは「メ」です。そのような通達は法務省から役場に来ても、教育委員会には来ていないようです。

小園　どこかで俗字になっているのですね。

浜崎　俗字？

平田　それは、そうだろう。薩摩の「薩」もそうたろうし、菩薩の「薩」なんかも皆そうだよね。

小園　俗字に慣れているものですからね、教員というのは。メがあるでしょう、あれは。

浜崎　教科書はほとんど「メ」のはずです。社会科の教科書はそうなっている。あれは基準がないと困るのだけども。

小園　霧島峯と霧島山という言い方、それと霧島岳というのもあります。

平田　昔の人はいろいろな言い方をしていたと思うのだけど。

小園　僕なんかは、岡というのはともかく、山というのは峩々たる山という印象をもつし、なだらかなのを丘というふうに読んでいる。岳というのは、どうも混乱してしまう。

松浪　オカも二文字ありますね。

浜崎　岐阜県の「阜」を書いたものもある。

松浪「阜」という文字も。

平田　岡山県の「岡」と。

松浪　峯も二つ付くでしょう。峯と峰。それからもう一つ。

平田　「岑」もある。

松浪　「嶺」という字もあります。

平田　いろいろあるなぁ。

松浪　「タケ」の場合も、万葉集などには新字体では出ていません。旧字体。意味は新字体の、先程いわれた「岳」です。

小園　丘の下に山が付いた形ですね。

松浪　そうです。丘山ですね。

小園　山のないのがありますね。それから岡山県の「岡」もありますね。

松浪　山があるのは、岡(㓝)じゃなくてあれは岳(㓝)じゃないですか。

小園　「岡」も中に山が付いています。（笑い）。やっぱり、山に関係があるのですね。

平田　この辺で休憩しましょう。

本町：ホンマチとモトマチ

平田　配布した資料について説明します。外城名と書いてありますが、県内の「麓」を全部あげてあります。そして「麓」の所在地が現在のどこに当たるかということ。ご覧のとおり、ほとんどが小学校になっている。喜入小学校、今和泉小学校、山川小学校、と。小学校のある所が、もと御仮屋であった場所が多い。その意味でこの表は利用価値が出て来るのじゃないかと思います。NO.4に参考文献をあげておきました。鈴木　公『鹿児島県にあける麓・野町・浦町の地理学的研究』という論文があります。それを読んでメモを取ったものですが、その頃は麓に関心があり、麓のメモは取ったのですが、野町・浦町のメモはもらしました。

出水に行ってから気がついたのですが、ホンマチとモトマチと同じ字で二通り読むのがあるのです。阿久根は「ホンマチ」という。出水も「ホンマチ」ですが、野田・高尾野は「モトマチ」と読む。それで、ホンマチと読むのは○を付けてあります。モトマチと読むのは●を付け、一目で分かるようにしたわけです。地名大辞典（角川）では、大字は立項されていますが、地名大辞典の中に出て来るホンマチとモトマチを拾ったら、大字関係ではこれだけしかないわけです。これではどうしようもないので知っておられる小字や俗称を出して貰おうと考えた次第です。

それから、これは『島津家列朝制度』の「浦」の一覧です。浦の数が合計 142になります。列朝制度の「巻六の三〇二」という資料。

それから、これは1956年ですから、もう40年以前のもの。原口虎雄先生なんかが、まだ助教授。それに村野守次、桐野利彦、紀健一郎という先生方が、40才前後の頃、南日本新聞に連載で「郷土のくらし一世紀」というのを出されました。これは単行本になっていないのです。野町とか浦町というのを調べられる時は、図書館に行ってこれを利用されたらと考えます。判りやすくまとめてあります。

木場　原口虎雄先生の『町方の研究』という本が出ていますが、野町・浦町を詳しく書いてあります。

平田　恐らくそれを基にして、ほとんどの郷土誌が野町・浦町の説明をしていると思います。

肥後　いつですか、日付は。

平田　日付は1956年 5月。これは１年間続いています。NO.1が1956年 4月 4日に始まって、1956年 6月に終っています。週に３度か４度。郷土誌などをまとめられる時は、これの方が利用度が高いかも知れません。

それで、浦町を読みあげますから印でも付けて下さい。142 あるうち、大隅国では内之浦・垂水それから志布志、串良の唐仁町、小根占の浜町。これが浦町５ヶ所です。薩摩国では米之津の町。米之津は２枚目になりますかね。168ページ の上、終りの方、出水のところ。同じく出水の今釜の町。荘の町。阿久根は「町浜」と書いてあります。浜町ですね。川内は薩摩国水引になりますか。五代町、森屋町ですか森尾町ですか。

木場　森尾。

平田　宮内、大小路町、川端町。高目町、高揚、どっちですかね。

木場　高目。

平田　高目町、白和町。

木場　平佐です。

平田　平佐の白和というのがありますね。その右隣。それから、向田、隈之城。東郷の白浜、串木野の浜町、市来の唐仁町・湊町。山川は、指宿のところに出て来ないですね。今和泉は、出ていないですね。それならば、鹿娃の中に入るのでしょうね。山川の浜町というのがある。そして指宿の浦町、谷山の松崎町。これだけ19ヶ所が浦町として商売を許されていた町です。あとの浦は商売を許されていなかった。獲るだけですね。これは原口虎雄先生の調べです。それで、何故浦町まで調べたかというと、浦町がモトマチに化けているかなと思ったからです。

そうでもなさそうなので、ホンマチとモトマチは一体どこでどう違うのか。具体的に実例を出して貰った方がいいと考えた次第です。

木場　私が住んでいる隈之城の例を出してみます。（資料配布）。平田先生の表の中に隈之城とあり、向田本町という所にホンマチの印がありますが、向田本町というのは最近、町名変更で出来たホンマチであり、本来のものじゃありません。モトマチの所に印を入れて下さい。

平田　これを「モトマチ」と読むのですか。

木場　はい。私の所では、名寄帳に「モトマチ」となっております。場所は地図に印を付けてあります。隈之城駅からまっすぐ東の方に入って、隈之城川を渡って田圃を通って突き当ったところが宮崎の集落です。宮崎町は現在三つの集落に分かれております。北の方に赤沢津、真ん中が宮崎、そして南の方に勝目原です。モトマチと言われる所は、地図にカッコをしてあります。脇を通っているのが川内の町から市比野に通じる県道です。それでモトマチは条里制遺構にかかわる地名ではなかろうかと考えているわけです。真ん中に線を引いてありますが、東西の中心線になります。日暮丘と田重嶽を結んだ線が東西の線です。それを中心にして条里制が施行されたのではなかろうか、というのが藤井先生の説です。ここから西の方が西手村、東の方が東手村。それが大字東手と変遷して、現在は川内市宮崎町となっております。本流が川内川、その支流が隈之城川ですが、実際は隈之城川を区切って東手と西手に分かれております。それで、モトマチは条里制の面からいうと、東の一条から二条あたりに当るのではなかろうかと推定しておるわけです。この字絵図の真ん中の方に、真っ直ぐ南北に通じた道路があります。これが東の一条と二条の分かれ道ではなかろうか、といわれているところです。そういうことで、台帳面ではモトマチとなっております。これが条里制と関係がある地名として妥当かどうか、皆さんに検討して頂きたいわけです。モトマチは私が居住する所ですので、特別関心があり、今日は出て来た次第です。

平田　モトマチに住んでおられるのですか。

木場　モトマチの一角に住んでおります。

平田　この表の中の向田本町(ホンマチ)は新しいもの。それではモトマチの欄に●印を付けて下さい。一つ増えるわけです。

木場　それで、条里制のいわゆる東二条の二里か三里ぐらいに当るのですかな。地籍を調べてみましたら、5,943 坪。それに道路が通っておりますので大体その半分。ちょうど二坪ぐらいに当るようで、条里制で区切られた宅地の中心ではなかろうか、と考えているわけです。条里制地割の地名が７～８箇所、数字で残っております。この字絵図の中でも、「三十六」と「市の坪」が隣り合わせになっております。また、モトマチの隣に余村(ヨムラ) というのがあります。

平田　アマリの村、余村。

木場　これも条里制地割の中で生じた余りの名残じゃなかろうか、と思うわけです。

小園　一之坪と三十六とは。

平田　隣り合わせです。一之坪から始まって千鳥で行くと、三十六はその隣になります。

木場　藤井先生の説では、東から千鳥形に番号を付けて行ったと言います。

平田　条里遺構があるのは判るのですが、「町」となるともっと後でなければ「町」は出来ないわけですから。

木場　その「町」とは意味が違うのじゃないか。

藤浪　田圃の「町」のようなところ。

平田　田圃の「町」、原点の「町」ということ？

木場　えぇ、そういうこと。

平田　「町」が、当て字というわけ？

木場　あて字じゃないわけです。「町」がいくつも書いてありますが、ここにも口町と。

平田　口町がありますね。

木場　ここは何と言いますか、市場風の「町」ではありません。½ぐらいが宅地で、あとは畑です。ここに住んでいる人々は歴史的にみますと、薩摩郡司の薩摩氏です。郡司の薩摩氏は、この付近に沢山住んでおります。私は、これをいわゆる地ごろ（土着）の人たちだと呼んでおるのです。太閤が島津を倒しにやっって来た時に、平佐城に籠城して戦った者の子孫が、文禄四年の所替えで平佐から出されて今の宮崎に移って来ました。そういうことで、いわゆる薩摩氏の流れとそういうような移住者とが合流して出来た集落になります。

平田　商売の「町」ではなくて。

木場　商売の意味の「町」ではありません。

平田　違った意味の「町」になったな。

小園　新しいのでしょう、町の名前は。モトマチという所は江戸時代ですか。江戸時代以降ですか。

木場　いや、もっと古い。

平田　野町のあった所がホンマチになっている可能性が強い。とすると、これはもっと古い。

木場　本町(モトマチ)と呼んでいる。

平田　モトマチと同じ字で読むのは、一体、なにものか、ということで今日のテーマとしたわけですが。具体的な例が増えなければ、話を進めて行きようがないのだけど。頴娃とか指宿の方面に詳しい浜崎さん。ホンマチ・モトマチはありませんか。

浜崎　知覧の南の方ですが、岡店(オカミセ)と呼んでいる所があります。いわゆる野町ではなく、野町以前に「岡店」と呼んでいたのでしょうから、その名残じゃないか。

平田　野町のない所には、岡店とか中宿(ナカヤド)という、いろんな品物を扱う店があって、役人たちが来た時には泊める宿にもなった。宿屋の代わりをするものもあった。町が出来ない所は岡店とか中宿で代用していたわけです。

浜崎　野町の一種。

平田　野町の一種です。町まではいかないわけです。各郷にあったと思います。

浜崎　今でも知覧には残っております。

平田　知覧は岡店ですね。知覧郷。上から４番目。これはホンマチの代わりに岡店というのを書き込んで下さい。

小園　岡という字を書くのですね。ミセは見世物の見世ですか。

平田　ふつうの「店」。

小園　今までの説明を聞くと、ホンマチは江戸時代、モトマチは条里制とからむかも知れないという

平田　それは、まだ。

小園　本来、別のものですね。

木場　性格がちがう。モトマチというものとホンマチとは。

浜崎　モトマチは「元」の字じゃないですか。

平田　「元」の字を書くのは串木野にあるのですよ。これは恐らく「浦町」を「元町」と言っていると思う。だから、ホンマチ・モトマチの例を多く確かめて、この表を埋めていった方がよい。見当がつきやすい。

青柳　吉田は「町」ではないけれど「本吉田（モトヨシダ）」と言っているのがありますね。

平田　本吉田。あれは、本名(ホンミョウ) 。本吉田というのがあるの？

小園　同じ場所をいうのじゃないの。

平田　本名をいうのじゃないの。本吉田ですか。何でも似たようなものを出して下さい。

納　鹿屋市の場合、旧市役所後が本町(ホンマチ)。以前から不思議に思っていたのですが、野町という町はないですね。

平田　野町が本町になったのでしょう。

納　野町のところが本町なんですね。鹿屋の牛留さんから聞きました。

平田　野町の研究とか浦町の研究というのは原口虎雄先生以後、あまり進んでいない。

小園　中世では「町(マチ)」というのは出て来ないです。建久図田帳などでも、小字程度が限度です。

平田　一番古いのは国分の向花町・新町じゃないかな。

小園　そうです。

平田　あれは鎌倉時代には出て来るのじゃないか。

木場　室町時代に出て来るのではないですか。

平田　室町時代には確実に出て来るでしょうけど〔嘉元三年(1305)四月二十日の台明寺文書に「牟花町参段」とみえる〕

小園　そうであれば、かなりの集落があった、ということでしょうから。

平田　それは、そうです。

浜崎　鈴木先生の本では、私の郷里、頴娃の石垣は「石垣浦」という扱いで載せてあります。

平田　石垣浦ですか。

浜崎　「浦町」扱いにしております。昔、店屋が伊勢暦などをおとくいさん達に配るものでしたが、それに大きく「石垣町」と書いて「いしがけまち」と読ませていました。浦町の一つの名残だと、私は見ておるのです。

平田　頴娃町は「浦」が多いですね。その中で、「石垣」が浦町だったのですか。

浜崎　戸数から言ったら、宮ヶ浜なんかよりも、ずーっと多いですよ。浦町としての商業戸数は。

平田　頴娃町には「モトマチ」とか「ホンマチ」というのはないわけですか。

浜崎　名前はありません。ただ「本町(ほんまち)」と書いたのは出て来ます。頴娃町に「野町」があったということは原口先生の本には出て来ます。

平田　郡村に野町があったのですか。

浜崎　はい、戸数までちゃんと出ております。

木場　これには「野町」は出て来んとですな。

平田　はい、野町の資料はありません。

浜崎　『吾平町郷土史』に原口先生が書かれたのがあります。

木場　野町は全部出ていますよ。原口先生の本に。

平田　そうですか。

浜崎　「市場」の立っておった所なども出ています。『吾平町郷土史』に。

木場　野町・浦町、全部出ています。

浜崎　頴娃町の新福に、野町の墓が一つ見付かっています。浦や門の墓は沢山ありますが。

平田　そうでしょうね。士・農・工・商では一番下の方だから。

浜崎　野町の墓というのは、なかなかないです。

平田　ほとんど成長していなかっただろうからね。

浜崎　「野町」とせんで「町」の「だれそれ」と名前が載っている。

小園　「門」と同じですね。

浜崎　はい。

小園　門墓と同じだ。

平田　だから、「野町」じゃなくて「町」という表現だろうな。

浜崎　「町」と書いてありますね。「町」の「○○衛門」と。

平田　どなたか、他に。鶴田はどうですか。

大田　鶴田は野町があった所に「町」という集落があります。残っております。

平田　ただ「町」で「元町」とは言わないのですね。佐志・黒木、その辺はどうですか。

大田　野町があった所で「市が立つ」と言ってますけどね。市が立つ所は、エビスさんが祀ってある。

平田　エビスさんとか大黒さんが祀ってあるはずですね。なるほど。

大田　薩摩町では、北方で市が立ちよったらしいです。今の求名の町じゃなくて、もとは北方。中津野との境ですか、あすこであったらしいです。

小園　「町」というのは、現在の「町」を想像してはいけないわけですな。定期的な、不定期的な市場を開いた所を「市(マチ)」というのだろうな。

大田　鶴田町の場合はそうではないでしょうか。

小園　霧島町あたりは比較的新しい所だから、そんなものはない。聞かないもの。

大田　だんだん時代が変っていくうちに店が集って来た。

平田　商人の町が野町であり、そして浦で商売を許されるのが浦町。

小園　本町(ホンマチ)は？

平田　本町は野町が名前を変えたと思う。

納　鹿児島市内でいえば、上町などがそういうことになりますね。

平田　上町・下町・西田町でしょうね。

納　商店街があった所。

平田　それから、横井町。

納　あぁ、横井町(ヨケンマチ)。

浜崎　鈴木先生は大門口もあげておられます。

平田　大門口？

浜崎　それから、垂口(タレンクチ)という所があったそうですが、垂口というのは何ですか。

平田　「垂」というのはあちこちにありますね。

肥後　「町」の入口。

大田　鶴田では「タレンロ」と片仮名で書いてある。

平田　「町」の入口を言います。

浜崎　あぁ、そうですか。

肥後　入来に石柱が残っていますよ。それから、加治木も「垂ん口」という地名が残っています。国分の敷根にもあります。

浜崎　野町の入口になるのですか。

肥後　「町」の入口ですね。士族と平民の区別があったのですね。これ（約1尺）ぐらいの六角形の石柱が立っていたのです。

小園　指定の場所ですね。

肥後　ええ、町の入口にあって指定されていた。雑居は許されていない。（写真を示しながら）これも入口だと思います。敷根浦の入口じゃないか、と思うのです。海岸沿いですから。

小園　どんな字を書くのですか。

平田　「垂」と「口」を書く。

松浪　加治木にもあるのですか。

肥後　えぇ、垂ノ口が。

平田　帖佐にもありはしませんか。

肥後　そうですね。

小園　ここは幡か何かあったのですかね。

肥後　そうですね。

小園　暖簾ですか。暖簾のことですかね。

肥後　縄が張ってあって、下っていたそうです。

松浪　町門というのもあった。町の入口ですか。

平田　上町の門というのがあったのですよ。『三国名勝図会』では、竪馬場の所に。

肥後　それから国分の本町(ホンマチ)は、東町・西町・本町とあります。

平田　国分ですか。2枚目、3ページの上の方。東町と西町に分かれるのですね。それに唐仁町。

肥後　本町も唐仁町もあります。本町は場所が違います。西町・本町・東町、それに続いて唐仁町があるのです。

平田　あぁ、そうですか。

小園　根占、いわゆる小根占の唐仁町は、あれは何に載っていたかな。

肥後　根占はあったかも知れませんね。

木場　柏原にも唐仁町がある。

小園　唐仁町というのは割合にありますね。

平田　唐仁町・高麗町を全部探して、その側の「町」を調べる面白いかもね。

小園　鹿児島県の「町」の名前がいつ頃から出て来るかをチェックする必要がありますね。入来文書にも出て来ると誰か言ったようだから、そういう例を拾いあげたら。大体いつ頃から、そう言った集落をみることが出来る、と。

平田　鹿児島の場合、ほとんどが浦町・野町から出来たのだろうけれども。

小園　村・麓・町。

平田　「麓」に附随しての「町」だものね。所在から言えば。

小園　そうであれば大体いつ頃から「町」というようになったのを調べると面白いと思うけど。

平田　調べ甲斐のあるテーマだろうけれども。

小園　例えば「一遍上人絵詞」に、「福岡市」というのがあるね。沢山の往来があって店がある。

平田　その「市」を「マチ」というふうに読む。

小園　「市(マチ)」な。そう出て来ますからね。

平田　それから問題提起をされた「モトマチ」の「町」、田圃の大きさに「マチ」という単位があるかな。

木場　ありますよ。「セマチ」とか。

平田　あぁ、セマチ。

肥後　帖佐にありましたね。

小園　あれはセマチというのですか、セマキというのですか。

肥後　セマチ。

小園　一升蒔・二升蒔というのがあるけど。

平田　それは別だ。

木場　マチとマキは別。例えば田圃が二つに分かれていれば、セマチ二つという。

小園　筆(ヒツ)のことですかね。

木場　はい。

小園　畝町でしょう。

松浪　長さの単位とか面積の単位も、何か関係があるのですかね。例えば、一町歩・二町歩。あれを「町(マチ)」と言っていたのですかね。

木場　あれは「町(チョウ)」であって、「町(マチ)」とは違う。田圃などは本来は一かたまりで一筆になっていた。それが二筆に分かれ、四つに分かれて来ると「セマチ」と呼ばれる。

小園　あぁ、そうですか。一つ一つの単位ではないのですか。

木場　「畝町二十」などという。

小園　あぁ、同筆がある。

浜崎　「畝町」というのは一升の種を蒔く。

平田　それは「一升蒔」

浜崎　それとは別でしょう。

小園　「一束(ツカ)・一束」という南方系の呼び方もありますね。

平田　この「モトマチ」というのは何か違うような気がする。

木場　モトマチの「マチ」と、現在の「町(マチ)」とは本来違う。

青柳　この小字図の中にも中津町・桂町とかがありますね。あの辺を歩いた時に、他にも○○町と田圃に書いてあったような気がする。

平田　口町、矢倉町があるな。

青柳　これは何ですか。この「町」は。

木場　その「町」は、ちょうど前を平佐川が流れていて、平佐川から宮崎集落に入って来る入口のこと。最初に「口町」に突きあたる。町の口という意味のもの。

松浪　帖佐では野町と浦町がはっきりしています。

平田　あぁ、そうですか。十日町や納屋町。

松浪　「十日町」が野町ですね。

平田　あぁ。

松浪　いや、「十日町」が浦町です。

平田　納屋町がありますね。

松浪　「納屋町」が野町です。

平田　なるほど。

肥後　納屋町はどれですか。

松浪　納屋町は鍋倉の向い側です。

平田　もう一つ、鈴木先生の論文では外城の所在地でクェッション＝マーク（？）の所があります。中郷はどこですか。大島馬場ではないのですか。木場さん、中郷の麓は？

木場　中郷の麓は、あれは、ちょうど大島との境になるわけで、何かな字は。「外園」かな。安国寺のある辺だと思うのですが。鶴峯あたりに郷士集落があると聞きます。今言うた大島馬場の隣に接する中郷の辺は百姓の集落ですから、鶴峯あたりに武士の集落があったのでは。はっきり、どこが麓になるのかは知りません。

平田　東郷はどこですか。

木場　東郷は斧淵。

平田　斧淵にあったのですか。

木場　えぇ。

平田　誰か、このクェッション＝マークをご存知でしたら。

肥後　牛根は、牛根麓です。

平田　牛根麓。小学校の所？

肥後　麓には小学校は、いいえ、ありません。麓集落。

木場　隈之城の場合、仮屋馬場か御仮屋と書いてありますが。

平田　仮屋馬場？

木場　所在地としては、これは麓だけですから、この仮屋馬場というのは、地頭館がこの麓から。

平田　仮屋馬場に移った。なるほど。

木場　中心は、麓です。

平田　日当山はどこですか。隼人町の日当山は？えーと、2ページの下から４つ目。

小園　日当山は昔の小学校の所ではないでしょうか。今は家畜市場になっているかな。あるいは老人ホームになっている。

平田　じゃー、ありがとうございました。結局、要領を得ないようなことかも知れませんが、「麓」は割と研究が進んでいるが、「野町・浦町」は原口虎雄先生・鈴木　公先生がやられた以上には進んでいない、ということ。このような表で、一目で判るように整理することも必要だと思います。もっと具体的にホンマチ・モトマチの例を各郷土史を読んで整理する必要がありそうです。何かありましたら。

肥後　原口先生の本は単行本ですか。

木場　もう以前に出た本ですから。

平田　『町方の研究』というのですか。今日は以上のようなことで問題提起だけで終ります。ありがとうございました。

麓・野町・浦町の所在地

（薩摩国）

外城名	所在地	ほんまち	もとまち	浦町	その他
吉田	町役場				
谷山	旧町役場（谷山支所）				
喜入 ※	喜入小学校				
知覧 ※	知覧区裁判所				
今和泉 ※	今和泉小学校				
指宿	旧町役場				
山川	山川小学校				
頴娃	頴娃小学校				
川辺	町役場				
山田（勝目）	？				
鹿籠 ※	桜山小学校	○本町			
坊泊	竜厳寺境内				
久志秋目	田実氏宅				
加世田	加世田小学校				本町（ほんちょう）
阿多	阿多小学校				
田布施	遠矢氏宅				
伊作	伊作小学校旧地				
永吉 ※	（梅里のお仮屋）				
吉利 ※	吉利小学校				
日置 ※	旧役場				
伊集院	伊集院小学校				
市来	町役場				
郡山	郡山小学校				
串木野	二本松氏宅			本浜町	元町（もとまち）
甑島	里小学校				
百次	和田馬場				
隈之城	麓→仮屋馬場	向田本町			
平佐 ※	平佐小学校				
高江	峯山城山麓				
山田（永利）	山田麓				
樋脇	樋脇小学校旧地				
中郷	？				

外城名	所在地	ほんまち	もとまち	浦町	その他
東郷	？				
水引	宮内麓公民館				
高城	妹背城山麓				
阿久根	山下→栄町	○本町			
野田	野田小学校		●本町		
高尾野	麓部落竹添		●本町		
出水	出水小学校前	○本町			
長島	鷹巣小学校				
入来 ※	入来小学校				
山崎	旧町役場				
宮之城 ※	盈進小学校				
薗牟田 ※	薗牟田小学校				
大村	大村小学校				
黒木 ※	黒木小学校				
佐志 ※	佐志小学校				
鶴田	旧役場				
羽月	羽月小学校				
山野	山野小学校				
大口	大口小学校				

（大隅国）

外城名	所在地	ほんまち	もとまち	浦町	その他
本城	本城小学校				
曽木	？				
湯之尾	湯之尾小学校				
馬越	馬越小学校				
吉松	？				
栗野	栗野小学校				
横川	町役場				
踊	牧園小学校旧地				
日当山	？				
溝辺	溝辺小学校				
加治木 ※	加治木高校		●本町		
山田	上名小学校				

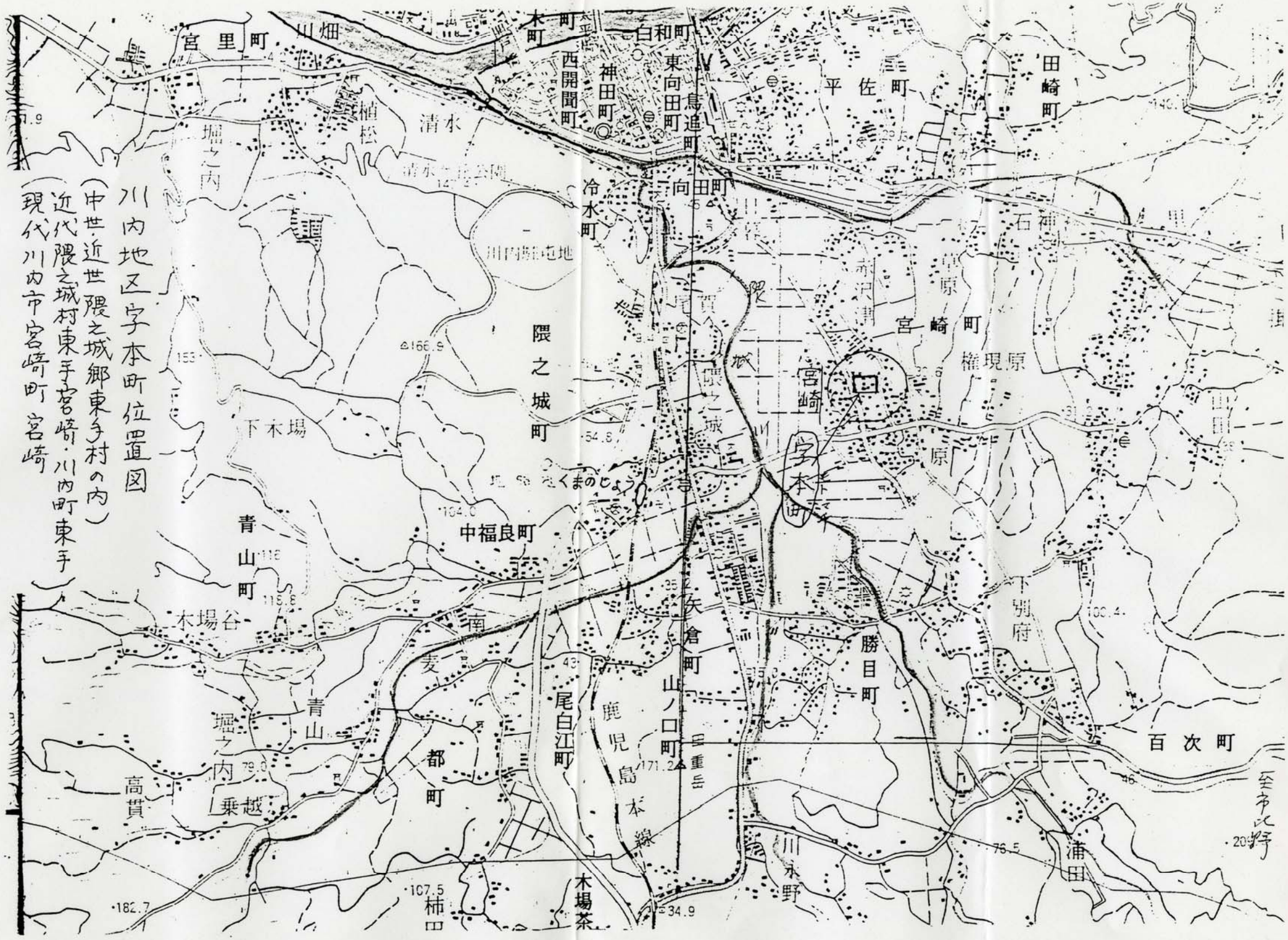
外城名	所在地	ほんまち	もとまち	浦町	その他
蒲生	蒲生小学校				
帖佐	帖佐小学校				
重富 ※	重富小学校				
国分	国分小学校	○本町			
清水	松山氏宅				
曽於郡	東襲山小学校				
敷根	旧役場				
福山	福山小学校				
牛根	？				
桜島	旧桜洲小学校				大正３年埋没
垂水 ※	垂水小学校	○本町			
新城	？				
小根占	神山小学校				
大根占	町役場				
田代	勝尾小学校				
佐多	薬園と隣接				
百引	旧役場				
高隈	鎌田氏宅				
鹿屋	旧市役所	○本町			
花岡 ※	鶴羽小学校				
串良	串良小学校				
高山	高山小学校				
姶良	町役場				
大姶良	川上氏宅				
内之浦	旧役場				
財部	財部小学校				
末吉	末吉中学校	○本町			
恒吉	恒吉小学校				
市成 ※	市成小学校				
岩川	？				
種子島 ※	榕城小学校				

（日向国）

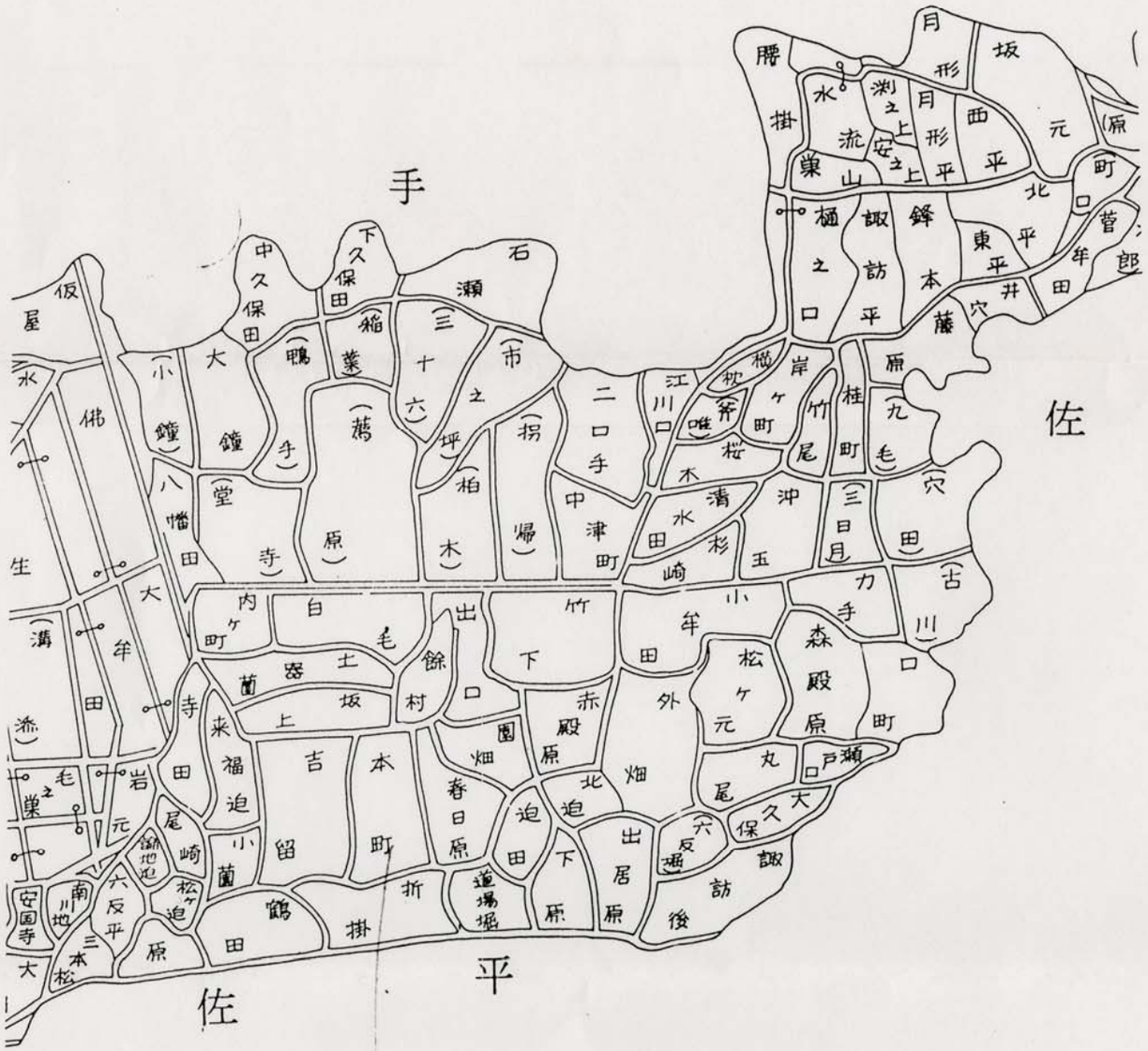
外城名	所在地	ほんまち	もとまち	浦町	その他
松山	松山小学校				
大崎	大崎小学校				
志布志	？				

《参考文献》

鈴木　公『鹿児島県における麓・野町・浦町の地理学的研究』S.45.



川内地区字本町位置図
(中世・近世隈之城郷東手村の内)
(近代隈之城村東手宮崎・川内町東手)
(現代川内市宮崎町 宮崎


手
佐
佐
平
月形坂元
月形平
西平
北平
東平
井穴
菅生田
諏訪平
鋒本藤原
樋口
水流
渕上
安上
巣山
勝掛
岸ヶ町
桂町
竹尾
九毎
穴田
三日月
力手
古川口
森殿原
松ヶ元
丸尾
戸瀬口
大久保
諏訪後
六反通
出居原
下原
北迫
畑
外
小牟田
沖玉
清水田
杉崎
桜木
唯
斧
枕
江川口
二口手
中津町
竹下
赤殿原
畑園
春日原
迫田
道場堀
折掛
鶴田
本町
吉留
出口
餘村
白毛
土器
内ヶ町
坂上
来福迫
小薗
寺田
尾崎
松ヶ迫
岩元
六反平
三本松
南川地
諏訪迫
大寺
毛巣
田牟
寺
大
溝
佛
仮屋
水
生
安国寺
大
八幡田
堂
寺
大鐘
小鐘
鴨手
縮葉
蔦原
三十六
市立坪
柏木
拐帰
石瀬
中久保田
下久保田

地名研究会報

第４６号
平成７年９月３日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４６回例会　　平成６年９月４日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江平　望・納　栄蔵・片岡八郎・小原親英・長谷川順一・花園正志・肥後芳尚・平田功美子・平田信芳・鉾之原矢七（計１１名）

Ⅱ．麓藩名勝考読会　P.160 ～ P.163

（話題となった地名および事項）　吾平山陵・吾平と姶良・飴屋小道・セモン坂・家鴨馬場・人名地名・馬場と小路

吾平山陵

納　163ページの上の段、後から 6行目のところに「高城郡可愛山陵、肝属郡高屋山陵ト此吾平山陵ヲ神代三陵ト称ス」と書いてありますが、高屋山陵というのは溝辺の高屋山陵のことですか。

平田　内之浦の高屋山陵のことです。

納　あー、あの上のなぁ。

平田　実際に登ったことはありませんが。

納　高山から登って国見岳の下の方におりる所にある。

平田　そうだと思います。

納　そのことですか。

平田　吾平山陵は川を隔てて丸木橋があることはあるのですが、入って行けませんしね。

納　小学校６年の時、吾平山陵に行ったことがあります。水害以前にですね。その時の話では子供を育てるのに飴をしゃぶらせた。宮崎県の鵜戸神宮に乳飴というのがありますが、吾平山陵にも飴屋屋敷というのがあって、飴を作って赤ん坊にしゃぶらせたんだという話を聞いたことがあります。それで、両方とも作りを見れば、鵜戸神宮にしても吾平山陵にしても、同じように岩窟の中に入っていますからね。鵜戸神宮も岩窟でしょう。

平田　宮崎の鵜戸神宮？はい。

納　吾平山陵も岩屋の中ですね。信仰の形からみると、似てますね。

平田　そうですね。信仰の対象にはなるでしょうね、古代の。ただし、日向の鵜戸の岩屋から可愛山陵までは行けませんよね、山の上で。時間がなく、行ったことはありませんけど。

江平　ウトというのはウツロ。穴ということじゃないですか。

吾平と姶良

納　吾平山陵の場合、土地の人々は「エラ」という。「エランサンリョウ」。こっちの方は「姶良（アイラ）」、昔は姶羅と書きました。吾平の人はエラというし、姶良の人はアイラという。鹿児島方言の発音から言った場合は両方とも「エラ」と読まれるのですね。ないごて（何故）、こっちの方はアイラと言って、エラと言わんたろかいと思って。こっちでエラという人は聞いたことはないのですが。姶良郡を「エラ」郡というのは。

平田　うーん、どうだろう。姶良郡は、まぁ時代が新しい。桑原郡の西側の方を、島津氏が統一してから特に名付けた郡だから。しかし書き誤って始羅郡と書いたものだから、幕府の巡見使から元通りの始羅郡を書けといわれる始末で、始羅郡と書きなが

ら恐らくアイラ郡と読んだのでしょうけど。姶良郡は新しいので、なじみが薄いのじゃないかな。江戸時代は「郡」という単位じゃなくて「郷」単位で物事を処置しますから、あえて姶良郡といわなくてもよかったのじゃないですかね。

納　私が吾平で聞いたのはエランサンリョウ・エランマチだったのです。

平田　鹿屋の大姶良(オオアイラ) は？

納　オエラと言います。

平田　オエラと言いますか？

納　オエラ、エラ、エランマチと言います。

平田　大隅地方の独特の訛りでしょう。

納　ないごて、こっちを「エラ」と言わんたーろかい、と逆に考えるわけです。

飴屋小路

鉾之原　さっきの飴屋の話。

納　飴屋屋敷（アメヤンヤシッ）。

鉾之原　どげな飴、カライモ飴やろ。

平田　鹿児島にも飴屋小路(アメヤンスッ)　というのがありました。このすぐ近くにあったのですね。

片岡　造士館の学生の連中が、学校帰りに飴屋に寄っていたか飴屋小路になったという。

肥後　どの辺ですか。飴屋小路というのは。

平田　金海堂横の筋じゃないですか。

肥後　あれですか。

鉾之原　林田のところから入って行く、ちょこっとした道路。

片岡　ちょっと違います。明視堂のところ。

納　昔の明視堂の前のところですか。

片岡　明視堂の横の通り。

納　前の通りは？

片岡　中筋(ナカンスッ) です。

納　深川という所がありました。

片岡　深川の前に路地があったでしょう。あの横に行く道。

平田　今日のところでは、問題にするとすれば、「アイラ」。アイの意味はまだ分かりませんが、ラは「ここら・あちら」と同じ地名語尾。いずれアイの意味が判って来るだろうと思いますから、それまでおいておくことにしましょう。後の30分はフリートーキングにしましょう。

セモン坂

平田　今朝の新聞に今日の会合のことが出ていたらしく、出掛けに電話がありました。鹿児島に住んでいる長崎の方で、鹿児島のことにだいぶ興味を持ったおばさんだったようですが、お叱りを受けました。行きたいのに今朝出てどうするのか。（笑い）。女は出掛けたいと思ってもばたばたするのだから、と。そのついでに、長崎大学の先生から頼まれたのだが、セモン坂の由来を知らないか、と。左衛門という人が住んでいて、それからセモン坂になったということですと答えると、どこに聞いてもそれぐらいのことも聞けない。それぐらいのことしか知らないのか、と叱られてしまった（笑い）。地名研究というのは、そんなことだけを調べているのではありません、と言ったのですが。片岡さんなら、その辺のことを知っておられるのでは。

片岡　お袋があの辺で生まれたもんですから、子供の頃、よく通ったのですが。

肥後　セモン坂というのは？

平田　家鴨馬場(アヒイバァ) のところから上って大竜小学校の横に出る道です。江平先生はどうですか。セモン坂は？

江平　語源的なことは、あまり聞いたことがないので。

平田　私が一番近い所に住んでいて知らんのが問題なのですが、これはこういうことなんですよ。皆が興味をもつのは、岩山家との関係なのです。岩山家というのは、西郷さんの奥さん、イトさんの実家なのです。その先祖に岩山左衛門尉という人物がいて、その家のそばを通る坂道ということで左衛門坂（セモン坂）と付いた、と以前からいわれていることなのですが、その左衛門尉がどういうことをしたのか、いつ頃の人物か、ということについては何も書いてないのです。鹿児島の古い新聞を見れば書いてあるかもしれませんが、見ていないのでなんとも言えません。古い新聞をよく見ている唐鎌さんあたりが知っているのかなと思ったりしますが、彼に確かめてはいません。

私がセモン坂について親父から聞いたのは、こういうことなんです。明治10年９月１日、西郷さん達が実方からタンタドの坂を降りて来て、セモン坂に向かおうとしたら、セモン坂の上に官軍の姿が見えたというのです。池之上町から柳町に向かうところにセモン坂があります。セモン坂を越えて、以前、柳町の電停があったところあたりに私学校の生徒たちがよく行っていたまんじゅう屋があったそうですが、辺見十郎太が先頭に立って、二刀流で脇目もくれずに真直ぐ突き進み、官軍とにらみあっているうちに西郷さん達本隊は家鴨馬場・般若院小路を通って城山に入ったというのです。辺見十郎太がセモン坂を越えてまんじゅう屋にたどり着いたとき、刀を二本とも入口の前に突き立てて、「婆さぁ、今、戻っ来もした。お茶をたもんせ」と。そして、官軍の連中に「わい達も茶を飲まんか」と言ったそうです。辺見十郎太がそこまで言ったのかどうかはあやしいのですが、舎の連中の話はそんな武勇伝ばかりでした。そんな話からセモン坂・アヒイバァという地名を知りました。

家鴨馬場

平田　家鴨馬場のすぐ上に内城(ウチジョウ) があったのです。のちに大竜寺になります。城のまわりにアヒルとか水鳥を飼うのは昔は普通のことで、敵の夜襲を水鳥が騒ぐことによって知るということで、内城の北側にある川にアヒルを泳がせていたのだなと私は思うのです。ところが稲荷川や天文館のことなどの本を書かれた太原久雄さんが、あすこに加藤家鴨という武芸者どんが撃剣を教えていた家鴨道場があり、それから家鴨馬場という地名が付き、その前の川を家鴨川というようになった、と述べておられるのです。眼が見えなくなったために家鴨を名乗ったとのことなんですが、それ以前に身辺に家鴨がいたということがなければ家鴨とは名乗らないと思います。家鴨川・家鴨馬場が先で、家鴨道場は後だということです。今度出される『続かごしま地名ものがたり』にそのことを書きました。

人名地名

平田　鹿児島で人の名前が付くものに「四郎坂」というのがありますね。どこか、常盤の方に。

鉾之原　四郎ですか。

平田　まだその由来を調べてはいませんが。

納　私が知っているのは、その先に東郷殿小路というのがあります。

平田　東郷殿ですね。

納　弓東郷殿。それから小野町ですか、勝目殿のそば、というのがあります。

平田　そこは、その人が住んでいた所でしょうからね。

納　天文館の先には、日置裏門がありますね。それから加治木家今。現在は言いませんが。

平田　昔は、重富屋敷・祁答院屋敷・伊集院屋敷など、いろいろな呼び名がありましたね。

片岡　東郷殿小路の横が伊集院殿小路、その横が新納殿小路。

平田功　今和泉屋敷というのはどこにあったのですか。

平田　今和泉家ですか。今和泉屋敷というのは、現在の山形屋社長宅じゃないですか。西郷さんの石段を降りて来て春日町の方に向かい大竜小学校の方に行く左手の屋敷。あれが今和泉屋敷だと思います。

平田功　東千石馬場に博多屋さんの駐車場がありますが、駐車場の所が今和泉どんの屋敷だった、と聞いたことがあるんですけど。

平田　天保絵図を見て下さい。『鹿児島のおいたち』という鹿児島市が出した大きい本がありますが、それの裏表紙に貼りつけてあります。虫眼鏡で見れば、判ります。

鉾之原　また新しのが出たのじゃありませんか。

平田　それは知りません。

江平　最初は、昭和30年頃、出た本です。

馬場と小路

松浪　先程の続きになりますが、飴屋小路の「小路」と、千石馬場の「馬場」と、それから〇〇通りというのがありますね。東西に通っている道が馬場でもないようですけど。

鉾之原　東西の通りが、何であるとか。

平田　そうですね、例えば諏訪馬場に直交しているのに横馬場というのがありますから。

平田功　小さい時、小学校の頃、「飴屋小路の熊太郎さん、飴ばっかい嚙んみゃんな」と、まりつき唄をうたってました。

平田　それは、おなごん衆だけが知っちょいやっわけですね。

平田功　だから、飴屋小路は記憶にあります。母なんかも飴屋小路とよく言いよったです。山形屋のうしろの辺じゃないかと思います。

鉾之原　三年ばっかい前に、原口先生が書かれた鹿児島の偉人伝の中に、鹿児島の小路がまとめてあります。小路に案内の石柱が作ってありますね。あれはどこが作ったのですか。

平田　あれは、ロータリークラブ。

鉾之原　ロータリークラブが作った本。

平田　それならば、図書館で探せばありますね。それに解説があるのですね。

片岡　鹿児島市が出したものに、馬場の一覧表があるのです。もう七〜八年以前になりますが、そのうちコピーを持って来ます。それを見れば大体判ります。

鉾之原　市役所に行けばありますよ。貸せはせんけど、土地台帳の原本。あれを見たら判る。

市・町の痕跡地名

平田信芳

市・町の痕跡地名を並べたら、何か判りはしないかな、と思ってやってみました。前回のホンマチとモトマチがデータが少なく、よく判らなかったので「市」「町」を整理してみようと思ったわけです。表を作っていく過程で、面白いモトマチが出て来ました。前回の表も外城別に書きましたが、今回は鹿児島城下を加えました。面白いのは、４番目の喜入郷に「旧市」と書いてあるものがありますが、これは「モトマチ」とルビが振ってあります。この文字から、モトマチの意味が判って来そうです。これは「市」と「町」が相通じて用いられた例にもなります。本町(ホンマチ)は「本来の町」であり、本町(モトマチ)は「その昔、市があった所」に由来する、と見当がつきます。市・町がいつ頃から登場するかは、京都や鎌倉などについては史料的にある程度調べられていますが、鹿児島県の市・町については史料的には整理されていません。旧記雑録の中から「市」とか「町」のつくものを拾いあげなければいけないなと思ってはいます。以前見た時にメモをとっておけばよかったのですが、国分の向花町のことが鎌倉時代の史料に出ていたと思います。これが鹿児島県の町としては史料的に一番古いと思います。「向花」という地名の初見であり「町」の初見にもなります。大隅国府の周辺に早くから「町」が出来ていたことを示すものです。（嘉元３年1305「牟花町参段」とあるのが初見）

もともと「町」というのは、定期市が立ち、その定期市が常設化して「町」になるわけです。鹿児島県の場合、外城制度がしっかりしており、ほとんどが自給自足経済で「町」など必要としなかった。今後、一つ一つ具体的にどこが浦町であった、どこが野町であったということを見ていかなければならないと思います。

113 外城のうちで、野町のある郷が67野町のない郷が46といわれます。それから浦町のある郷が21、浦町の総数が29。で、野町と言っても、郷のなかでちょっとした日用の雑貨を買う程度の店があるだけで、鹿児島県の経済都市というのは浦町から発展したものがほとんどです。

浦町があった所を概略言います。〇印でも付けて下さい。谷山、それから指宿、山川。真ん中から下の方、⅓あたりのところに市来。串木野、それから隈之城、その次の平佐。右上に行って水引と東郷、阿久根、出水。２枚目に入ります。垂水、小根占、串良、内之浦、志布志。そう言った所が、浦町があった郷になります。その中で、出水、阿久根、川内、市来、志布志、そう言った所が経済的に発達したことになります。鹿児島の場合も、上町、下町、西田町を中心に発達して来たわけです。

「町」とか「市」とかの地名は浦町があった所に集中的に見られます。３枚目の地図は「市」地名・「町」地名を、点で落としてみたわけです。「市」地名は四角で囲ってあります。漏れているのは加世田のところ、地頭所のすぐ上に地名を書いてないのがありますが、それは宮崎になります。宮崎という所に「市」地名があります。あとは、大体、地名も書いてあります。

「町」地名はマチと読むものだけを拾いあげました。チョウと読むのは新しいと思って省きました。それから別途に資料を整理すればと思ったのですが町(マチ)その他について、薩摩国の場合は明治17年に出来た『鹿児島県地誌』に多くの地名が出て来ますので、その中から「町」「市」を拾いあげたら資料が増えると思います。それは後日の仕事にします。

町には普通、エビス様と大黒様を祀ります。エビス神社や大黒様が祀られている所は、大抵、浦町があった所、また野町があった所と見当がつきます。

そういう意味で、鹿児島県の町・都市の発展を「市」「町」地名から調べていくのも一つの方法だろうと思いました。

定期市の名残りとして二日市とか四日市とかいう地名がありますが、鹿児島県でそれがあるのは、宮之城の五日市、それから帖佐の八日市と十日市。これらが日付のついた市の痕跡地名で、それ以外はちょっと出て来ないようです。新聞ではよく見るのですが、高山町や川辺町に二十三夜市というのがあるようです。

それから一之迫とか市之迫というのがあります。これも「市」くさい。二之迫・三之迫というのは、ありそうでない。それから一之坂。二之坂・三之坂の言い方もないので、これも「市」があった所か？似たような地名を拾いあげると、市原、市野々、市山、市之瀬。一之瀬・二之瀬というのも、そんなにないわけだから「市の近く瀬」という見方も出来ます。ヒヨドリ越の合戦で有名な一之谷。二之谷というのはあることはありますが、そんなにないので「市」に近いかなということで「一」地名もあげてあります。

一番多いのは、唐人町。唐人町というのは明の商人が渡って来て住みつくわけですから、近世末に相当発達していた町でなければ明の商人は住みつかないということで、この唐人町を中心に鹿児島県の町は開かれて行ったのだろうと思います。鹿児島市の場合、高麗町しかなく、唐人町があってもよさ

そうなんですが、残念ながら地名にない（二官橋や三官橋などの地名はある）。唐人町は国分・加世田・阿久根・市来。それから名瀬・西之表・隼人町野久美。これは藤浪さんの地元。横川町上ノ、そんな所まで入り込んだのかなと思います。開聞町十町・喜入の中名・大浦・片浦・深川。これらを見ると、横川と末吉町深川が内陸で、あとは皆、海港都市に発達した所です。

口之町と町口。町口は町の入口を示すもの。この他に、あとで気付いて拾いあげつつあるのが垂之口と垂門。これも野町の入口のよび名ですので、町の痕跡地名になると思います。町口に対応するものに町後(マチウシロ) があります。ちょっとピンと来ませんので、町後は現場で確認する必要があります。それから市後(イチノウシロ)というのがありますが、これはどうも「イチゴ：苺」に近いような気がします。

市野々、これは市が開かれた所。この地名は大隅国蒲生駅と薩摩国田後駅との間に設置された楳野駅の比定ともかかわって来ます。これには市比野説と市野々説とがあります。市野々という地名は国分市川原・川内市田海・加治木町辺川・霧島町永水・入来町浦之名・宮之城町柊野・宮之城町泊野・出水市大川内などにあります。

市山は、隼人町嘉例川・加世田市津貫・菱刈町の市山・薩姫町上別府・山川町利永。それに辺塚・伊敷・原田・川辺町宮などにあります。

「市」地名がある所は「町」地名も集中的に見られます。そこで、このような地名を地図に落としてみました。それが３枚目の右側の地図になります。Ｂ５のこれは『鹿児島県地名大辞典』（角川）にある「近世主要街道図」を拡大して利用したものです。街道を色鉛筆で塗っていくと、それに乗っかって来る「市」「町」地名が多いということが判ります。これを見て気付くことですが、町はその昔「市」が行なわれていた所に集中的に発達しているのです。

出水・川内・市来・加世田・指宿・国分・隼人。大根占・小根占・高山・福山・大口・宮之城、こういう所に「市」とか「町」が発達しているということが判ります。したがって、「市」「町」地名をこのように地図に記していくだけでも、意味がある作業になると思います。

通山(トオリヤマ) という地名も十数ヶ所にあります。△印で入れてみました。「茶屋」という地名、例えば二軒茶屋。街道には茶屋が必ずありますから、近世末から近代初めの駅馬車の道に合致するものが多いと思われます。市・町・通山・茶屋などの地名を記していくと、やはり街道筋に多く現われます。それで、各市町村単位で市・町・通山・茶屋などの地名を２万５千分１図に落としていけば、昔の道を探る確実な方法・資料になるはずです。一里塚・塞之神・早馬・峠などの地名も役立つと思います。この十年間で峠も取りあげましたし、早馬も検討しました。花立とか柴立も。そう言った地名を地図に落としていけば古代の道路も判って来るのではないでしょうか。

このような地図にアトランダム(at random) に見えるような点を落としてみましたが、案外なことが判るのだな、というのが実感です。

ただ、地名カードのものを資料としましたので、例えば末吉町になりますか、日向国との境のところに△印が二つあります。これは通山ですが、あぁ、財部ですね。その下の所、岩川町は中之内にも通山があり、岩川にも通山があります。地名カードでは二つになりますが、一ヵ所ではではないかという気がします。財部の通山も地名カードでは二ヵ所ですが、一ヵ所を指しているのかも知れません。

また、長島は全部「市」なんですね。口印になるのが諸浦・鷹巣・指江・城川内。ところが屋久島・種子島の場合は、ほとんどが「町」。種子島の場合「市」のつく地名が田島に一ヵ所あります。

田島という所は面白そうなので、種子島に詳しい納さんに後で教えて頂たいと思います。種子島は北の方の大きな港ごとに「町」がかたまっています。屋久島には「市」地名がありません。屋久島は島津家の直轄地ですので、郷のこともあまり知られていません。屋久島の場合、西の方から永田、一湊、宮之浦、楠川、小瀬田などに「町」があります。これらの「町」も恐らく明治になってから、市制町村制施行後に小字を設けるようになった頃に出来た地名だろうと思います。

藩政時代は野町・浦町といっても、そんなに大きな活動をやっていた所じゃないと思います。ただ、唐人町が出来ているような所は、のちに町や市に発展する経済力があったのでしょうが、残りはちょっとした物々交換程度の町、お祭りの時の「市」的なものを「町」と言ったのかも知れません。そのような痕跡地名じゃなかろうか、と考えるわけです。

要するに、このような地名を地図上に落とすことによって、少なくとも近世の道路というのは確実に押さえられます。それから、大隅国と薩摩国を結ぶ道路ですが、川内川のすぐ南の方、隈之城のところに「町」が多くかたまっています。それから東の方に行った口印が百次です。その次は浦之名になるのですかね。そして大隅国と薩摩国の境の口印が、市野々になります。そして通山を通って茶店があり、別府川が二つに分かれている所は、寺師あたりですね。そして加治木の木田に出て、国分に向かう。このように東西に大体一直線に結ぶ道が想定出来ます。これが古代の大隅国・薩摩国を結ぶ道で、その線上に「市」地名がきちんと出て来るようです。

そうすると今まで楳野駅は市比野との想定を問題にして来たわけですが、市野々が有力になります。市比野周辺に「市」が出て来たり「町」が出て来たりしてもよさそうなんですが、出て来ません。網津駅の周辺もよく判りませんので、こんな地図からは駅家の跡まで言及するのは無理だろうと思います。古代の駅路の痕跡というのは、ようやく薩摩国府と大隅国府を結ぶ線が判って来たという段階です。こういうルートを利用して、古代・中世の経済活動が行なわれたであろうということは推定できます。

説明はそれくらいにして、あとは質問・意見交換にしたいと思います。

（質疑応答）

唐人町・望の市・中川茶屋

藤浪　さっきの「唐人」ですね。私のところですが、野久美田の場合、場所的にいえば、今ガーデンシティーを計画している所。山の中なんです。いわゆる十三塚原の真下です。以前から私も不思議に思っているのです。唐人墓とか唐人といいます。何故、これが付いているのかなと思うのです。

平田　唐人を葬った場所という可能性もあるわけですね。

藤浪　唐人池というのも、そこにはあるのです。唐人が何か関連したのかなと思うのですが。そこの水神様は、安政八年(?) ですかね。江戸時代も終りに近い。名前の由来が以前から気にはかかっています。それと正八幡。オハッマンサァ（御八幡様）の所で「モッノイチ」があります。ツッノカド（辻の角?)、馬踊りをする所ですね。あすこにクボマチとかマチウシロとか、そういう地名があります。昔はあすこあたりにそういうのがあったのでしょうね。ただ、門前町としては未発達の感じがします。宮内の所は。

平田　鹿児島では門前町らしいものは、ほとんど発達してませんよね。

藤浪　「モッノイチ」は非常に盛んにやっていますけどね。

平田　モッノイチ？餅つきの餅？

藤浪　そうじゃなくて、十五夜の「望」だろうということです。

平田　望月？

藤浪　それから来たのじゃなかろうかという話です。餅じゃなくて。ちょうど馬踊りの前の頃です。馬踊りが旧の一月十八日ですから。

肥後　日がきまっているのですか。望の市は？

平田　九月？

藤浪　九月じゃないですよ。

肥後　日がはっきり、きまっおっとごわすか？

藤浪　はい、きまっていますよ。

平田　毎月、十五日？

藤浪　毎月じゃなくて、一月ですね。

平田　一月十五日。

肥後　馬踊りの直前？

藤浪　馬踊りの前の頃です。

平田功　どこの話ですか？

平田　隼人町です。えーと鹿児島近辺ではヨケンマチ（横井町）がありますね。

平田功　ヨケンマッと言いましたよね。

平田　あの程度のものを「町」というわけですから、あまり大きなものじゃない。

平田功　茶屋も「ナッガワンチャヤ」というのが伊集院にはあったのですが。

平田　何の茶屋ですか？

平田功　中川茶屋。中川という地名は今でもありますけど。昔は「ナッガワンチャヤ」というお茶屋さんが一軒あって、あそこで、うどん・そばを食べよったといいます。

鉾之原　あそこには休憩所があったでしょう。休憩所を「ナッガワンチャヤ」と言いよった。

片岡　参勤交代の時は休憩しとった所。

平田　どこですか。

片岡　中川。

平田　中川茶屋ですか。

平田功　東美容室というのが、丸屋のそばにありますね。あすこが中川茶屋の出だと思っているのですが。一軒だけを中川茶屋と言っていた記憶があります。

片岡　伊集院や川内に行く時は中川茶屋でヨクテ（休憩して）、あすこで飯をたもいもんじゃったと聞くものでした。

鉾之原　場所は現在のどこですか？国道３号線の。

平田　中川峠でしょう。あれは、だいぶ削ったのでしょう。

鉾之原　どこな？

Ｘ　あぁ、バス停がある。

Ｙ　茶屋のところに。

Ｚ　今はドライブインが出来ている。

（ワイワイ・ガヤガヤ）

平田　はい。（笑い）。

平田　東美容室が中川茶屋の－－－。

平田　そこの息子さんが鹿大の先生じゃないの？

平田功　北大の教授と聞いてますけど。

平田　鹿大から北大へ？

片岡　弟さんの方が北大。

平田功　弟さん？

片岡　弟さんが北大で、兄さんが美容院の方。

平田功　お兄さんが美容院で、弟さんが、えーと大正十五年ぐらいの人ですかね。昔の五高、熊本の五高を出て京都大学を出やったと思うのですが。今は北海道大学の教授。

平田　それはもっと上の方だ。弟さんに鹿大の先生が。

平田功　ですか？

片岡　鹿大じゃなくて、とにかく東北大かあっちの方。私は隣に住んでましたので。

平田　あぁ、そうですか（笑い）。

片岡　兄貴が同級生なんです。

平田　だいぶ古い話になりましたね。

平田功　平田三郎さんという人だった。

片岡　あぁ、三郎だ。

平田　はい、判りました。東美容院の先祖は中川茶屋だったのですね。

鉾之原　東美容室は、バブル崩壊でなくなったのでは？

平田　東美容室はなくなった？

片岡　八十才すぎてから家を作って倒産した。その家も私が世話したもんだから。（笑い）。

唐人町・壷屋

納　明治10年頃の陸地測量部の地図をみると、鹿屋の笠野原（カサンバイ）に「唐人」と書いてあります。もう一つ「壷屋」も書いてあります。笠野原には、唐人という地名があるのですが壷屋と言っていました。それから鹿屋市南の二又。笠野原から移って来た人たちがいるという話です。

平田　私は鹿屋が初任地でしたが、その頃はまだ何も調べませんでした。壷屋の話は聞きましたが、笠野原のどの辺にあったのですか？

納　笠野原は入口でちょっと下って、それから大体平坦になって来ます。それから高山に行く道と串良に行く道が分かれます。串良へ行く所と笠野原の中間ごろです。

平田　鹿屋農業高校付近ですか？

納　農業高校から、ずーっと先です。

平田　あゝ、細山田の近くですね。

納　細山田の近くですね。昔、笠野原の航空隊があった所という話です。

平田　あの辺は競馬場があったのでは？

納　競馬場はずーっとこっち。笠野原寄り。

平田　あゝ，そうですか。５万分１の地図には「壷屋」のことを「唐人」と書いていたのですね。

納　その地図には「壷屋」と「唐人」の両方が書いてありました。

平田　明治10年では早すぎるから明治30年代ではないのですか？

納　あれは２～３年前、ちょっと名前を忘れたのですが、鹿児島のどこの大学だったか、大学の先生が編集されているのです。明治初期の教員養成所のテキストをですね。それに地図が出ていました。

平田　あゝ、そういう地図があるのですか。

片岡　明治10年に、西南之役にあわせて作った地図がある。薩摩を中心に測量部がやって来て官軍用に作った地図があるのです。

平田　官軍用のそれに載っているのでしょうね。

片岡　唐人というのを見たような気がするんですがね。今出た話のことは。

平田功　高麗町から移ったと聞いてますけど。

鉾之原　高麗町から来た人たちは後のこと。

平田功　あゝ、そうですか。あっちこっちに移いやったんだろうか。苗代川も高麗町から移ったと聞きましたけど。

鉾之原　昔から壷屋・壷屋と言っていましたよ。カラ芋が出来ると、カラ芋を担って正月用の米を持ったりして、水瓶などを買いに行きよった。壷屋までな。

平田功　私は聞きましたがね。横井町（ヨケンマチ）を通って、壷屋から大きな甕なんかを鹿児島に持って来やっもんじゃった、と。今、生きておいやれば百以上の人たちです。

鉾之原　生きていれば百二十代前後の人たち。明治十年頃の話。

平田　なるべく古い話を出して下さい。参考になりますから。

片岡　苗代川のあの辺で、昔、どっかのおばさんが、今でいえばパンツ、腰巻をおっとられた。

平田　はぁ？

片岡　そうしたら、必ず、壷屋ん衆じゃが。

平田　そういうことをいうのですか。

片岡　そういうことをいうのです。誰か判らんのに。壷屋ん衆じゃが、と。

鉾之原　そういうたな。

平田　ひどい差別用語があったのですね。

片岡　こそ泥があったら、それはそれは壺屋ん衆と言いおった。

平田　そういう差別をやりよったのですか。

片岡　そう言いおったわけです。

鉾之原　それとな、春先になると桜の皮を剝ぎに来てた。網を作る桜の皮を。

平田　何を作るのですか。

鉾之原　ミノを。

片岡　蓑笠の蓑？

納　手箕の端に捲く。

平田　手箕。あぁ。

片岡　箕作りの衆ですな。

鉾之原　桜の皮を剝ぐのをですね、見たのはただの一人もおらんとですよ。いつ来てやったのか、全然判らんとですな。

平田　はぁー、話を本題に戻しましょう。今日の資料のなかで何か質問はありませんか。

上と下

鉾之原　上之町。ウエノマチとカンノマチという姓が伊敷にありますが、これはどっちが古い？区別があるのですか。

平田　さぁ。西駅前は、あれは上之町(カンノマチ)。ウエノマチというのは？

鉾之原　同じ字で伊敷に店が二軒ある。ウエノマチとカンノマチと。よく判らんのですか？

平田　さぁ。普通は、カミとシモ。それからウワとシタ、そしてウエとシタに変るのじゃないですかね。カミ・シモというのが一番古い。だから鹿児島の場合、下荒田(シモアラタ)に対して上荒田(カミアラタ)といわなきゃならんのに、シモアラタとウエアラタですからね。鹿児島の表現はその辺がごっちゃになっていると思います。

片岡　勝目清さんは「シタアラタ」と頑強に主張していたのですね。

平田　勝目さんですか。

片岡　シモアラタという言い方は間違いだ、と。

平田　ウエアラタに対してはシタアラタでしょうからね。

片岡　頑強にシタを言いよいやった。あの人は下荒田に住んでおいやったから。

肥後　4ページのこれは、何から？

平田　4ページの地名は『鹿児島県地名大辞典』の「小字一覧」からです。

肥後　あれから。

平田　この地名は全部そうです。出水とか大口、加世田、国分。それから隈之城。こう言った所が「町」が多いのです。これも明治の中頃にばたばたと付けたのが多いと思います。それ以前は、野町が一つしかないわけですから、そんなに沢山「町」があるはずがないわけで。

片岡　出水もですか？

平田　出水もそうです。

納屋町

納　4ページの国分のところに、納屋町がありますね。鹿児島には納屋馬場(ナヤンバァ)というのがあります。私の考えですが、この場合のナヤは物置の納屋になっているわけですが、物置の納屋よりも魚屋のナヤではないかと考えるのです。現在の納屋は海岸に移転しているわけですが、昭和10年代は納屋町のちょうど真ん中辺に谷川という魚屋があったのです。今でもあります、谷川物産が。昭和10年頃までは、納屋馬場で魚の仲買い・取引があったのです。それで魚町の方が正しいのじゃないかなと思うのです。魚という字も、読みようによっては「ナ」になりますからね。マナイタは「真魚板」ですね。それで、魚屋市場というのが本当じゃなかろうか、と。私流の解釈ですよ。

平田　意味は「魚屋」でしょうけど、一般的に納屋と言ったのではないですか。いわゆる、おかずの

「菜」と考えたのでしょうけど。

藤浪　今日の資料には出ていませんけど、浜之市にも納屋町というのがあるのです。まさしく魚を取扱うのです。だから、今おっしゃったようなことになるのでは。

平田　帖佐にもありますね、納屋町が。あと５分になりましたが。

一之迫

納　一番上、鹿児島のところ。一之迫。これは西田の上の方の。

平田　そうだと思います。

納　あすこには一・二・三と、三つあるのです。一之迫・二之迫・三之迫と。私は、はっきりと憶えております。

平田　一之迫・一之谷というのは、二之迫・二之谷があってよいのですよ。しかし用例は少ない。

納　バス停のちょっと先から入ったあたりが、二之迫じゃないですかね。

平田　あぁ、そうですか。番号で「迫」の名を付けた可能性は考えてはいます。

片岡　西田じゃなくて常盤でしょう。

納　そう、ススケ橋あたりから行ったところ。

平田　一之迫・二之迫・一之谷が数詞地名であることは否定しません。

肥後　神戸、須磨の一之谷。平家との合戦の。

平田　あれも番号順ですか。

肥後　えゝ、番号です。

再び唐人町

藤浪　また、かえりますけど、唐仁町の「仁」。「人」との区別があるように聞いたことがありますけど。その表記はどうなのですか。書き方は。

平田　さぁー、その区別は知らないけど。

藤浪　唐人町と書かずに、唐仁町と書くのがあります。

肥後　国分でも、どっちを書くかで問題になる。

平田　もめるのですか、「人」と「仁」で。どうだろう。

肥後　「人」と書くと差別するような意味があるから、「仁」と書くのだ、と。

平田　それを意識して「仁」と書いたのですか。

肥後　やはり、そういう意味あいはありますよ。

平田　どっちも「ヒト」という意味ですがね。

市・町地名の意味

平田　最初は無駄になるかなと思って、こういう地名を羅列してみましたが、昔の道路を復元する手掛かりになることが判りました。今まで扱った峠・花立・柴立・早馬それから一里塚なども付け加え、２万５千分１の地形図を使ってやれば役に立つ分析が出来るという見通しだけは、はっきりついたわけです。それが一つの成果だと思います。

なお地図の書き方ですが、人為的な行政単位の境界はあまり付けない方がいいのかなと思ったりしました。薩摩国・大隅国・日向国と大きな川を書けば人為的な市町村の境界線はいらないと思います。郡界程度でとどめた方が地図としては判りやすいかも知れません。

じゃー、今日はこれくらいで。次回は肥後先生に動物地名をお願いします。それから、去年は巡検をやらなかったのですが、今年は天気のいい頃、11月10日前後の頃の日曜日に、蒲生から帖佐への道を歩いてみたいと思います。いわゆる桑原国府説の帖佐城跡に至る道ですが、古代の駅路の痕跡がはっきりと残っていますから。

11月13日に決めましょう。蒲生八幡から帖佐城跡までを巡検しましょう。後日、案内を出します。近いうちに『続かごしま地名ものがたり』が南日本新聞から出ると思います。ご期待下さい。

鹿児島地名研究会会員名簿

青柳　俊二
池田　磯男
池田　　純
池田　信夫
上野　堯史
江之口汎生
江平　　望
小川　秀直
大田　照夫
大山純一郎

約　　栄蔵
片岡　八郎
唐鎌　祐祥
霧島　一浩
郡山　政雄
小園　公雄
小原　紀英
木場　武則
佐野　武則
坂本　　誠
下野　敏見
能勢　正之
野原　妙子
長谷川順一

花園　正志
花田　　潔
浜崎　盛雄
原口　　泉
肥後　芳尚
平田功美子
平田　信芳
藤井　徹雄
藤浪三千尋
二見　剛史
鉾之原矢七
本田　親虎
本田　　孝
松田　　誠
松浪　由安
三木　　靖
南　　和郎
宮原　景彦
山口　静也
山崎　盛隆
山下　東洋
吉沢久美子
吉原　林昭
米原　正晃
脇元　東明

市・町の痕跡地名

（薩摩国）

外城名	「市」地名	「町」地名
鹿児島	壱之迫・一之迫	町口・町田迫・沖ノ町・横井町etc.
吉田	市ノ下	町口・町後・本町
谷山	一ノ坂	下町
喜入 ※	旧市・市ヶ迫	
知覧 ※	一ノ谷	新町ノ前
今和泉 ※		上町
指宿	一ヶ迫・市ノ原	北町・中町・新町・塩見町・蛭子町
山川	市山	稲荷町・蛭児町
頴娃	一ノ口・市山	町頭・新町
川辺	今市原・古市・市崎野・市之瀬・市之原	町尻
山田（勝目）		
鹿籠 ※		町田・町村・町場・本町・港町etc.
坊泊		町
久志秋目		
加世田	古一原・市口・市崎・市ノ瀬・市園・市山	町平・町堀・町園・本町・栄町etc.
阿多		賀々町・冬町・夏町
田布施	一ノ坂・市薗・市堀	町・町下・町屋敷・九領町・竹原町
伊作	壱ノ谷	
永吉 ※		
吉利 ※	一ノ谷	石町
日置 ※	市ノ口	
伊集院	市園・一ノ谷	町田口・下町・上町・西町
市来	古市・市口・市ノ原・市堀	町口・甑町・湊町・唐仁町・西町・納屋町
郡山		
串木野	市之渡瀬・市野原	町田・町屋野・口ノ町・上田ヶ町
甑島		中町・東ノ町・西ノ町・野町etc.
百次	市之瀬・	
隈之城		町口・上町・中町・本町・口町etc.
平佐 ※		町口・百田町・江町・甑町
高江		
山田（永利）		口之町・中津町
樋脇	小市原	
中郷	六市	蔵町・池町
東郷	市ノ瀬	町・町口

外城名	「市」地名	「町」地名
水引	市場	町口・口町・五代町・宮内町etc.
高城		町下・町上通・町下通・口町・西町
阿久根		町
野田		加治屋町・春町・仲町・町・本町
高尾野	市園・一ノ谷	町口・東町・鈴見町・上町・南町町
出水	壱ノ坂・市渡瀬・市野々	川原・町之前・町之後・町・関屋町
長島	部市・市ノ坂	etc.
入来 ※	古市・市口・市野坂・市野々	町野・上町・後町・新町
山崎		
宮之城 ※	五日市・市口・市ヶ迫・市ノ瀬・市野々	町ヶ角・町頭・元町・上町・下町
薗牟田 ※		
大村	市ノ後・市之瀬	町後・新町
黒木 ※		
佐志 ※		
鶴田		町山・町口
羽月		
山野		
大口	市山	町・町口・町ノ下・町園・本町etc.

（大隅国）

外城名	「市」地名	「町」地名
本城	今市	新町原
曽木	市ノ渡瀬・一ノ谷	
湯之尾	古市・	町口
馬越		戸板町・本町・片手町
吉松		町後・古町
栗野	白市・壱ノ口	
横川		本町・湊町・田町・外町
踊		
日当山	市山	
溝辺	市迫	
加治木 ※	今市・市頭・市野々	今町・口ノ町・
山田		町
蒲生		口之町・加治屋町
帖佐		町口・八日町・十日町・納屋町etc.
重富 ※		町・町ノ後
国分	一ノ坂	町ノ下・町之後・後町通・町後

外　城　名	「市」地名	「町」地名
清水	市野々	
曽於郡	市野々	口町
敷根		
福山	市ノ瀬・	上町・中町
牛根	一ノ谷	
桜島		
垂水	市ノ園後	下福町
新城		
小根占	一之谷	浜町・桜町・本町・祇園町・新町
大根占	今市・一之口・一ノ谷	木原下町・寺前下町・寺前中町・山ノ口下町・中戸町・今町
田代		
佐多	一崎ヶ平・市山	
百引	古市	
高隈	市園川原	
鹿屋		町田・新町頭・上町・浜町
花岡		田町
串良	古市	
高山	神之市	本町・中町・新町・西新町・寺町・柳町・栄町
姶良	古市	
大姶良		
内之浦		上町・仲町・新町
財部		町口
末吉	下市・福市・市川・市ノ谷	町畑・町・蔵町通り
恒吉		野町
市成　※		堀町
岩川	市ノ後	町後・東町・西町
種子島　※	市崎	大町田・町の原・町野・横町・蔵町

（屋久島）上町・中町・下町・新町・大町・後町・横町・脇町・渡町・向江町

（日向国）

外　城　名	「市」地名	「町」地名
松山	市之原	町後
大崎		町上・町下・エサイ町
志布志	市ノ後・市・市出口・市ノ谷	町井・大黒町・西町・仲町・東町

（町が多い所）　鹿児島が最も多いとみられるが、資料不足。

出水－－－大迫町・休甚町・木上町・関屋町・田畑町・時吉町・遠屋町・土器町・野村町・万次郎町・燊瀬町・山口町・山ノ上町・折敷町・ロノ町・白金町・緑町・下戸町・盲目町

大口－－－本町（里）・朝日町・横手町・会町・北町・田町・町・本町（大島）・本城町・中町

加世田－－－西倉町・本倉町・本町・深町・栄町・花尾町・高尾町・蛭子町・西浜町・尾張町・大黒町・朝日町・丸塚町

国分－－－砂ヶ町・唐仁町・川跡町・西町・中町・新町・山鹿町・加治木町・高田町・納屋町・西寸町・東寸町・窪町

隈之城－－－上町・新町・中町・横町・桂町・岸ヶ町・口町・内ケ町・本町・中津町・東町

北種子－－－榕西下町・榕東下町・榕西上町・榕東上町・池町・蛭町・浦田町・根志町・深町・木切町・大町（現和）・一ツ町・二ツ町・森町・大町（住吉）

中種子－－－横町・蔵町・草倉町・成毛町・北大町・南大町・中大町・西大町

南種子－－－大町寺・一ツ町・二ツ町・蛭町・預リ町・新町

（多く見られる地名）

口町・口之町－－－（10例）出水市上鯖淵・串木野市羽島・国分市重久・国分市郡田・川内市麦之浦・川内市草道・川内市山田・川内市東手・蒲生町北・加治木町反土

唐仁・唐仁町－－－（15例）国分市上小川・加世田市唐仁原・阿久根市脇本・市来町湊町名瀬市小宿・西之表市西之表・西之表市国上・隼人町野久美田・横川町上ノ・開聞町十町・喜入町中名・大浦町大浦・笠沙町片浦・末吉町深川・東串良町新川西

町口－－－（12例）高尾野町大久保・吉田町東佐多浦・鶴田町紫尾・東郷町斧淵・財部町南俣・東市来町長里・鹿児島市武町・大口市里・川内市平佐・川内市東手・姶良町鍋倉・菱刈町川北

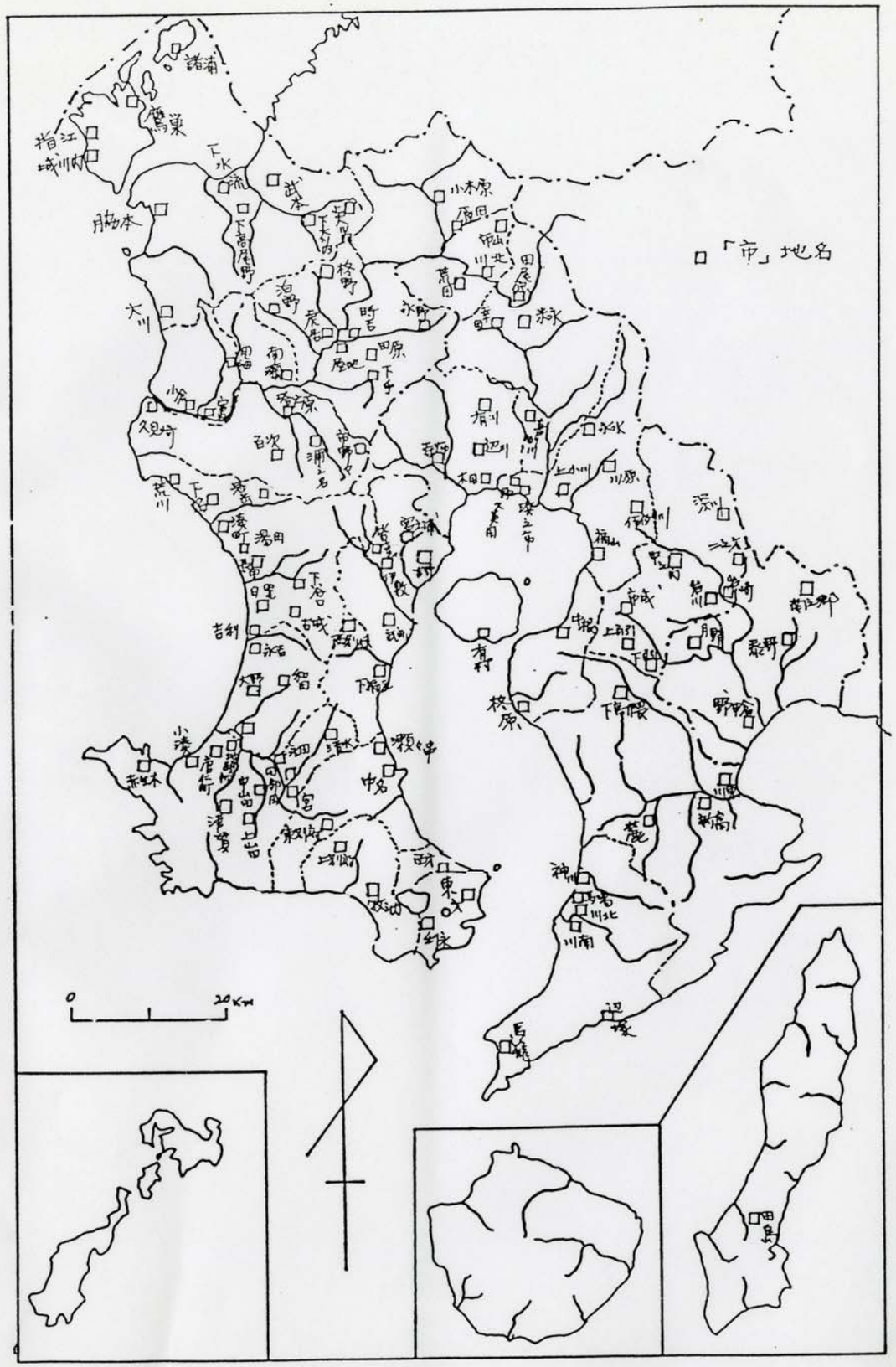
町後－－－（ 7例）吉田町東佐多浦・薩摩町中津川・大隅町岩川・松山町泰野・国分市広瀬・姶良町脇元・吉松町中津川

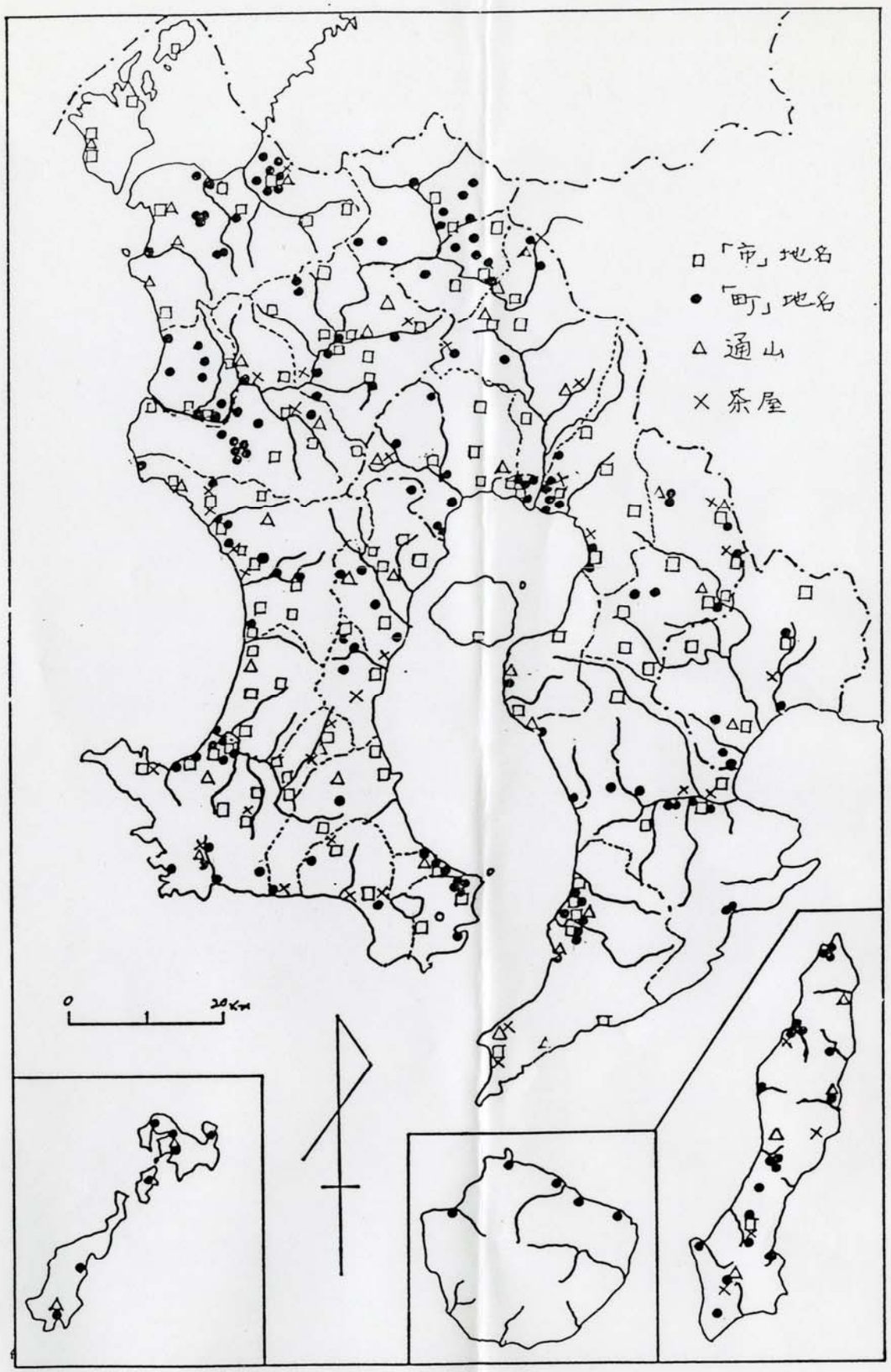
市之瀬・市之渡瀬－－－（14例）加世田市津貫・串木野市下名・川内市百次・川辺町清水・川辺町上山田・福山町佳例川・祁答院町下手・東郷町南瀬戸・宮之城町泊野・宮之城町虎居・出水市武本・出水市下大川内・串木野市荒川・薩摩町永野

市野々・市之野－－－（ 8例）国分市川原・川内市田海・加治木町辺川・霧島町永水・入来町市野々・宮之城町柊野・出水市上大川内・宮之城町泊野

市山・一ノ山－－－（ 9例）隼人町嘉例川・加世田市津貫・菱刈町市山・頴娃町上別府・山川町利永・佐多町辺塚・鹿児島市伊敷・大口市原田・川辺町宮

市原・市之原－－－（ 8例）川辺町中山田・川辺町清水・樋脇町塔之原・松山町泰野・東市来町湯田・指宿市西方・串木野市冠岳・加世田市唐仁原


□「市」地名
0
20km


□「市」地名
●「町」地名
△ 通山
× 茶屋
0
20km

鹿児島地名研究会例会

例会	年月日	薩藩名勝考読会	話題となった地名	問題提起(発表者)	掲さい会報号数
回	昭				号 発行月日
1	58.6.12		八重他	平田 峠の語源	1 (58年9月1日)
2	〃 9.1	P.1 ～ P.8	薩摩の語源	本田 耳取りという地名	2 (58.12.4)
3	〃 12.14		鹿児島の語源	桐野 シラス地形と地名	3 (59.3.25)
4	59.3.25	P.8 ～ P.12	菜摘の滝他	肥後 山の地名について	4 (59.6.3)
5	〃 6.3	P.12 ～ P.14	屯田他	永山 鹿児島の姓と地名	5 (59.9.2)
6	〃 9.2	P.14 ～ P.17	鶴丸城他	江口 川内市楠元町の地名	6 (59.12.2)
7	〃 12.2	P.18 ～ P.20	多賀山他	小川 国科という地名	7 (60.3.17)
8	60.3.17	P.22 ～ P.26	境河他	平田 市後板	8 (60.6.20)
9	〃 6.20	P.27 ～ P.31	智賀尾他	佐野 霧島山麓の地名	9 (60.9.1)
10	〃 9.1	P.31 ～ P.34	隈の城他	唐鎌 百引郷平房村の門地名	10 (60.12.8)
11	〃 12.8	薩摩国分寺跡の現地検討会			
	〃 12.1		〔南九州の地域文化を考える会〕	平田 波見という地名	11 (61.3.2)
12	61.3.2	P.35 ～ P.41	可愛山陵 他	中村 熊襲という地名について	12 (61.6.1)
13	〃 6.1	P.41 ～ P.46	川内	山崎 枕崎の地名	13 (61.9.7)
14	〃 9.7	P.47 ～ P.49	加紫久利他	松田 姶良地名のあれこれ	14 (61.11.30)
15	〃 11.3	姶良町上名の現地巡見			15 (62.3.1)
16	62.3.1	P.49 ～ P.53	僧都他	日頃疑問の地名について	16 (62.6.7)
17	〃 6.7		祭礼田	江口 難解な地名	17 (62.9.6)
18	〃 9.6	P.54 ～ P.57	クルス他	肥後 植物に因んだ地名	18 (63.2.28)
19.20	63.1.5	国分市の巡検			19.20 (63.6.5)
21	〃 6.5	P.60 ～ P.65	唐船他	江口 徳光と現王	21 (63.9.4)
22	〃 9.4	P.65 ～ P.73	九玉他	松田 神社と地名	22 (63.11.23)
23	〃 11.23	郡山町巡検			23 (平1.3.5)

例会	年月日	薩藩名勝考読会	話題となった地名	問題提起(発表者)	掲さい会報号数
回	平				号 発行年月日
24	1.3.5	P.73 ～ P.78	配流の島他	唐鎌 麓屋の中在地名	24 (1.6.4)
25	1.6.3	P.79 ～ P.83	頴娃郡他	浜崎 地名頴娃について	25 (1.9.3)
26	1.9.3	P.90 ～ P.93	石垣他	小川 指宿地方における小路	26 (1.12.10)
27	1.12.10	加治木町の巡見			27 (2.3.11)
28	2.3.11	P.95 ～ P.97	甑島・平礼石他	平田 柊原という地名	28 (2.6.3)
29	2.6.3	P.98 ～ P.100	大隅国他	会員 日頃疑問の地名	29 (2.9.2)
30	2.9.2	P.100 ～ P.104	御鉢他	郡山 塩の話	30 (2.3.3)
31	2.12.9	P.104 ～ P.106	高千穂他	平田 谷山と山川	31 (3.6.2)
	3.1.13	入来町巡見			
32	3.3.3	P.107 ～ P.111	路傍他	佐野 喜界島の地形と地名	32 (3.9.8)
33	3.6.2	P.112 ～ P.113	牡鹿野他	花田 天道信仰関係の地名	33 (3.12.1)
34	3.9.8	P.113 ～ P.116	姫城浦他	肥後 竹に因んだ地名	34 (4.3.1)
	3.11.23	大隅国歌枕巡見			号外( )
35	3.12.1	P.117 ～ P.121	七隈他	小園 大隅国と日向国の駅路	35 (4.9.6)
36	4.3.1	P.121 ～ P.124	曽於の石城	江口 可愛山陵の川内五説について 青柳 樂野駅について	36 (4.12.13)
37	4.6.7			大隅国・薩摩国の駅路と伝路	37 (5.3.7)
38	4.9.6	P.125 ～ P.129	子亥神他	平田 白石考	38 (5.9.5)
	4.11.23	隼人町宮城墓～鳩脇巡見			号外( )
39	4.12.3	P.129 ～ P.134	奈気木の森他	藤浪 方後郷について	39 (5.12.5)
40	5.3.7	P.134 ～ P.138	踊他	小川 提(さげ)という地名について	40 (5.12.5)
41	5.6.5	P.138 ～ P.142	餌香失敗	平田 曽於国府と桑原国府	41 (6.3.6)
42	5.9.	P.143 ～ P.146	桜島	能勢 開拓地の地名	42
43	5.12.5	P.147 ～ P.149	霧島山麓の竹原	花園 「曽於郡」という地名について	

地名研究会報

第４７号
平成７年１２月３日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４７回例会　　平成６年１２月４日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・池田　純・納　栄蔵・小原親英・花薗正志・肥後芳尚・平田信芳・藤浪三千尋・二見剛史・鉾之原矢七・松浪由安・南　和郎・山下東洋・吉沢久美子・吉原林昭（計１５名）

Ⅱ．麑藩名勝考読会　　P.163 ～ P.166

（話題となった地名および事項）　岸良と串良・菱田・軍大明神・続かごしま地名ものがたり・島（シマ・ジマ）・小（コ・オ）・クサカンムリの有無

岸良（キシタ）と串良（クシラ）

納　串良が出て来ましたが、鹿児島方言ではsiraの場合、ra音がtaに変化するのですよ。

平田　岸良、キシラがキシタ。

納　キシラはキシタ。河頭、コガシラはコガシタ。ラがタに変化するのです。串良の場合、以前から不思議に思っているのですが、ここだけは何故「ラ」というのだろうかと思っているのです。誰か「クシタ」というのをお聞きになったことはないでしょうか。

平田　串良は昔からクシラというのですがね。

納　串良付近の人にも聞いてみるのです。岸良はキシタというどがね。うん、と言うのですよ。キシタというて、何故クシタと言わんとか、と。

平田　方言の訛りは判りませんね。クシラは大隅国風土記逸文にも出て来ますから鹿児島県では一番古い地名です。この本の中にもあったように、クシラは隼人の俗語であると言われています。こじつけると、こんな解釈も出来ます。櫛の刃のように入りくんだ海岸に「クシ」という地名が多いし、「ラ」というのは、あちら・そちらのように、単なる地名語尾と考えたら、櫛の刃のように出入りの多い所と解釈することが出来る。それからもう一つ、琉球方言に、メーラ・クシラという言い方があるのです。前良川（メーラガワ）、クシラガワ。城（グスク）の前を流れる川が前良川で、後を流れるのがクシラガワ。前と後という琉球の古代語になります。そうすると、クシラは後（うしろ）という意味になります。そのように考えたら理解し易くなるわけです。この二通りの解釈が考えられます。

菱田

平田　大隅国風土記逸文でもう一つよく知られているのは、ヒシダ（菱田）。その説明は、沖縄で珊瑚礁の浅瀬をピシというから、それが隼人の言葉になっているのだろうという解釈です。しかし、菱田とか菱刈は、昔忍者がばらまいたという菱の実がありますが、あの菱にもとづく植生地名と考える方がいいと思います。

納　菱刈はそれが考えられますね。

平田　だけど、菱刈には現在菱は生えていないそうです。

納　あゝ、ないのですか。

平田　植生というのは四百年ぐらいの周期で変って来ますから、昔は菱が生えていただろうと思うのです。よい例が紫草です。紫草は万葉集によく出て

来ますが、現在では十和田湖周辺にしか自生していないのです。三国名勝図会をみると、大隅国・薩摩国は大体どこでも紫草があります。江戸時代は寒かったと言えるわけです。

軍大明神

平田　163ページの上段の一番最初に軍大明神とあります。まだ徹底的には追求してはいないのですが、以前話題になった11世紀の肝属郡の四十九の神社、その最後に軍明神というのが書いてあります。その他に肝属郡一帯に軍明神・軍神社というのがなければ、旧記雑記に出て来る軍明神はこれになる。一つ手がかりがつかめたわけです。そういう貴重な神社になって来ます。

藤浪　軍大明神の祭神が磐長媛ということですね。

平田　こわい顔をしているから軍明神ということなんでしょう。

藤浪　軍神という感じですね。

平田　神様なんてのは後世の人たちが勝手に当てはめるわけですから、故事つけが多いのです。

藤浪　摩利支天が出ていますね。

平田　摩利支天？

藤浪　これは本地ですかね。

平田　それは、そうでしょうね。

藤浪　軍神だから摩利支天。

平田　摩利支天なんてのが入って来てから以後のものでしょうね。それに磐長媛というのを、とって付けたようなもの。

藤浪　説明は出来ていますね。

平田　そうですね。こうやって楽しんだのでしょう。これが江戸時代の解釈でしょうからね。

藤浪　面白いですね。

続かごしま地名ものがたり

鉾之原　この前、枚聞神社のことで「じんしゃ」と「じんじゃ」の区別を書いていましたよね。

平田　そのことは『続かごしま地名ものがたり』に書いてあります。これをお持ちでない方がありますか。これを差しあげます。何ページ かな。

鉾之原　えーと、12ページ です。

平田　12ページ に「じんしゃ」と「じんじゃ」の説明。その通りです。ちょっと脱線しますが、これは人気があり、頻繁に電話が来ました。質問やら、こんな地名は知らないかとか、こんな地名はどこにあるか、とか。遠くは日南あたりから電話が来ました。もちろん鹿児島出身の方でしょうけどね。それから叱られたのもあります。恐らく鮫島さんだと思うのですが「おいげーは島津どんよっか早よ来ちょっとこい、ないごて載せとらんか」と。（笑い）それは私が悪いのですが、鮫島というのは駿河国富士郡の鮫島に由来するのです。建久図田帳に「佐女島」が出て来るわけで、鮫島さんの言い分は俺の方が島津よりも早く下って来たのだ、と。ただ『島津国史』とかその他を見ると、建久図田帳の次に出て来るのは南北朝に入ってからで、鎌倉時代の動向は判りません。駿河国出身ということで関東下向からは省いたわけです。（笑い）。まっごちょっど、勉強が足らんと、叱られました。それから間違いが、これは納さんのところ、鹿児島弁の項。13ページ 。肥田殿河原（ひだどんがわら）が肥後殿河原になっている。どこでミスしたのか気付きませんでした。鹿児島市肥後殿河原は、肥田殿河原の間違いです。

納　場所は大久保誕生地の向い側になります。

平田　ミスとの指摘を受けて気付きました。間違いだと叱られたのは、その二点です。それから前回のものは残っていないかとか、前の分をくれという電話も沢山ありました。そのうち続編と前回の分を合わせ、若干書き足して刊行するという構想もあるようです。何年先のことになるか判りませんが。南日本新聞開発センターの方にも評判がよくて、いろいろな電話があったそうです。地名研究会の皆さんにはよろしくお伝え下さいということでした。前のものが２部残っています。欲しい方は手をあげて下さい。じゃんけんで取って下さい。（ガヤガヤ）

？　あみだ。

平田　あみだくじを作って下さい。（笑い）

鉾之原　何人ですか。

平田　４人。しっかり手をあげて（笑い）。１・２・３・４・５。５人だ。５分の２。

鉾之原　当りは２冊。（あみだくじ実施）

島（シマ・ジマ）

山下　サメシマか、サメジマか。

平田　それと同じようなことは、ナカシマとナカジマ。清音と濁音の問題。関東では濁音が多い。こっちに来れば清音が多い。これは難しいな。その家が代々なんと言っているかに従わざるを得ないでしょうね。

鉾之原　「ジマ」は、ないでしょう。

山下　いや、あるんですよ。サメシマというたりサメジマというたり。

平田　サメジマどんもあるんですよ。

山下　サメジマユリコというオペラ歌手がおります。今、ドイツにいますが、彼女と話すと「サメジマ」です、と言う。

鉾之原　郷里はどこ？

平田　南薩の方でしょうね。それと「嶋」と書くのもあります。明治の初めの頃は同じ家ででも両方書いたりしています。戸籍に載ってからは決まってしまうので、それ以前は都合のいいように、どっちでも書いていたようです。

二見　ヒガシとアヅマというのも、ややこしい。一々聞かないと。

小（コ・オ）

平田　そうですね。鹿児島で難しいのは、ここに居られますが（笑い）、「小原」です。コバル・オバラ・オバル・コバラ・オハラ。とにかく一々確かめなきゃならぬから（笑い）、これは難しい。言葉の発生からいうと、小野（オノ）とか小原（オバラ・オバル）が古いのでしょうね。オノ・オバル・オバラ・オハラが古くて、コハラ・コバルに変って来るのでしょうね。小野小町を「コノオマチ」とは読まないわけだから、「オ」という言い方が古くて「コ」という言い方は新しい。ところが奄美や沖縄の地名を見ていると「オ」が少ない。「コ」が沢山出て来る。「オ」と「コ」については、日本全国、きちっと整理する必要があると思います。大変な作業になりますが。

納　南西諸島で「オ」がないのは、あちらでは原則として３母音しかないことと関係するのでは。「オ」がほとんど「ウ」に変化しますから、そういう関係はないですかね。

平田　それはあるかも知れませんね。そして薩摩の支配下に入ってから違った言葉を押しつけられたと考える。なるほどね。

クサカンムリの有無

鉾之原　薗田のクサカンムリの有無と意味は同じ関係がありますか？

平田　士族とそうでない区別と言いますが確かな論拠はないのじゃないですか。

納　地域によって限定されとらんですか。長崎県はクサカンムリの「薗」が多い。あの辺の特徴かと思っていました。鹿児島県ではそう多くない。

平田　厳密に分けることは出来ないのでは。

鉾之原　そういう地域もある、そういう人もいる（笑い）、よく判らない。

納　それは私は気が付かなかった。

鉾之原　最近出た人名人物辞典に苗字が沢山出ていたでしょう。電話帳で調べてどれぐらいあるかというもの。

納　角川の姓氏家系辞典。

平田　執筆者にはもっと詳しいデータが来ています。コンパクトにまとめてあります。（以下省略）

動物に因んだ地名（１）

肥後芳尚

「動物に因んだ地名（１）」としたのは問題提起第１回目という意味です。動物に因んだ地名に特別な関心をもっているわけではないのですが、以前に植物の地名を調べた時に、片岡さんから動物の方名を調べたのはないかという話がありましたので、博物館などに行って調べたのですが、薄いパンフレット程度のものしかなくそのままにしておきました。平田先生から動物に因んだ地名を分担せよとのことがあったので、昔の資料を持ち出して読んではみたのですが、私の性分と言いますか、ちょっと疑問はもったのですが疑問のままでおいたもんですから、問題提起するほどのわけあいもないのですが、まぁ問題提起（１）ということで話をします。文字通りの問題提起です。

地名の分類についての『千台１２号』にある平田先生の説を引用しましたが、地名分析で注意しなければならないことのなかで重要だと思われるのは、現地に行って確かめること、それから全国的に同一地名を拾いあげてその分布を確認しながら地名の由来を考えること、とあげておられます。その二つとも今回はやっておりません。こういう重要なことを抜かしての問題提起ですからその辺のこともご了承ください。

動物に因んだ地名。その解析の方法として植物の場合と同様『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」によって種類別に拾いあげてみました。地名分類については、地名研究者といわれる方それぞれに自分の意見を発表していますが、手近な平田先生のものを『千台１２号』から拾いあげてみますと、自然地名・利用地名・歴史地名・宗教地名・人名地名などこまごまとあげておられますが、これらの中に動物地名はどう入っていくのか。ちょっと考えてみたのですが、動物地名を分類する場合にまず考えられるのは、動物の形に似た地名、地形の名前ですね。それから動物が棲息している土地名、あそこは蛇が多いとか狐がよいく出るとか。狩猟とか農業とか漁業など生産に関連して発生した地名、信仰による伝承、衣食住に関連した地名。大体それ位に分類できるのじゃないかと思います。

一番難しかったのは十二支に関係した動物地名でした。必要性は感じていたのですが難しいので、十二支に関係した地名は次の機会に回させて下さい。

十二支に因んで、まずネズミから。ネズミは人間とは関係の深い動物ですが、地名としては案外少ない。その理由はいろいろあるでしょうけど、あまり人間には好かれない動物だし、また今はそれほどいませんが昔は家の中を走り回っていましたから、あまりにも手近かなところにあるというので少なかったのじゃないかと思います。

家畜は後に回して、トラ。これも日本に棲んでいない動物ですから、ごく少ない。少ないのは当然だと思います。

ウサギ。これも狩猟の対象、食用の対象ですからもう少しあるかと思ったんですが数は少ない。

後でまた問題にしますが、蛇。鹿児島ではとくにマムシ。人間に最も大きな影響を持っているもんですから、これはいろいろな名前があります。しかしその数はそれほど多くはありません。

辰と竜。こちろんこれは想像の動物ですが、案外これが多いのです。その地名の種類も多いし、また場所も多いのです。蛇・竜については後で詳しく触れたいと思います。

サル。接触の深い動物ですから、山に行けばよく見られる動物ですし、地名としては沢山あります。

イノシシ。これも狩猟の重要な対象であるし、また農作物にも害をしますから、これも地名としては多く残っております。

トリは、この前『地名ものがたり』でとりあげましたので、これは省略します。この前あげなかったのはカラスとかウズラ。そしてフクロウ・ヒバリ・ウグイス・スズメ、という名前もあります。多いのがツルです。これについても後で触れます。

以上簡単に動物地名を拾いあげました。十二支についてはまだ勉強しておりませんので今回は本を読んだ程度で、百科事典にあった十二支についての記事をあげておきましたので、あとで読んでおいて下さい。十二支が本来の意味とは何らつながりもないことは次の機会に勉強して述べたいと思います。

今日問題にしたいのは先程述べた「鶴と水流」。資料の２枚目左側にあげています。『国分郷土誌』の年表に「寛永二年(1625)小村に鶴飛来」というのがあげてあるのですが、残念ながらこの出所をまだ抑えておりません。

それから『国分諸古記』。これは国分の江戸時代前期のいろんな史料を集めたものです。国分にとっては貴重な史料ですが、その中に二つほど鶴の飛来についての記事があります。

「寛永十一年、大鳥七夕」これは「ツ」と読むのでしょうね。

平田　「七ツ」としか考えられませんね。

肥後　「小村州崎松原下に」これは広瀬の西の方です。大きな松林があったそうですが、そこに飛んで来たのですね。それを聞かれたのですね。「中納言様」これは家久公です。「加治木より両日、親ら治部左衛門の所にご光儀遊ばされ、ご機嫌よく御座候ふて、青銅千疋」これはどの位の値打ちのするものか知りませんが「治部左衛門に拝領仕り候。其時地頭喜入休右衛門殿に御座候」。寛文十二年の史料「十月二十八日、中将様」これは光久公です。「小村へ御差遊ばされ、鶴参り候を御聞きにて、御打ち遊ばされ候。殊の外御機嫌よく御座候。翌日御祝として国分愛四人、上原惣右エ門・林伊左エ門・某迄、一歩金一切宛拝領仕り候」というのです。

鶴が飛来するということは非常に珍しく、またそれを狩猟するというのは滅多にないことだということです。これからみると、国分は新川直し以前は広瀬の方へ大津川が流れていたわけで、まぁ湿地帯が多いのですが、それにもかかわらず鶴の飛来は珍しいことだったと考えられます。

ここには一部しかあげてありませんが、下流で昔の川跡をたどって行きますと「ツル」という地名が多いのです。この「ツル」が鶴を指すのか、水流を指すのかはっきりしませんが、県下で　いあげますと 139ヵ 所「ツル」の付いた地名があります。一番多いのが、鶴田。それから鶴ヶ城、鶴丸。それから鶴ヶ山とか鶴ヶ丘、そういうのが多いです。それに上鶴、中鶴、下鶴。

それと対比して「水流」は宮崎県の都城付近と熊本県に一部ありますが、『日本地名総覧』（角川）で探しても他県にはほとんど見られません。これは鹿児島県独特の地名と言ってもいいのじゃないでしょうか。これには大・中・小、上・中・下、それから東・西、前・後。それから桑水流・榎水流とか柿木水流、塩水流というのもあります。流れている場所の地名のついた一宮水流・若宮水流・天神水流・早馬水流などもあります。動物の名前の付いたのもあります。大鳥水流。この大鳥というのは、鶴のことだと思うのですが。それから牛水流。これは鶴と同じ位の数。総計をあげてありませんが大体同じくらいの地名があります。

町村別の資料を持って来ておりませんが、水流は大きな川のある所、川内・出水・串良など、そういう所に多く見られるようです。

動物地名の特徴の一つとして、この水流が「鶴」に置き替えられたのではないか、ということ。

それからもう一つ問題にしたいのは、これは国分

市府中の字絵図ですが、ここにいくつか「鶴」地名があります。○印をしたここが祓戸神社のある所です。この一帯が昔の大隅国府になります。それから右の方に行き、府中と向花の境界、黒い線が境界になります。下川跡・中川原がありますが、これは現在の国分駅の場所に当たります。右の方に行って道場下・川跡とありますが、この境目あたりが現在の市役所の場所です。

それで昔の川は左の方にある上大津・大津。その辺には松元水流・土器川原・鶴川原などの地名が並んでいます。この辺を大津川が流れていたんだろうと思います。

それから、手籠川。これは新川直しの時に新しく移されたのです。以前の川は向花の川窪・上川窪。山崎の左の方。山崎というのは現在の第一工大、実業高校の辺を指しています。中川原・流合・土器川原・江ゴ。それから椅土手（イードテ）ですか。中島・清水・川跡。この辺を流れていました。府中の中には鶴里・鶴前・鶴川原があります。鶴川原は川に臨んでいたと思うのですが、鶴里は今の祓戸神社の前で川よりも高い所にありますし、川の流れとは関係ないと思います。鶴前も、鶴里に関連した名前だと思います。

ここに亀甲が出て来ますが、ここには古墳と言いますか、遺跡があったと思われます。後程花薗先生に詳しく説明してもらいますけど、亀ノ甲・亀ノ里があります。この亀ノ甲・亀ノ里がどういう地名なのか。府中は昔大隅国府があったといわれているのですが、以前から勝手に井戸を掘ると赤い水が出るとか、血が出るといわれていて、昔は５ヵ所しか井戸がなかったそうです。

それから止上神社の近くに亀ノ甲という小さな岡がありますが、そこも掘れば血が出るといわれているそうです。これも古墳じゃないかなと思っているのですが。

これらの「鶴」地名が、亀と同じように瑞祥、有難い名前であるのか、善名であるのかどうか。今後の研究にまたなければなりませんけれども。

今一つ、府中の地名で注目されるのが左下の安蛇水流(アンジャ川)です。その下が向安蛇水流。これは今のソニー工場の裏あたりになります。府中の地名を最初に手がけられたのは平田先生で、ここを調べるように言われているのですが、なかなか不勉強で前に進みません。祓戸神社の裏が現在空き地になっているので国分市の方に調査を頼んでいるのですが、それも実現しそうにありません。

これを回して下さい。回覧の資料は水天・水神のものです。安蛇水流という地名が出て来ましたが、蛇とか竜は水・雨・川の神として人間の力を越えた恐ろしい存在と恐れられ古代から信仰されて来ました。それで暴れ川とか、そういう川のほとりに水神様がよく祀ってありますし、また水田の用水の脇にもよく見られるところだと思います。この安蛇水流の「蛇」は水・川の神というか、あるいはそれ自体を指しているのじゃないかと思います。蛇（ジャ）が川自体を指しているのであれば、流れをやわらげる、安める川ということになります。昔、大津川は大津の所で鋭角に曲っていましたし、洪水の時にはここを乗り越えてこの辺は溢れたと思います。そして土砂がたまり流れが変って、ここはとり残されて沼状になる。大水の時にはここに溢れ出して洪水をやわらげる作用をもっていた。水流というのは川沿いとか川の流れそのものを指していますから、安蛇水流と呼ばれたと思うのです。今まで文献などを探したのですが、こういう地名は他には私は寡聞にして知りません。ちょうど、ソニー工場の裏側になります。あの辺は水田地帯ですが、これは川直しで川の流れが変って真っ直ぐになりましたから、ここは水田になったわけです。これに類した地名をご存知でしたら教えて下さい。

現在国分で石塔調査をやっておりますので一緒について回っているのですが、お回ししている写真のように水天の像の水神様もあるし、種々あります。祓戸神社の境内に水天の水神様があります。水天は右手に剣、それから左手に宝索という蛇の形をした綱を持っています。恐らくそれは川そのもの、暴れ川を握っている姿だと思うのです。地元ではマムシの神様と言っています。類例をちょっと探してみました。『牧園町郷土誌』に写真のように甲辺(クベ)と轟木に水天宮があり、御神体は水天石像です。また溝辺にもあるそうですが、確かめておりません。横川のものは写真のコピーが入れてあります。

『三国名勝図会』に国分の広瀬の大穴持様（オオンジサァ）がマムシの神様として記されています。砂をお守りとしてもらって庭にまくのだそうです。『三国名勝図会』にはその他に荒田八幡と川辺の平山に毘沙門堂というのがあるそうですが、それもマムシの神様といわれているそうです。『三国名勝図会』には「マムシに噛まれるものなし」と書いてあります。

川内川流域にマムシの神様はないかと思って江之口さんに聞きましたが、本流の付近にはないそうです。串木野に多いそうですが、多いのは大きな川よりもむしろ中小河川で、土石流、山沙といいますけれども、それが出た所に多くみられるということです。江之口さんも以前マムシの神様を調べたことがあるんだそうでうすが、途中で止めてしまっているということでした。江之口さんの話では出水にもあるとのことですが名前は確かめておりません。この前蒲生に行った時に尋ねましたが、蒲生にはマムシの神様というのは聞いてないということです。地域・地域でむらがあるんじゃないかと思います。

水天とその宝索ですが、それとマムシとどう結びついたのか、はっきりした根拠はないのですが、恐らく密教が入って来る以前から人間はマムシを恐れていたと思いますから、マムシに対する恐れと言いますか、あるいは信仰というのかな、そういうものはあったと思いますが、どこで水天の宝索と結びついてマムシの神様となったのか、それは民俗学の面白いテーマじゃないかと思います。

まとまりのない話で終始しましたが、問題提起として鶴と水流の関係。鶴に関してはその瑞祥性、鶴が亀と並んで良い名前というのは、いつ頃どういうふうにして付けられていったのか。そして鶴と亀との関係、それからマムシと水天の関係。鹿児島の動物に因んだ地名でも、いろいろ問題はあると思います。今後も皆さんの協力を得ながら調べていきたいと思います。府中の亀甲について花薗先生が調べておられますので、バトンを譲りたいと思います。

亀甲遺跡の一考察

花薗正志

若干亀の甲遺跡について説明します。資料は先日国分市郷土誌編纂委員会の席で配布したものです。今日ここに持って来られるとは考えませんでした。地名の問題ではなくて、亀の甲遺跡の遺物について一つの解釈をしたのが、このレポートです。

表紙の挿絵が亀甲遺跡の出土品です。左の方が平瓶（ひらべ）。ヘイヘイと言ったりヒラベと言ったりします。右側の方は三つの輪が上の方に付いておりますので、三累環頭大刀(さんるいかんとうたち)と呼んでおります。この二つが亀甲から出た特色あるものでこれについての解明をしてみたいと思ってまとめたものです。亀甲から出た三累環頭大刀はいつ頃のものなのか。そして平瓶はどういうものなのか、ということになるわけです。

先程の肥後先生の略図を利用します。亀甲遺跡のある位置は大体こんな所になります。亀甲から左側の方が大津川、右側の方が手籠(で)川になります。この二つの川が合わさった所が旧広瀬川になるわけです。これは江戸時代の寛文年間に川筋直しが行なわれて、新しい川が大津川の下流の方に作られていきます。それに合わせて手籠川という川が国分駅の上の方に、新町から亀甲の方へ流れを変えられます。こちらの方へ新しい川を作って大津川へ合流させ、そして大野原に新しい川を掘ったのが新川になります。亀甲遺跡がある所は本来両方の川に囲まれたところにあったわけです。

亀甲遺跡が発掘されたのが昭和28年で、現在鹿児島県考古学会会長をしておられる河口先生と、もう亡くなられましたが大口市で医師をしておられた寺師見国先生が調査に参っておられます。資料の2ページの3 に遺跡調査の概要が書いてあります。調査の結果について河口先生がおっしゃるには三累環頭大刀と、それから一緒に出て来た横瓶。私は平瓶と申しましたが、それを「横瓶」というふうに新聞には発表されておられます。河口先生がお書きになった『日本の古代遺跡、38巻、鹿児島』の中でも、先生の解説されたいろんな考古学関係の本の中でも、「横瓶」という名前で発表されております。私も最初読んだ当時はその通りかと思っておりました。寺師見国先生の発表されたものが2ページの下の方から 3〜4ページになります。寺師先生の発表されたものが『鹿児島県文化財報告書第４集』になります。この報告書は昭和32年に発行されており、発行部数も少なく、ほとんど手に入らない、幻の本みたいなものでした。私も何回か県立図書館へ行きましたけれども、一向に見つからないままでした。ひょっとしたら黎明館にあるのではないかと黎明館に行って聞きましたが、ここにもありませんということでした。寺師見国先生が蒐集された論文等が２万点あまり、黎明館の方へ寄贈・委託されているのですが、その中に入っていないかと、もう１回探してもらったところ、寺師先生の原稿が出て参りました。4ページの真ん中のところになりますが、第２部亀甲遺跡の出土品として、土器の図が並べてあります。1・2 は土師器、3・4・5・6・7・8 が須恵器になります。そして8.は平瓶としてありました。私は横瓶のつもりでおったわけですから、非常な驚きとともに、平瓶であれば時代的に調べられないかと考えた次第です。ちょっと飛びますが7・8ページを開いて頂けないでしょうか。8ページに「日本の原始美術④、須恵器、原口正三、講談社」昭和54年出版でしたか。この須恵器の変遷の表をみると、8 世紀のところに位置付けられているわけです。ただこの表は近畿地方を中心とした編年ですので、そっくり九州には当てはまらないわけですけれども。また九州の須恵器については小田富士雄先生が編年をされておられますが、8 世紀はまだはっきりしていないみたいです。鹿児島県の須恵器の編年はまだされていないということです。埋文センターへも問い合わせ、新東先生にもお聞きましたが、まだ 8世紀の須恵器の編年はないということでした。それで原口正三先生のこれを編年として出したわけです。それを見ると 8世紀ということになっております。

左側の方の 7ページ ですが、 1〜3 は把手のついた平瓶です。それらはすべて 8世紀と編年の上ではなっているようです。4.は 6〜7 世紀の頃のもので把手は付いておりません。

河口先生が横瓶を 7世紀と発表されて以来、40年あまりが経ち、7 世紀の国分の府中の辺には三累環頭大刀を持つような豪族がおったというような説明がなされたまま今日まで来ておったわけです。河口先生のいわれる横瓶ではなく、そして 7世紀というのも違うのではないか。8 世紀のものではないかと私なりに考えたわけです。

新東先生に尋ねた時、その平瓶がどういう状態で出土したかが話題になりました。寺師先生の発表によると、これは3ページの上の 2行目のところ。「当時なお土工は進行中で、現場において東勝美・荒田新吾両氏の説明によると、遺物の出土は図の如く四ヶ所で、土壙はなかったが刀剣類は整然と水平に土器類は縦に据えてあったとの事で」、縦というのは横倒しではなくて上の方を向いてという意味にとれるのじゃないかと思います。そういうふうにして並べてあったということで、平瓶と三累環頭大刀は同じ場所で発掘されたということになるようです。

平瓶は 8世紀のものということが判りましたので 8世紀のものとしたら、どういうふうになるのか。9ページの一番最後のところになります。 8世紀、奈良時代のはじめ、和銅六年(713) に大隅国が設置されます。そして国守の陽侯史麻呂が奈良からやって来るわけで、その人たちが中央の政治をまねて律令制や班田制を持ち込んで来たんだろうと思います。それに対しての隼人たちの反乱が養老四年(720) に起こっております。720 年の隼人の反乱と亀甲遺跡は結びつかないか、あるいは結びつくのではないかと考えたわけです。

平瓶が出土しているのは、ほとんどが官衙。国府や郡衙、寺院、そういう所しか出ていない。ほとんどがそういう所から出土しており隼人たちが使ったものではない、ということ。三累環頭大刀は 5〜6 世紀頃の南朝鮮からのものらしいのですが、それが伝世して 8世紀の国守あるいは他の国司たちが大隅国に派遣された時に一緒に持って来た。それが 720 年の反乱で殺され、埋められたのじゃないか。亀甲遺跡に対する私個人の考察としてまとめてみたものです。

なお平田先生が以前、城山の発掘調査をされておられますが、その報告書の中にも奈良時代のものとしておられますし、三累環頭大刀についても『国分物語』の中でそのようなことを書いておられますので、こと改めて私がそういうことをいうのでなく既に先学の発表があるわけです。ただ一つすっきりしなかったのは河口先生がいわれた 7世紀の横瓶ということ。そのことで一向に発展がなかったのですが、敢えて 8世紀のもの、大隅国衙に結びつく、さらに 720年の隼人の反乱に結びつくものじゃないかと推論した次第です。

〔質疑応答〕

平田　その謎の渦中に私がいるのですが、実はこの平瓶は国分市図書館の資料室でこれに目を付けた時、一緒にいたのが当時の国分市文化財審議委員長の吉永吉夫さんでした。もう亡くなられましたけど。城山山頂を掘る時、吉永さんが私を連れて行ったのです。えーと何というかな、搦手口に降りる所があるのですが。食堂がありますね。あれから降りて行くと、井戸というか湧水があるのです。その上の所、ここからあの平瓶が出たとはっきり言われたわけです。そして図書館で見た時には確かに城山出土とラベルがあったわけですから、城山山頂からこういうものも出ていると参考資料として発掘報告書に書いたし、そして平瓶はこれにもとづいて『鹿児島大百科事典』にも書きました。その後河口先生からあれは亀甲から出たものだとの話を聞きましたが、吉永さんから城山でここから出たと紹介されたので、そのように了解して書いただけのことです。実測図を書いたのは寺師先生の次は、私になりますが、吉永さんからいわれた通りのことを書いたのであって、私が書いた時に亀甲から城山にすり替ったのではない、ということを弁明しておきたいと思います。（笑い）

当時それが亀甲出土とは全然知らなかったので、これは貴重なデータ、遺物ということでわざわざ紹介した次第です。それで、これが亀甲出土であれば、ある有力な国衙官人に結びつく。国衙官人を

花薗先生は大胆に陽侯史麻呂とされるわけです。陽侯史麻呂の遺物とするのは一つの飛躍でしょうが。

そこで亀甲という地名ですが、国分には先程話があった止上神社の近くにも亀甲があって、そこにもあれは守公神社ですかね。

肥後　守公です。

平田　同じ名の守公神社（弓箭守公神社）があるのですが。守公神社というのは全国的にあります。平安末から鎌倉の頃、国府に守公神社という守護神を設置することが流行します。したがって守公神社がある所は大体、国府であるとみてよいわけです。大隅国府が府中に、一時期というか長い時期あったことは事実であり、それがどこまで遡れるか、最初からそこにあったのか、これは考古学的に確かめなければいけない問題です。

そういう所ですから目出たい名前の鶴と亀を使ったと考えられるわけです。それでなければ鶴ノ里・亀ノ里が解釈出来ないわけです。それから亀の甲の「甲」は、国府の「こふ」につながるわけです。長門国府にも亀甲という地名がありますから、亀甲に国府があることで長門国と大隅国とは共通しているわけです。

これは肥後先生にお詫びしなければならないことですが、肥後先生は県下の動物地名を拾いあげられて表にされています。これは江之口氏に渡してある記念誌の原稿に入っております。今朝早く起きて、そのコピーを探したのですが、アルツハイマーなのでしょうか、なかなか探し出せず（笑い）、申し訳ないことをしました。今日利用できる鶴の地名とか鼠の地名とかを拾い出された資料で、今頃は活字になっているという目論見はあったのですが。そのうち使うこともあろうかと思います。

それから「植物に由来する地名」は今日配布したNo.55 で終りになります。来月号からは「動物に由来する地名」を書くことにします。なお県立図書館に地名研究会の資料を届けて来ましたが、「植物に由来する地名」も製本され、「地名研究会報」も1号から20号、21号から40号というふうに製本して保管されております。

今日は飛ぶ鶴と流れる水流の説明がありました。県下の「ツル」という地名を全部拾いあげたら、鶴と水流とは分かれて来るんじゃないかと思います。例えば「ツルゴモリ（鶴籠）」などは鶴だろうし、「ツルタ」は鶴が飛んで来る田圃です。鶴ヶ城・鶴ヶ岡は飛ぶ鶴に由来します。鶴丸というのは人の名前です。同様に子丸・辰丸、そんなのは十二支の付いた人の名前だと思います。

上水流・中水流・下水流、桑水流・東水流などは水の流れに落ち着くのではないでしょうか。私も今半分ぐらいしか拾いあげていませんが、そんなことを感じます。

それから先程の安蛇水流ですが、行者水流が変化したものじゃないでしょうか。行者(アンジャ)が開いた水流ということ。

肥後　私も最初はそれだと思っておったのですがやはり川の流れから考えると。

平田　川の流れを鎮める。

肥後　えゝ、和らげる。

平田　そういう意味もあると思いますが、行者が何かそういう水路を開くのにかかわったということも考えられますね。

肥後　そうですね。

花薗　地形からいうと湧水地名も考えられますね。

藤浪　今の安蛇水流は新川に沿った形だから移動遺構になる。もしそうだとすれば、その水流という地名は旧河川の東側を流れていることになる。

肥後　旧河川は大津で鋭角に曲がっています。私も最初は行者だろうと思っていたのですが、あすこは極端にいえば、急に直角に曲がっているわけですから、ここは急な流れになって少し抉られるわけです。こんな所を攻撃斜面というのだそうですが、ここを抉って流れは蛇行します。そして取り残されて洪水の時は遊水池になる。

花薗　もっと南の方じゃないですか。

肥後　はい、そうです。あすこで湾曲して大津で曲るわけです。遊水池についてもいろいろ検討してもらいたいのですけども。

平田　安蛇水流の上に丸池とありますね。

肥後　池もありますね。

平田　現在は日豊線の下に埋まっているわけですが、丸池のほとりあたりに森の下という小字もありますね。景色の森の本来のものがあったのでは。

肥後　森の下、景色の前だから、ここらあたりでしょうね。

平田　そうですね。そして丸池という池には青葉の笛竹を池に沈めておって、その後神社に奉納する。

肥後　あれは鏡橋。鏡池です。

平田　鏡池ですか。

肥後　鏡橋。日当山へ行く、新町の鏡橋の所。

平田　鏡橋のところですか。

肥後　鏡池というのがあったそうです。

平田　それは私の誤解でした。

藤浪　さっきの「ツル」ですけどね。住吉干拓に鶴牟田という地名がありますので、鶴が来ていたんじゃないでしょうか。

平田　雁牟田・鶴牟田というのがありますね。

藤浪　『旧記雑録』に、鶴を打って殿様に差出したという記事が出ていますから鶴がいたのじゃないですかね。

肥後　しかし『国分諸古記』では、堀切左衛門に関する記事で大見出しにわざわざ書いてあるから、非常に珍しかったのじゃないでしょうか。

藤浪　おいしかったもんですかね。殿様に献上してますけど。

肥後　おいしかったのでしょうね。

平田　鶴亀で長生きするということでしょうね。（笑い）だから滅多に食べられなかったのでは。

肥後　とれなかったのでしょうね。

花薗　島津氏と肝付氏が争っていますね。争いのきっかけというのは、鶴の吸物がご馳走になりたいと島津氏の方から出た。これが衝突の原因となって肝付氏は征服されることになるわけですが、吸物の話が出て来るところをみると、よっぽどおいしかったのですかね。（笑い）

平田　肝付氏の家紋は鶴丸ですよ。

花薗　そういうのがあったのですか。

平田　だから、なめているということになった。

花薗　それで狐を食べたいと返事が来た。島津氏にとっては狐は鬼門らしいですね。そんなことが原因だということなんですかね。よっぽど鶴がおいしかったのかと思ったのですが。（笑い）

二見　中国では甲骨文字がありますね。亀はよく出て来ますけど、亀はどうなんですか。

平田　鹿児島では亀の地名は少ないですよ。

肥後　少ないですね。

二見　少ないついでに、亀をとった。

平田　鶴さん亀さんという名前は多いけどね。

二見　天津では亀をよく見かけましたけど。

平田　時代が新しくなれば中国では王八（忘八）と言って馬鹿にするから、亀は歓迎されなかったのでは。

二見　日本では悪口には亀とは言いませんから。

平田　もう十二時すぎだ。次の回、３月に話してもいいという人はいませんか。鉾之原さんは、どうですか。江之口氏あたりが出て来ればいいのだけど。

藤浪　出て来んなぁ。近頃は。

平田　藤浪さん、何かないですか。

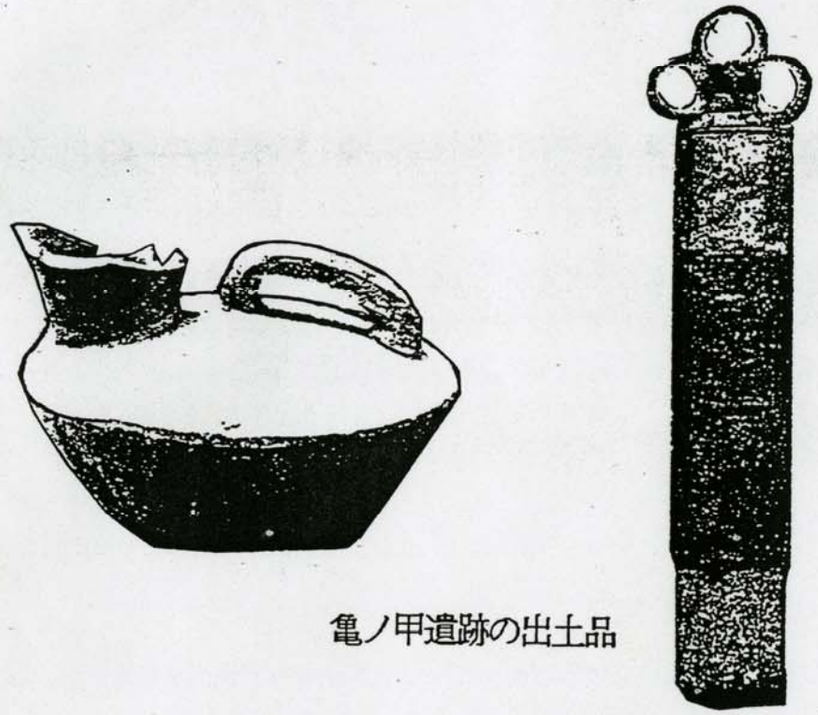
藤浪　地名は今のところはやっていません。

平田　誰か探しましょう。じゃー今日はこれで終りにします。

国分市　府中

亀の甲遺跡

考察



亀ノ甲遺跡の出土品

花薗正志

亀ノ甲遺跡　一考察

1　亀ノ甲遺跡のなぞ

国分市府中の向花小学校敷地内にある亀ノ甲遺跡は、昭和２８年（1953）12月、校地拡張工事中に偶然に発見された。校庭の西側は一段高い台地となっており、人家一軒と７～８基の墓石の立つ小さな墓地があったという。この台地を掘削中に四ケ所から鉄剣類や土器類の遺物が出土した。小字が亀ノ甲であったので「亀ノ甲遺跡」と呼ばれた。

この遺跡から出土した鉄剣の中で、柄頭のところにC型の輪を三個つなげているので三累環頭大刀と呼ばれ、県内での出土例は亀ノ甲遺跡からのみである。

この貴重な出土品である鉄剣類や土器類はいったい何時ごろのものなのか。古墳時代の隼人の豪族のものではないかという説もあるが、それを裏付ける確実な資料も見つかっていない。隼人たちの土壙といわれながら四十年を経た今日でもいぜんなぞに包まれたまま。このなぞを解くかぎを探さねばならない。

2　遺跡の周辺の古代環境

遺跡の所在する向花小学校の周辺は府中・向花・新町などの集落からなる。北部は姶良カルデラ壁とよばれる急峻な崖が岩肌を露わにし、国分平野を二分するように北の方から平野の中心部へ伸びる。そのカルデラ壁の南側は舌状の微高地となっており、ここに府中・向花・新町などの集落が散在する。この地域はかって二つの川に挟まれ、西部を旧大津川[1]（現天降川＝新川）が南流し、東部を旧手籠川[2]が流れて、両川は府中の南で合流し広瀬川となって錦江湾へ注いでいた。険しいカルデラ壁を背にし、三方を川に囲まれたいたこの地域を、現在の地形をもって古代を考察すると大きな過ちを犯すことになる。（略図参照）

亀ノ甲遺跡付近の略図

注1・2　旧大津川と手籠川の両川は、薩摩藩が新田開発のために江戸時代の寛文二年（1662）から六年にかけ、新しく川を掘り川筋を直し、河道を大きく変えた。　（昭48国分国分郷土誌）

3　遺跡調査の概要

亀ノ甲遺跡の出土品は、地元国分ばかりでなく考古学界からも大きな関心が寄せられたことだろう。当時の国分町としても貴重な考古遺物だと考え、県内で活躍中の著名な二人の考古学者に調査を依頼している。ひとりは玉龍高校教諭の河口貞徳氏（現鹿児島県考古学会会長）。もうひとりは大口町で医院を開業中の寺師見国氏。

河口氏は昭和２９年１月に３回にわたって現地調査をされ、その結果を昭和29年１月28日の南日本新聞に「国分町府中の鉄大刀」と題して発表された。

その後、昭和６３年４月に保育社から「日本の古代遺跡・３８・鹿児島」を出版され、その中で亀ノ甲遺跡については先の新聞発表のものと大筋では同じものを書かれている。

それの後半部を引用させて戴く。『三累環頭大刀は南鮮の古墳に数多く出土しており亀ノ甲遺跡の例も舶載品とおもわれる。慶州市皇南洞の天馬塚古墳が五～六世紀とされているから、本例も同時期と考えられる。しかし、共伴する須恵器が七世紀のものであるから、渡来後伝世し、七世紀にいたって副葬品として使用されたものとおもわれる。南九州では、他に三累環頭大刀の出土例（九州では佐賀県二例、長崎県一例）がなく、よほどの豪族がこの地にいたことをしめすものであろう。この遺跡ははじめ地下式横穴とされたが、伝播の経路も明らかでなく、基盤が砂層であるから構築が無理である。土壙墓であろう』と書かれている。

この引用文ついて、つぎの「４、平瓶」の項で検討したい。

つぎに寺師見国氏の調査報告について述べる。

河口氏の新聞発表の翌日１月29日に現地に行き調査をされている。その結果を昭和32年３月発行の鹿児島県文化財調査報告書第４輯「鹿児島県下の地下式古墳」の一節として『一、国分市向花（土壙四）』として発表された。

鹿児島県文化財調査報告書第４輯は稀覯本的存在であるので、関係の分を全文紹介することにする。

一、国分市向花（土壙　四）

昭和二十八年十二月、向花小学校に接した西方台地を切り崩し土工を起こした際、地下１７０センチメートルの四ケ所に遺物が発見された。

昭和二十九年一月二十九日調査

当時なお土工は進行中で、現場において、東勝美・荒田新吾両氏の説明によると、遺物の出土は図の如し四ケ所で土壙はなかったが、刀剣類は整然と水平位に、土器類は縦に据えてあったとの事で、此の台地の西方よりは（昭和）十九年頃土壙・直刀が発見された事もあるので、この場所も土砂が流入して土壙は失われたものと思われる。

第一号地　地表下　１７０センチメートル

出土品

刀	1	（金銅製三累環柄頭付全長８１、５）	第3図　NO1
小刀	1	（全長３９，５）	第3図　NO2
刀子	1	（全長１９，３）	第3図　NO3
須恵器	1		第2図　NO8

第二号地

第一号地点よりおよそ１６m東方

出土品

直刀　1　（全長６８、刀身６３、鉄鍔付）　第3図　NO4

第三号地

第二号地点より３メートルの北

出土品

直刀　1　（全長７９、刀身６７）　第3図　NO5

八所透鉄鍔（径１０～９、厚さ０，５）　銅製切羽付

第四号地

第二号地よりおよそ１０メートル東方、地下１３０センチメートル

出土品

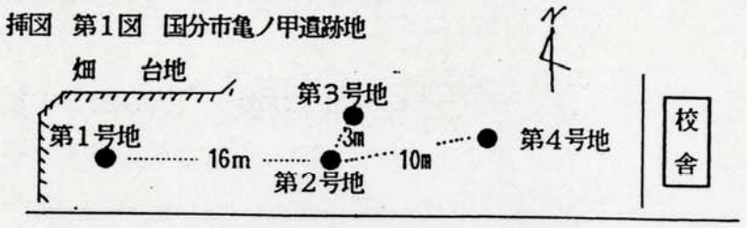
直刀　1　（全長７０，５、刀身５８，５、茎に目釘孔１ケ）

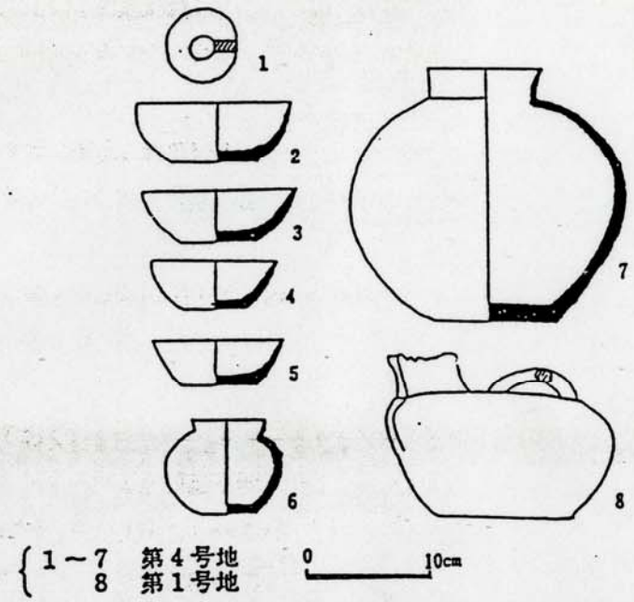
第3図　NO6

鉄鍔（径7～7，5）付

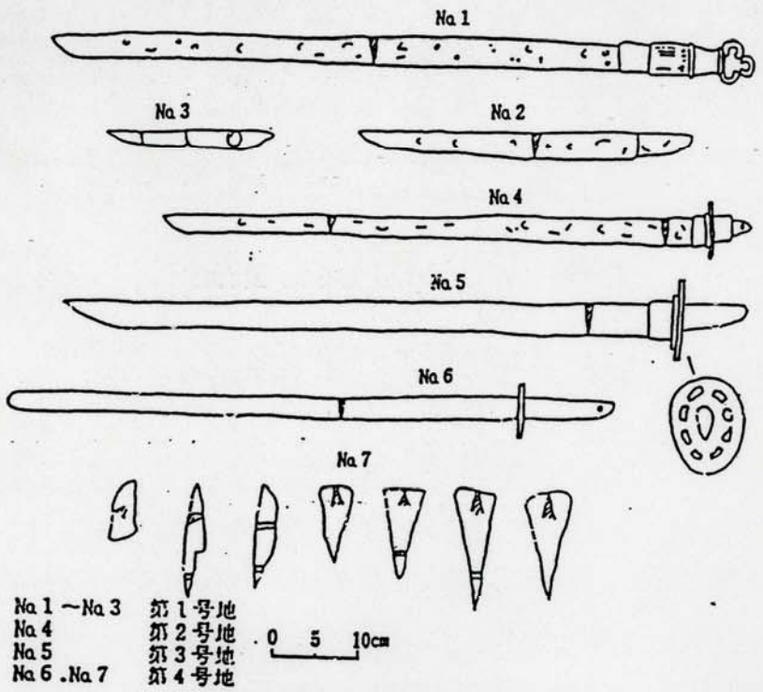
鉄鏃	7	（鏃頭式　4、刀身形3）	第3図　NO7
土師器	2	（皿　1、紡錘本様土器　1、径6，4　厚さ1，1）	第2図　NO1・2
須恵器	5	（皿形　3、壺形　2）	第2図　NO3～7

挿図　第1図　国分市亀ノ甲遺跡地





第2図　亀ノ甲遺跡出土品（鹿児島県文化財調査報告書第4輯より）



第3図　亀ノ甲遺跡出土品（鹿児島県文化財調査報告書第4輯より）

4　平瓶（ひらべ）……出土品の検討

府中亀ノ甲遺跡の出土品の調査を河口貞徳・寺師見国の両氏により、昭和２９年１月に別々に実施されたことは前に述べたとおり。校地拡張工事は前年の１２月に始まっており遺構の発見もその頃であるので、実際に調査が行われるまでには、一月ほど経過していたことになる。当然、遺構は破壊され遺物のみが保管されていたと思われる。

従って、両氏の調査も工事関係者からの聞きとりと、遺物の計測が主であったのではないか。

遺物のうち三累環頭大刀をはじめ鉄剣類は現在国分市立郷土館に展示されている。郷土館ができる前の保管場所が何度か変った。そのため鉄剣類と共伴した土器類の保管が行き届かず、正確な記録もなく、どれが亀ノ甲遺跡からの出土品か分からなくなってしまっていた。さいわい、寺師氏の調査報告書の挿図第２図で亀ノ甲からの出土品がわかる。ところが、土器の七点のうち、現在郷土館にあるのは平瓶（第2図、NO８）の一点だけ。他のものは所在不明。平瓶については後で検討したい。

つぎに、河口・寺師両氏の調査以外の出土品についてふれておく。

1）　昭和１９年のころ、亀ノ甲遺跡の西方から鉄剣が出土と伝えられるが詳細不明。

2）　昭和２８年の校地拡張工事の時、鉄剣などと共伴して金環二個が出土しているがなぜか調査もれになっている。現在一個は郷土館に展示中だが、もう一個は不明。

3）　向花小学校では、昭和３０年５月はじめにもＰＴＡ奉仕作業で校地拡張をしている。この時にも土器数十個が出土。このことを国分市報は昭和３０年５月１５日号（第１４号）に掲載している。記事の一部を紹介する。

「５月６日の作業中１千年以上も土中にあったと思われる古代の土器十数個が発掘され皆の好奇心をあおった。この土器は比較的精巧なもので、技術の相当進歩した古代末期の作であろうと思われる。この地は「府中」という集落名からも歴史的由緒のあるところと思われ、昨年１月頃も作業中に古代の刀十数本、土器十数個が発掘されて一躍考古学界の関心を集めているが、これらはいずれも郷土資料として極めて重要な文化財であり今後の研究に大きなな期待がかけられている。（後略）」

と当時の向花小学校長・上原直士氏は書かれている。

この出土品の調査は専門家に依頼されなかったようである。それで記録もなく所在も不明のまま。昭和３４年３月に火災で校舎が焼け、その時に焼失したのではないかという。学校長は　現在亀ノ甲遺跡関係のものはなにも残っていないと話している。

それにしても、亀ノ甲遺跡付近の出土品の多さは何を物語っているのだろうか。

これから、亀ノ甲遺跡の出土品の検討にはいりたい。

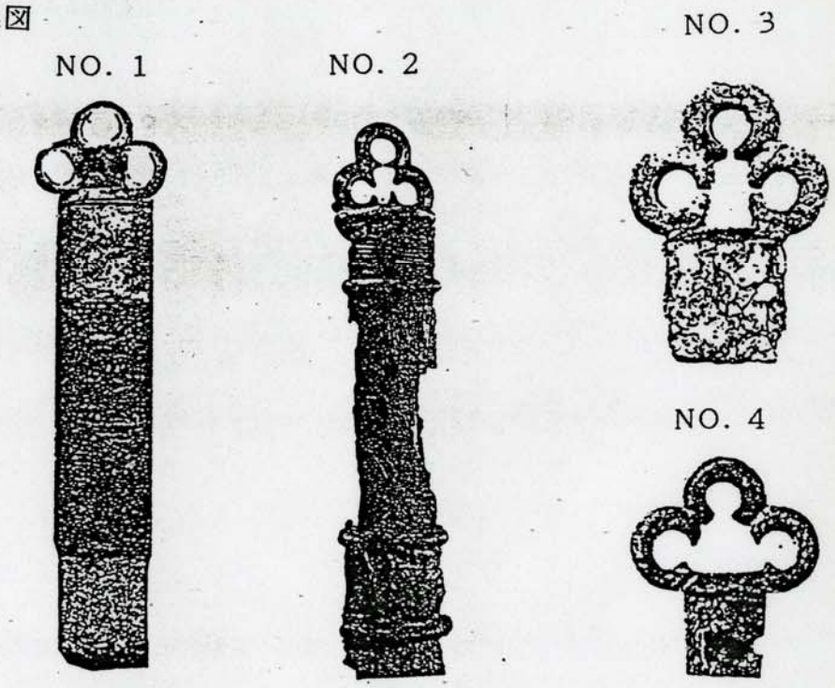
まず、鉄剣のひとつ三累環頭大刀について。

河口氏が記述されているとおりであるが、わたしなりに一通り調べてみた。平成４年（１９９２）福岡県立美術館で日韓交流のルーツをさぐる「伽耶文化展」が開かれたので早速見学に出かけた。ガラス越しに亀ノ甲遺跡出土と同じ三累環頭大刀（第４図、ＮＯ２）が展示してあった。図録の説明には５世紀、南朝鮮の慶州の王陵クラスの古墳から出土とある。他の文献からも、三累環頭大刀のルーツは南鮮と分かった。

九州からの出土例は佐賀県の玉島古墳から一振（第４図、ＮＯ３）古墳時代。福岡県筑紫野市剣崎古墳出土（第４図、ＮＯ４）。姶良郡福山町の松下美術館にも一振展示してある。出土地は宮崎県持田古墳という。

いずれも５世紀以降の南鮮からの舶載品と思われる。

挿図　第４図



ＮＯ．１　国分市亀ノ甲遺跡出土　　（国分市立郷土館蔵、国分市指定文化財）

ＮＯ．２　南朝鮮　福泉洞出土　５世紀　（伽耶文化展図録・編集　東京国立博物館）

ＮＯ．３　佐賀県玉島古墳　　（古代九州の遺宝ー鏡・玉・剣ー佐賀県立博物館）

ＮＯ．４　福岡県筑紫野市剣崎古墳（九州歴史資料館・収蔵資料目録　２）

つぎに須恵器の平瓶について考えてみたい。

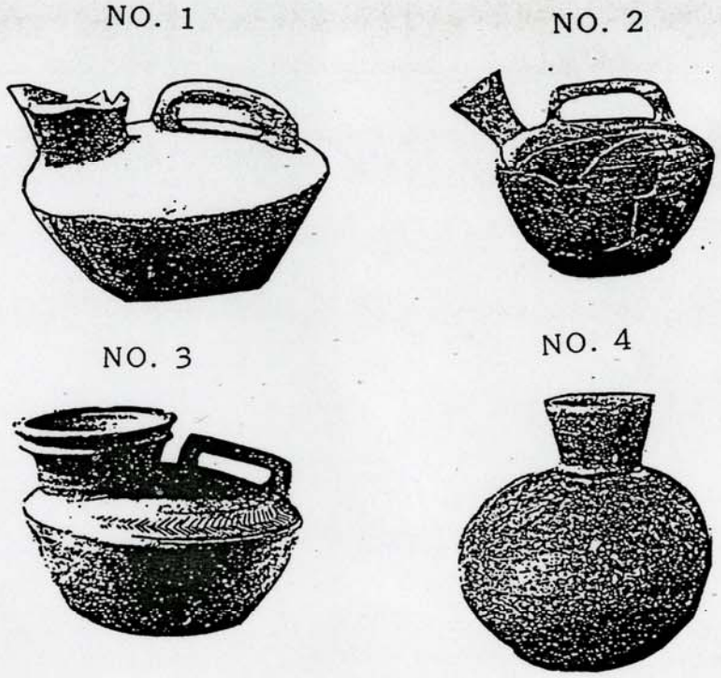
前にも書いたように、亀ノ甲遺跡からの出土品としてはっきりしているのは、須恵器の平瓶（ひらべ）（第２図、ＮＯ８。第５図、ＮＯ１）のみである。

先に河口貞徳氏の「日本の古代遺跡・３８・鹿児島」では三累環頭大刀と共伴する須恵器を「横瓶」とされ、７世紀のものとされていた。当然、三累環頭大刀も伝世し須恵器と一緒に副葬品として埋葬されたのであろう。

寺師見国氏の発掘報告書で、挿図第２図のＮＯ８をみたとき、これは横瓶でなく平瓶であることに気づいた。早速、平瓶の変遷を文献にあたった。この平瓶は７世紀でなく８世紀のものであることが分かった。（第６図参照）７世紀の平瓶と８世紀の平瓶の大きな違いは取っ手の有る無しである。取っ手のある様式の平瓶は律令式土器と呼ばれ、律令時代の規格品だという。第５図のＮＯ２は薩摩国分寺の出土品。ＮＯ３は平城京跡の出土品。いずれも取っ手を持つ。ＮＯ４は古墳時代の奈良の出土品。

これは大きな発見である。亀ノ甲遺跡の平瓶は８世紀のものである。

第５図



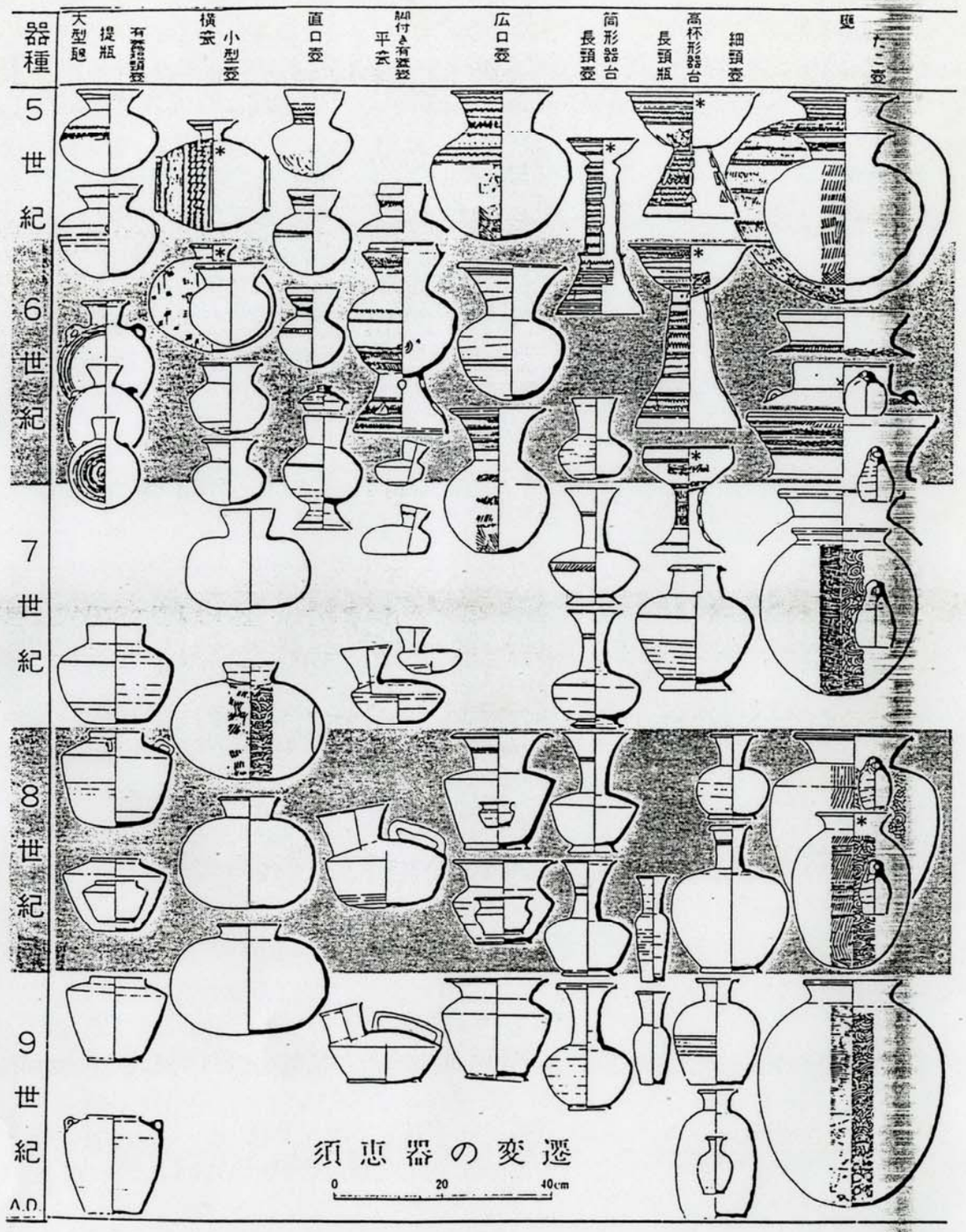
ＮＯ．１　平瓶　国分市亀ノ甲遺跡出土　８世紀　（国分市立郷土館蔵）

ＮＯ．２　平瓶　薩摩国分寺跡出土　８～９世紀　（川内市歴史資料館蔵）

ＮＯ．３　平城京跡出土、８世紀、（日本の原始美術　④　須恵器より）

ＮＯ．４　平城京跡出土、７世紀、（日本の原始美術　④　須恵器より）

第6図



日本の原始美術 ④ 須恵器 原口正三

講談社

5 むすび

取っ手つきの平瓶が7世紀でなく8世紀のものとすると、中央では大宝律令が制定され、平城京が建設される奈良時代になる。南九州では日向(ひむか)の国から肝坏・贈於・大隅・姶羅の四郡が割かれて大隅国が設置された。それは和銅6年（713）のことである。

大隅国ではさっそく国庁が建設され、奈良から国司たちが遠路はるばる大隅国に赴任してきた。かれらは、中央にならい律令政治や班田制を試みようとしたことだろう。それをうまく進めようとして、翌年には先進国の豊前の民200戸約五千人を大隅国に移住させた。かれらは農業の開拓と国府防衛の屯田兵的役割を担っていたはず。それに対する隼人たちは勝手にやってきた国司や豊前の農民に強い反感をもったことは間違いない。この不満が爆発したのが、養老4年（720）の隼人たちの反乱であろう。

論理は少し飛躍するが亀ノ甲遺跡の出土品は、この隼人の反乱と関係があるのではないか。四ケ所の遺構は同じころの埋葬と考えられる。同時期に鉄剣や土器が何か所も埋葬されたことは多くの死者を埋葬したことにならないか。

大伴旅人に率いられる朝廷軍に鎮圧された隼人はその後いっそうの服従を強いられていく。一方、隼人に殺害された国守陽侯史麻呂はじめ国府の役人たちは、どこへ葬られたのだろうか。亀ノ甲遺跡はそれらの人達のものと考えられよう。

7～8世紀の国分地方は濃霧につつまれ、その歴史を隠し続けてきた。その中でわずかに姿をみせたのが、亀ノ甲遺跡。そこから出土した一点の須恵器の平瓶。これで亀ノ甲遺跡のなぞ解きをした。正解であろうか。

地名研究会報

第４８号
平成８年３月３日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４８回例会　　平成７年３月５日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江之口汎生・納　栄蔵・大田照夫・大山純一郎・小園公雄・野村妙子・肥後芳尚・平田信芳・藤井徹雄・鉾之原矢七・山崎盛隆（計１２名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　　P.166 ～ P.169

（話題となった地名および事項）　赤米、please(JR九州）、南島路整備と南九州経略、油久・現和、榕樹・アコウ・ガジュマル、馭謨郡と熊毛郡

赤米、please(JR九州)

平田　これを読むと、種子島は稲の種子にもとづいているということですね。宝満神社に奉納する「赤米」は、日本ではあまり見られない祭り用の米ですから、その稲の種子から出て来たとみるのが自然かも知れません。米は普通、インディカとジャポニカと言いますが、赤米はジャヴァニカという系統で、あまり注目されていないタイプです。

小園　赤米は日本海の方を北上して能登半島あたりで上陸したと追跡できる。神事用としての赤米の栽培は民俗学ではかなり重要視している。

平田　重視してるでしょうね。

納　赤米を神社にあげるというのは、知ってる範囲では、種子島の宝満神社は勿論ですが、対馬にもあるのを聞いたことがあります。

平田　ＪＲ九州が宣伝用にパンフレットを毎月１回出すのですが、二・三月前の号に対馬の赤米が特集されています。

納　あゝ、そうですか。

平田　その資料をコピーして来ましょうね。

鉾之原　あの本はいゝ。あれは面白いテーマをいろいろ扱っている。

平田　あれは「九州もの知り学」というシリーズを出していますからね。案外知られていないデータがあります。毎月、月の終り頃に出るのです。例えば二月の終りに三月号が出るのです。その頃に西駅に行けば飾ってあります。自由にとってこれます。

納　そうですか。どの辺にありますか。

平田　改札口の横にパンフレットを並べてありますから。

鉾之原　見つけにくいときは、旅行案内所。

平田　はい、ジョイロードという所。

鉾之原　非常に面白い記事があります。

平田　汽車で通っているから、もう３年分ぐらいたまりました。

鉾之原　ほんとに良いのが載っています。

平田　九州学としては注目に値いします。

藤井　南薩方面の名寄帳を見ますと、年貢米の欄に真米と赤米というのがあるのですが、今云われた赤米は藩政時代の赤米とはどんな関係があるのでしょうか。

平田　さぁ、その辺はよく判りません。今から調べる必要があるとは思います。

藤井　真米というのはいろんな意見が出るのです。

江之口　唐干田(とぼた)というのがそれでしょう。要するに何というかな。条件の悪い所は、唐芋みたいなものでも納める。地名にたくさん唐干田というのはあります。

藤井　トボシ米であろうという意見も出ました。ところが違うというのです。南薩方面、とくに日置では年貢米を納める時に、田圃から納めるのは名寄帳に真米と赤米と二つに分けて金高を入れたのです。

南島路と南九州経略

平田　今日読んだところは、種子島が歴史にどれだけ出て来るのかということが 166ページ から 167ページ に書いてあります。そして 167ページ の上の段には種子島が流人の島だったという具体的な例があげてあります。リストアップとしては一番詳しい資料だと思います。年表を差しあげてありますが、これは一月前、国分高校の三年生に郷土史講座として話をした時のものです。種子島・屋久島が日本書紀・続日本紀にどういう形で登場するかという年表です。

695年までの記事が日本書紀、それ以後は続日本紀になります。これを整理すると、616 年掖玖の人が流れ着いた。そこで 629年田部連を掖玖に派遣した。それで掖玖島の人がやって来た。677 年に多禰島の人が御馳走されているわけです。679 年に倭馬飼部連が多禰島に派遣され、この使節団が多禰島の図を報告するわけです。先程、甕藩名勝考の天武２１年が天武天皇１０年の間違いと指摘したのは、この事です。この使節が行った時に薩末の比売・久米・波豆・衣評督衣君県・助督衣君弓自美・肝衝難波らにしたがう肥人（ヒビト、クマビト）らが覓国使らをおどして物を奪おうとしたので竺紫総領に討たせた。その延長が薩摩と多禰を討ち薩摩国と多禰国の設置、 713年の大隅国の設置になるわけです。これは薩摩国・多禰国・大隅国の設置について従来ほとんどの人が取りあげて来たことです。

右側は遣唐使の表で、南九州に関係した遣唐使をリストアップしたものです。遣唐使は 630年、犬上御田鍬が派遣されることから始まります。第２次遣唐使が 653年。高田根麻呂らの乗った船が薩麻の曲(くま)竹島の門(みなと) で遭難した。三島村の竹島にあたります。竹島には高田根麻呂らを祀った大山神社があり、言い伝えもあります。遣唐使は最初は北路、朝鮮半島沿岸を伝わって行くわけですが、新羅との関係が悪くなり、とくに 663年白村江の戦で敗れて朝鮮半島づたいに行けないものですから、南に下って来るわけです。それが南島路です。したがって多禰島に使節団を派遣したというのは、遣唐使の派遣路を確保するために、中央政府としては南九州および南島を調べあげなければならない、そういう必然性があるわけです。そして調査団を送って来ると現地人と摩擦が起こる。そこで軍隊を送り込んで征服し、国を建てる。そういう経緯が薩摩国・多禰国の設置であって、最後に大物の大隅隼人が従えられて大隅国が成立したということになります。

左側の薩摩国・大隅国の経略というのは、皆それなりに調べている。遣唐使は遣唐使の研究者たちが調べている。これをドッキングしてみると、遣唐使の派遣と薩摩国・多禰国・大隅国の設置というのは密接に結びついたということが、はっきりして来るということです。歴史の道の調査が今年で３年度になりますが、そのレポートに書いた内容です。５月頃には活字になって出て来るだろうと思います。

以下、遣唐使で南島路を辿ったものは第七次遣唐使、第八次遣唐使。第七次は粟田真人が乗っております。第八次遣唐使は南島路によったのではないか。第九次遣唐使第一船が多禰島に着いたのいうのは、先程の甕藩名勝考にも出て来ました。第十次遣唐使の第三船が益久島に帰着する。これには吉備真備が乗っています。そこから紀伊国の牟漏岬まで、また行っているわけです。第十次遣唐使第二船が阿多郡秋妻屋浦に帰着する。これが鑑真が乗った船。阿多郡とありますから、秋妻屋浦は秋目で動かないと思います。遣唐船が帰着したというのは、坊津関係ではこれが一つです。坊津はよく遣唐使で栄えたと言いますが、鑑真が上陸した所だと言えばいいのであって、遣唐使で栄えたという必要はないと私は思います。

この時、第四船が石籬浦にたどり着いている。三年ぐらい前ですか、石垣浦に遣唐使がたどり着いたという記念碑が立ちました。石垣の人々は皆遣唐使が着いた所だと知るようになりました。私が十年ぐらい前、石垣に昔遣唐船が着いたのですがと尋ねたのですが、誰も知りませんでした。石碑一つで郷土史の理解に対する影響力は大きいと思います。

第十四次遣唐船。実はこの頃、南島路は廃れかけているわけです。 778年の遣唐船は南路という五島から直接揚子江口に行く航路が開けています。この南路で帰って来るのですけど、嵐に遭って薩摩国に流れ着くわけです。第十四次遣唐使第四船が甑島に流れ着きます。第二船は出水郡に流れ着きます。出水郡の脇本・阿久根あたりでしょうね。第二船の艦(とも)が。これは半分に割れるわけです。真ん中に乗っていた人々は溺れ死んで、後に乗っていた人々が甑島に流れ着きます。舳(へさき) に乗っていた人々は天草郡西仲島に辿り着きます。この西仲島が長島だろうと云われているわけです。長島に流れ着いた者の中に遣唐大使藤原清河の娘がいたと『続日本紀』に書いてあります。

そこで南島路が廃れて来たわけですから、左側の一番下、天長元年(824) 多禰島は必要でなくなったから国をやめて大隅国に隷けた、と。多禰島の消長というのは南島路の消長と大体並行していたことがはっきりするわけです。

たまたま昨夜ここを読んでみて、種子島があったので、この前まとめた資料を持って来ました。このまとめは歴史の道調査報告書第３集として５月頃出て来ると思います。

油久と現和

納　166ページの上の段に種子島の町村名が書いてありますけど。部落名が。

江之口　集落ですね。

納　集落ですかね。当時はこう書いていたのかなと思うのがあるのですが、真ん中の行に由久と書いてありますね。私の記憶では油久と書いてありました。

平田　あゝ、なるほど。

納　それからもう一つ。その下の方に安納(アンナフ) ・現和(ケンワ) と振り仮名が振ってありますが、島では「ゲンナ」と言っていました。

小園　これは藩政の頃のことだから、その時代はこういう表記があったかも知れませんね。

平田　「ケンワ」と書いて「ゲンナ」と読んでいたのでしょうから、ルビとしてはこれでよかったかも知れません。

小園　土地では「ゲンナ」と呼んでいますね。

榕樹・アコウ・ガジュマル

鉾之原　この榕樹は各島にありますか。

小園　これは各島にありますね。

平田　アコウの木。これはあちこちにありますね。

鉾之原　木の場合は榕樹。

平田　アコウの木を榕樹という。それから榕城という呼び名が出来た。

青柳　アコウの木とタブの木は違いますか。あゝそうか、榕樹のこと。ちょっと違いますね。

小園　ちょっとおかしなのが、タブの木。

納　ガジュマルに似た木。アコウはちょっと違う。

小園　違いますよね。

鉾之原　あっ、そうですか？

納　私が聞いたのは、片方は落葉樹で、一方は落葉樹ではない、と。

鉾之原　どっちも落葉樹じゃなかけ？

小園　南の方ではタブも落葉しない。私どもは、小さい頃はタブと言って実がなると汁をなめよったけど。いわゆる線香の材料になるタブではなくてね。

タブとガジュマルと二つある。

平田　タブとガジュマルでは、だいぶ違うよ。

小園　あれはガジュマル。榕樹というのがアコウやらいな。

平田　二之丸の石垣にへばり付いた木がある。

鉾之原　あれはガジュマルでしょう。それから、あそこにある。西桜島の海岸線にある木。あれもガジュマル。

小園　昔は、竜ヶ水の所にあったのですけどね。あれがもうなくなった。

平田　まだ、ありゃせんけ。

小園　もうなくなった。海岸べたにずーっとあった。

鉾之原　これは、お釈迦様が悟りを開いた菩提樹でしょう。

平田　お釈迦様？菩提樹？（笑い）。話が発展しますね。

鉾之原　私はそう聞いたがな。

平田　肥後先生、どうですか。ちょっと待って。植物の先生に聞きますから。

肥後　種子島のはガジュマルです。こっちでは南薩の方にあると思います。こちらの海岸にあるのは全部アコウです。

鉾之原　アコウですか。

肥後　ガジュマルは葉が小さい。

納　葉が厚くて、緑が濃い。

肥後　こっちの海岸にあるのはアコウです。葉が大きいのです。さっき云われたタブに似た木はイヌビワです。タブの木　という、赤い実のなる、あれはイヌビワです。あれは落葉しますけどね。

小園　私は与論にいましたし、よくトカラにも行きますけどね、慣れて来ますとね、どっちでも通用します。

平田　植物名はあちこちでいろんな言い方をしますからね。ごちゃごちゃになってしまいますね。

納　ガジュマルの場合は、気根の下り方が違いますね、私の見た限りでは。屋久島の志戸子にガジュマル公園があるんですがね。気根がだらーっと下がって来る。それでこの辺のアコウを見れば気根が下がるというよりも枝がそのまま下におりているように思います。

鉾之原　榕樹。

納　植物名は。

鉾之原　これに書いてあるアコウ。同じですか？

納　アコウは仮名ですよ。漢字はないですよ。

鉾之原　それは判るけど。

平田　これは、まぁ、当て字ですから。

鉾之原　当て字ですか。

小園　これが地名になってるわけだな。

駅謨郡と熊毛郡

青柳　167ページに郡を合わせたということがありますが、能満を合わせて駅謨郡、それから益救を合わせて熊毛郡。この説明に対して、これは間違いで能満と熊毛を合わせる。それから駅謨と益救を合わせるの間違いだと、この地方を説明したものには大抵そういうふうに説明してあります。この前の小川先生の話でもそういう説明だったのですが、このまま理解できないのかと私は思うのです。まぁ、島と島とは別々だけど。

平田　うーん。

青柳　そのように理解しても不都合はないような気もするのだけど。どうですか。

平田　今までは間違いだという理解で済んでますね。これは間違いでない、とびとびに結びついても船で往来することですから。

小園　野間は南種子でしょう。

納　野間は真ん中です。

小園　まぁ半分から南の方。そうすると熊毛は。

平田　北。

小園　北でしょうね。駅謨が今の上屋久になるのですかね。そして屋久がうしろ、と。その結びつきが、舟でみたのか、想像でですね。

平田　それは何とも言えない。

小園　これは今でも研究会で問題になるところです。しかし大体のところは、このような空気です。

平田　手がかりが一つありますね。平安末期の神名で、肝属郡の四十九所神社と駅謨郡とみられる十三所。十三の神社があります。十三の神社を押えて行ったら解決するとは思うけどね。四十九の神社や十三の神社を押えていくというのは難しい仕事で誰も手がけていないテーマだけど。

小園　それをすれば。

平田　それをすれば解決すると思います。じゃーちょっと休憩しましょう。

マムシの神様

江之口汎生

ご無沙汰しております。いろいろと雑用が重なったりしてなかなか参加できませんでした。地名研究会でこういう話はどうかなと思ったのですけど、昨年の暮に次は話をということで連絡を頂き、テーマをしぼっての話でしたので、こういうタイトルにしました。

昨年の秋、新聞の死亡広告で小川先生の訃報を知り驚きました。私が地名に興味をもった頃にまず始めたことは文献を集めることでした。その頃平田先生の文献もありましたが、平田先生はどちらかというと古代地名、郡郷の比定とか、そういうものが多く、その点小川先生は今われわれが調べている自然地名とか、ごく普通の地名。しかも自分の足で調査されるというやり方でした。一通り小川先生の文献は集めましたが、突込むところがないくらいの完全な資料が揃えてありました。小川先生から現地調査とか類例地名の調査が大事ということをつくづく教えられました。先生の話をこの会で最後に聞いたのも確か「提水流（さげる）」という発表がこの席でありましたが、あの時もそれぞれの地名の写真を示しながらの発表でした。それが小川先生の発表を聞いた最後になりました。以上、小川先生とのかかわりを最初に述べました。

マムシの神様ですが、25年ぐらい前三巻本の三国名勝図会を古本屋で手に入れ、読んでおりましたら1番と2番の記事があって、面白い信仰・習俗があるものだと思ったのを記憶しております。ずーっと後になって『横川町の文化財』という冊子の中に、マムシの神様が写真付きで出ておりました。それから出水の高口神社ですね。これは5番。この（おかみ）という字はワープロにないもんですから口にしてありますが、雨かんむりに口を三つ書いて下に龍。これをオカミ。万葉集では「わが岡の口神に言ひて降らしめし、雪のくだけしそこに散りけむ」という藤原夫人の歌（巻一、一〇四）があります。要するに雨をつかさどる神です。こういう神社が出水にあり、そこでも似たような習俗があるということを聞きました。あまり興味はなかったというか、調べてみようという気にはなりませんでした。

それでマムシの神様を発表しろということで連絡を受けまして、それじゃ調べてみようということで正月休みを利用して二日ほどかけて調べました。お陰で風邪をひきまして、とんだ厄病神になってしまいました。一応自分なりのストーリーを出しておりますが、これは自分なりに出した仮説ですので、まだ検討の足りないところもあると思います。ご指摘頂ければと思います。

まず最初に、神社でそういう守り札を出す、そういう習俗をまとめてみました。それが1から5までです。これを見ますと、荒田八幡なんかは明和6年

の本田親盈の『神社考』の中にすでにそれらしいのが出ております。一番最初のところです。国分の大穴持神社にはそれらしいのはないのです。明和６年の時点での調査ではないのですが、毎年海が荒れて竜蛇の神が来るということが書いてあります。今ここにコピーを持っておるのですが、そういうことが書いてあります。その時点ではマムシ除けの護摩・守札を出すとか護符を出すということは書いてありません。だから、それ以後にそのようになったのじゃないかと思っておるのです。国玉神社、荒田大王神社は見ての通りです。

２番目にこれは前回の発表の時に肥後先生が写真で回されたと思いますが、そういうのをまとめてあります。６番から１０番までです。まず重要なことは蛇を持っているということです。蛇とそれから神官が持っている笏じゃないかと思ったのですが。文献を見てみますと、何と言いますか、パターンがあって宝剣と蛇とか竜を持っている。それが一つの基本パターンだということが書いてありましたので笏ではなくて宝剣かなと思ったのです。

それで一つ図を出しておきました。このような像です。この場合は左右の持ち物が逆になっております。普通は左手に蛇を持っているのです。これだけは逆です。ただし、マムシの神様とか、そこの砂をまけばマムシが来ないとか、いろいろあるんです。その一部分が脱けたり、単にマムシの神様というだけの全く他の伝承をもたないのもあります。それも書いてあります。そこに出している図は樋脇のですけれども、全くの水神さんであって、マムシの神様とも云わないし、それから砂をまけばなんだかんだということもありません。基本的にこの信仰というのは、神社でマムシ除けの御札を出すとか、神社の床下の砂をとって来る。砂というのはいわゆるセメント砂という言い方をしていますから、いわゆる乾いた砂、川砂とか海の砂になります。それをとって来て家のところにまけばマムシが来ない。そういう信仰があります。砂がなくて、ただマムシの神様というだけの場合もあります。それは一通り見て頂けば判ると思います。

それから３番目は、そういう像でありながら水神様というだけでマムシの神様と言っていない。そういうのを１１番と１２番にあげてあります。

荒田八幡と国分の大穴持神社、それから出水の高口神社。これらに共通するのは砂浜に作られた神社である。乾燥地でもともとそういう地域があったのではないかと考えたわけです。そういうのを６番目にまとめております。

今はマムシの神様と言っているのですけれども、水神様をそう呼ぶ場合はちょっと違うと考えなければいけないのじゃないかなと思っております。一つには蛇を持っていないから、そういう信仰がない所があるということ。それから蛇という存在が、最近では箸中古墳が有名になりましたけど、それから三輪山がありますけども、私がすぐ思ったのは八又大蛇伝説です。八又大蛇伝説はいろいろ云われますが、簸川が砂鉄の産地であって、その精製の過程で砂を流すもんですから、天井川になって河川が荒れて毎年洪水を起こしていた。だから、その八又大蛇を退治したのは、そういう荒れている川を何らかの方法で制御して、荒れなくなった。そういう実話が背景になって神格化されて神話になったんじゃないかという考えがあります。蛇を持っているということは暴れている蛇を押えている像ですから、それによって氾濫しない。氾濫の源である蛇を神様が手に捕えていることで氾濫を起さないというように具象化されて、具体的に水神様になったのじゃないかと思っているわけです。

それだから、水神様の蛇を持っている像も最初は蛇は蛇という認識が恐らくあったと思うのですね。年月が経っていつの間にか蛇ではなくてマムシだと

誤って考えられて、いつの間にか水神様がマムシの神様という形になって行ったのじゃないか。だから１番目と２番目の項目は類は一緒ですけれども発生は別々ではなかろうか、と思っているわけです。

７番目は肥後先生が調査されて私は未だ写真でしか見ていないのですが、それをあげておきました。三日ぐらい前、それこそこの資料を作った後でこの『日本俗信事典』というのを読みました。昭和57年刊行です。本箱の中にほこりを冠っていたのを眠気ざましに寝ながら読んでいたら、私は鹿児島県だけを視野に入れて仮に結論を出したわけですけれども似たような習俗があるのです。８番にあげてあります。これはその中にあったのを引いただけですからもっと正確に調査をすれば、まだ出て来ると思います。例えば２番目の溝辺から行きますとお伊勢さんの砂を持って行くとマムシに噛まれない。伊勢大神の御札はマムシ除けであるから、踏むとマムシに噛まれるとかですね、知立市の知立神社はマムシ除・蛇除の札を出すので氏子地区には蛇は一匹もいない。私が調べた中では、これが一番範囲が広くて阿蘇地方までそういうお札があったということが書かれています。和歌山市の矢宮もマムシ除けの守り札を出すとか、佐賀県の諏訪神社では三月節句の明けから五月節句の間に神社に参詣して砂を持って帰ってマムシ除けにする。砂をマムシにかけると動かなくなるという。これは荒田八幡の項に書いてあったこととまったく同じ内容です。それから唐津の諏訪神社でも同じようなことが書いてあります。百姓・遊芸者が個人でマムシ除けの札を出している国が古川古松軒の『四神地名録』に出ているとも書いてありました。この中の百姓というのは恐らく修験者崩れじゃないかと思うのですけど、そういうのもあるようです。

茗荷畑に御用心、という教訓になるような習俗も熊本県の球磨郡などでは言われているようです。実は私もマムシに噛まれたことがあります。盆に茗荷をとっていたら、それこそチビ、ほんの子供ですが、子供は子供でもマムシなんですね。噛まれたことがあります。こんないい言葉を知っていたら手を出さなかったのに、もっと早く知っておればよかったなと思います。本はほこりを冠るようじゃいかんなと、つくづく思いました。

それから蛇はもともと鉄を嫌うということが『古今著聞集』に出ているようです。それで水神様が宝剣を持っているのは、あるいはこの影響かなと思ったりしました。全国的なひろがりを持っているようですから、今後は県内だけでなく広く調査して本県とのかかわり・影響などを探っていきたいと思います。蛇持ち水神とマムシの神様はそれだけにして、あとは資料ＡからＤまでを簡単に説明します。

以前、この会でも小園先生があの大隅国の古代の交通路を話されたこともありましたが、その時に話題になった平家物語ともう一つ『旧元集』というのをここに出しておきました。私はこっちの方は地理的にうといので、どなたか地理に明るい方が調査されてこういう会で話して頂ければ有難いです。旧元集に「大津馬場付近に小森あり、これを日向森と号す、境森なり」とあります。これは大水駅につながるかなと思ったりもしました。天明元年の書写となっておりますから、300 年前にはこういう地名が現存していたということが言えると思います。もっとも全然別の場所だったら見当違いになります。この辺もどなたか調べてくだされば有難いです。

資料Ｂ．私は神代三陵、可愛山陵・吾平山陵・高屋山陵をちょっと調べているもんですから、出してみました。以前、江平先生の文が『知覧文化』に出ていたようですが、私は「可愛」というものの読みを知りたくて作ってみました。ただし、現在の嬢娃(えい)という字を使ってありますが、面倒くさかったもんですから私が勝手に現在表記にしました。もし

専門的なことで引かれるのであったら、これは当てになりませんので原本を見てください。

それで、文永４年に「えのこをり」、元亨５年に「ゑのこほり」。これはア行とワ行の混同が見られますが、頴娃はこの時代では「えの」と読んでいた。「の」は助詞ですから、語幹は「え」になると思うのですが、そういうのが旧記雑録に見えます。それ以外に、元亀４年、寛文11年のを、私が見付けて資料として出しておきました。それから、正徳６年に「今エイ郡読ンで江乃」、誤植じゃないのです。このように書いてあったもんですからそのまま出したのです。この時点で「えの」が「えい」に変った。この前後じゃないかを考える資料になるんじゃないか。ですから、頴娃と書いてあっても、少なくとも1700年ぐらいまでは「えのこほり」と正確に読んでいた。それで続日本紀に出て来る衣君とか衣評という表現に直結する。直結でなくても、それに関係がある。それにつながると考えるわけです。

そうすると、いわゆる可愛山陵というのは川内市になってますが、私は神代三陵そのものが他の二陵も含めて、古事記とか日本書紀編纂の頃には既に不明であったという解釈をとるわけです。あえて求めるとすれば頴娃郡の村近に求めるべきではないか。それが一番近いのではないか。少なくともそういう地名が残っていることが確認できる、その一点だけです。その点、川内は和名抄では高城郡新多郷ですから全然それらしい地名は残っていないわけです。頴娃の方は少なくとも1700年ぐらいまでは残っていたのだから、もし求めるとすればこの辺ではないかなと考えるわけです。いろいろ調べてみて開聞神社にちょっとそれらしいのがあるようですけど、具体的に可愛山陵とつながるような伝承は現地では確認出来ません。

次に資料Ｃ。川内に永利(ながとし)という所があります。最近、県の住宅公社が宅地分譲をしているようで新聞広告でも出ましたので、あるいは目にとまった方があるかも知れません。文献でも1200年頃にはこの地名が出ていますから、わりに古い地名になります。しかし、これを平仮名で読みを示したのは一例もありません。大体地名というのは、さっきも赤生木が話題になりましたが、同じ表現が千年あるいは七・八百年も続くというのは、まずないのです。その点、この「永利」は同じ文字がずーっと続いている。しかも平仮名書きはないわけです。私が調べた限りではありません。ただ一例『三国名勝図会』に「ナガリ」のルビが振ってあります。参考までに申しますと、市来(いちき)も『三国名勝図会』には「イチク」とルビが振ってあります。これは『三国名勝図会』の勇み足かなと気にかかっていたのですが、県立図書館で山崎の御仮屋文書を見ておりましたら、明治２年１０月２８日の条に「以後はナガトシと呼ぶ」ということが明確に書いてあります。この事実を知ってすぐ思ったのは地元の人々というのは当てにならんもんだということです。僅か 130 年前のことです。「ナガリ」から「ナガトシ」に変ったことを地元で全く聞かないのです。500 年とか 7～800 年前のことであれば当り前でしょうが。よく地元のことは地元に聞けてと言いますが、130 年ぐらい前のことも地元で全くつかんでいないということは伝承そのものもあまり当てにならないと私は理解したわけです。

この永利(ながり) については、北九州に永利書店というのがあります。それからＮＨＫに永利(ながとし)という記者がいます。10年ぐらい前ですが、両方とも連絡をとりましたら先祖が薩摩国永利という返事を貰いました。永利書店は明治になって読みが変る以前に川内を離れたのじゃないか、つまり「ナガリ」と呼ばれていたまま他所に出て行った。一方、永利記者の方は「ナガトシ」と変ってから離れたのではないかなと私は理解しているわけです。

最後になりましたが、以前この会で平田先生が「シラかシロか」という話をされましたが、その時に話題に「ひられ・ひらら」が出ました。私が知っているのをワープロに入れていたもんですから打ち出して来ました。

通り一遍でお聞き苦しかったのではないかと思います。あとは質疑応答でカバーしたいと思います。

〔質疑応答〕

平田　いろんな問題提起が出されました。例えば可愛山陵の所在地は頴娃郡だとか。これは浜崎さんが見えていたら喜ばれたでしょおうけど。それから永利、「ナガリ」と「ナガトシ」。何なりと質問を出してください。

納　　マムシの鹿児島県の例で、上から３番目に国玉神社とあります。大口市大田字黒岩としてありますが、どの辺ですか。

江之口　これは市役所のそばです。ちょっと水俣寄り。郡山八幡の近くです。

納　　はい、はい。判りました。あすこは、確か稲荷神社と俗に言っていたようですが。

江之口　あすこは八坂神社。

納　　八坂神社？

青柳　それとは違うと思います。

納　　そこの床下の土を持って行けばマムシ除けになるという話は－－－。

江之口　どこですか。

納　　大口で聞いたのです。

江之口　八坂神社？

納　　あの頃は八坂神社と一般には言っていた。本当の名前は知りません。これだろうと思います。

江之口　ありがとうございました。調べてみます。この国玉神社は江戸時代初期の棟札が残っているようです。祭神は、猿田彦だと思います。

納　　うろ憶えですけど、大口市大田の字が確か竿境(さおざかい) だったと思うのです。うろ憶えではっきりしたことは申しあげられませんが。

江之口　ありがとうございました。私も一通り眺めただけですから、調べてみればいろいろあると思います。

平田　マムシが茗荷の花を食べに来るという話は本当？

江之口　私が噛まれたのだから間違いありません。

小園　茗荷は密生して、よく見えないもん。

江之口　湿地帯で湿気の多い所です。

小園　茶園とか茶畑とかな。畑の隅があるでしょう。すぐ手を突っ込むもんな。

鉾之原　川のいわゆる南向きの暑い所。湿地帯。

平田　湿度の高い所ですね。

江之口　この俗信事典には蛇とマムシの項だけで52ページにわたって書いています。びっくりしますが本というのはたまには見なきゃいかんな、と思いました。

平田　積んどくじゃいかんな。

江之口　小さな字で沢山書いてありますよ。

鉾之原　蛇信仰というのは中国から流れて来たのですかね。

江之口　いろいろ混同しているようです。在来のもあったのでしょうね。蛇は、特別変ったものじゃないですから。数が少ないというわけじゃないでしょう。日本には日本なりにあったと思うのです。影響はあったと思いますが。

平田　俗信事典？

江之口　これは動植物編です。

平田　面白そうな本だね。

鉾之原　マムシを食べる場合、栄養があるんですか？

江之口　うーん、いろいろ書いてありますね。

鉾之原　以前、そこにマムシのラーメン屋がありましてね。１皿千円とあるのを、三つも食べたという話を聞くもんだったけど。

平田　その辺にありましたね。

江之口　精力剤なんでしょうね。あんまり食べると鼻血が出ると言います。

鉾之原　昔は競馬の馬にもマムシを食わせよったそうですから。

平田　昔はドーピング検査がなかっただろうから。

鉾之原　噛ったら、かりんかりんして唾も出しはならんかったけど。

小園　蛇・マムシというのは、蛇伝というのですかね、白蛇伝とかね。日本霊異記などの古代の本にも大蛇の怒りによって川が氾濫するとか、あるいは行基にかかわる話で、ある母親がこの赤ん坊は食べ過ぎて困ると相談したら、これは川に捨てなさいと言った。母親はびっくりしたが、行基が捨てなさいと強くいうもんだから捨てたところ、やがて蛇の姿になった。捨てなければ家族全員食い殺されるところだったというような伝説が載ってますよね。蛇伝というのは多い。だから、八又大蛇の話は面白いと思います。確かに出雲は砂鉄がとれる。出雲・吉備・大和とかいろんな勢力の争いがあるわけですからそれをもって来ればなお面白いですね。

江之口　『仏像の持ち物と装飾』とか『仏像を訪ねて』という本を見ますと、いわゆる仏像には観音とか如来とかいろいろありますが、その中の一つに天部というのがあります。弁財天とか多聞天とか、皆さんご存知だと思いますが、その中に水天というのがあって、それが蛇や竜あるいは宝剣を持っていると書いてあります。それは恐らく仏教系の解釈です。何と言いますか、神統系の解釈は先程言ったような八又大蛇みたいに、蛇はいわゆる河川氾濫の象徴であり、それを手中に収めることによって蛇が暴れることが出来ない、すなわち川が氾濫することがないという願いをこめて、そういう神統系の石像が出来たのじゃないかと思っています。お寺にある水天像と蛇持ち水神像の相互関係は、今後も調べる必要があると思います。

野村　先程の話は、蛇とかマムシとかを嫌うものとしてつかまえているように聞こえるのですけども、そうじゃなくて蛇そのものが守り神とか家庭を守っているものとしては考えられませんか。例えば都城の霞神社とか、白蛇とかありますね。

江之口　嫌う意味ではなくて、私が調べたのは面白か神様がおいやっねー、ないごてやろかいということで調べたのであって、忌み嫌うという意味ではありません。それは両刃の剣ですよね。

野村　マムシは嫌われますよね。

江之口　もちろん、しかし日本書紀などを見ると三輪神社の祭神は蛇ですよね。だから、なんと言いますか、良く思う反面、悪いのもあるんじゃないでしょうか。

野村　日本の古い信仰としては蛇を御神体としているのがあるわけですが、マムシの御神体というのもあるのですか？

江之口　神格というのではなくて、水神様の像の形としてマムシを持っているということ。マムシを神体としている神社というのは私はまだ知りません。

野村　マムシと水神様の関係ですか。水神というのはむしろ水の恵みとか、そして蛇は何か呪文があるのか、良いものとして水を恵んでくれるというのが蛇信仰。日本の民俗として蛇信仰というのがあると思うのですが、悪いものとしてマムシですか。

江之口　「蛇抜け」ということばがありますね、蛇抜け。豪雨があった後に山が崩れる。あれを蛇抜けと言っております。地名としては蛇喰(じゃばん)とかいうことばもありますが、あれは地下の蛇がちょっと暴れて、抜けたと考えるのです。私が考えた像の意匠というのも、蛇が悪さをし、池を決壊させたり河川を氾濫させたりする。だから暴れる元凶を持っておればそういうことがないという形で、像が編み出されたと私は理解したわけです。

野村　だけど、溝とか昔池だった所を見れば、すぐ気が付きますけど、むしろ良いものとして伝承があるような気がします。

江之口　そういうふうに着目していませんでしたので、今後の研究対象にさしてください。

鉾之原　蛇が人間に役立つと、そういう意味で。

野村　恐ろしいけど有難いものだという意味で。

鉾之原　全般的にはね。

野村　小さい時に、家の守り神として大事にしていた。あまり田舎では怖いという感じはありませんでした。マムシとかは人間に害を与えるというマイナス＝イメージがありますけど。それはまた、強いものとして見ると。

江之口　あれは精力が強いですから、私の小さい頃でもけ死んだマムシでも蛇でも水の中に入れたら生きかえると言っていましたから、それが事実かどうかは知りませんけど、あの生命力はすごい。それにあやかりたいということで崇める敬うということはあったでしょうね。蛇に小便をかくればキンタマがはれると、よく言っていましたもんね。

野村　それはミミズですけどね。

小園　現実に江戸時代に入ってから水田開発が1500万石から3000万石、4500万石と伸びて行くのですがね。そういう形で水田が開発されて湿地帯あるいはそう言った河川のあたりが開発されて行って、蛇の害も案外多かったのじゃないか。そう言った点で蛇にもやっぱりおとなしくしてもらいたいし、水神様につかまえてもらうという形でやって来た傾向はなかったのか。ハブでも湿地帯は危険だと今でも奄美ではいうわけですからね。人間と共生という形でとればいいのでしょうけど。そういうのが多かったのじゃないですかね。

江之口　三国名勝図会のいわゆるマムシ除けの護符を出すということは、昔から神社ではいろいろな御札を出していますよね。家内安全とか今で言えば交通安全ですね、だから、そういうものの一つとしてマムシ除けの札を出すところもあったというふうに考えればよい。

野村　御利益の一つとしてですね。

江之口　まぁそうですね。マムシだったらいくら崇めても、噛まれれば害があるわけですから。この本にもマムシに遭った時はどうすればいいかとか、噛まれた時はどうするかというのを沢山書いてあります。

小園　江戸時代はマムシに噛まれたら、ほとんど致命症ではないでしょうか。切りとるとかあるいは吸いとるとかそんな方法しかなかったわけですから

鉾之原　とくに子を産む時期のマムシの毒はすごい。秋マムシですね。稲を刈る頃に噛まれると死ぬと云われていた。

小園　マムシの腹を割ると子供が出て来るでしょう。あれは胎生ですけどね。卵胎生。あれは食いつくと、はれる。生まれたばっかいのお腹の中のマムシが食いつくとね。マムシはもともと天性の毒を持っておるのですね。

鉾之原　大昔は爬虫類社会でしょう。ともかく人間というのは蛇の仲間の動物に相当いじめられたんじゃないですか。だから遺伝子が残って（笑い）。

小園　本能的に蛇というのは身構えるところがあるのなぁ。

鉾之原　普通、動物は逃げるのですが、蛇は向かって来る。小さい動物で向かって来るのは蛇だけ。

小園　まぁ蛇と人間との共生という形で神話の中に、誰ですか彦火々出見命かな、日向で赤ちゃんを産む時に見るでしょう。あれは結局蛇ですもんね。

平田　あれは、ワニ。

小園　ワニですね。そう言った意味で人間との共生というのがあるんですね。

野村　こわいから崇めたてまつるというのはあるかも知れませんね。

小園　共生というのは仲良くすること。昔は元気があったんじゃないでしょうか。反面、恐怖心も相当人間の方に存在するようですね。私なんか、そう言いたくはないのですが、蛇を見たら殺しよったですから。一回蛇に追いかけられて、こわかったことがあります。本能的に蛇というものはこわくて、池とかで泳ぐときは大蛇を思い出したら泳げないです

江之口　だけど、家の中にいる青大将。むしろ大事にしろと言ってますよね。家の神様だ、と。

鉾之原　昔は、あれが鼠をとりよったから、大きな家の倉庫には入れてあったのですよ。青大将を。

平田　鼠除けにだろう。

大山　あれは、鹿児島では、屋渡りと言ってましたね。

小園　ところが、蛇は蛇でも背中に赤い斑点のある、山なんていうのですか。

平田　山かがし、だろう。

小園　山かがし。あれは毒がないと見ておったのですが、あれも結構毒があって死んだ人もいるみたいですね。

大山　何年か前、新聞に出てましたね。

鉾之原　昔は天井の上からどさーっと落ちて来るもんだった。

小園　そんな家には住んでいませんでしたので（笑い）。

平田　他にないですか。蛇の話で賑いますが。

大田　マムシと蛇というけれども、神様になった場合は一緒に考えていいのでは。

平田　ちょっと待って下さい。肥後先生から説明してもらいますから。

肥後　この前ちょっと調べただけですから。水天のこと。蛇になっているのは、説明では宝縄。これが蛇・竜・縄と説明してあって、仏法でしばる、という。蛇でもあるし、竜でもある。両方書いてあります。さっき江之口さんが云われた水そのものと、川。これをつかさどる水神、水あるいは川の流れをつかさどる神。竜は水あるいは川を表わしているということです。水や川をつかさどる神が水天。それで吉野さんの本では、やはりさっき云われたように良い方と悪い方と両方、蛇信仰にはあるということです。水天は仏教伝来で入って来たのですから密教の信仰ですね。後で入って来たものです。日本にずーっと以前からあった蛇信仰との関係がどうなるのか、今後の勉強課題として残ります。確かに、青大将は家の神。それから白い蛇も。国分にも中国から渡って来た林家というのがありますが、ここの本家は「ヘッドン（蛇殿）」というのです。そこにも白蛇が住んでいたとのことで蛇の神様を氏神として祀っていたということを聞きました。

平田　なるほど林がヘッと訛るはずはないから。

肥後　白蛇がおったということで、神様に祀っていた。

納　今さっき吉野さんといわれましたが、吉野なんという人ですか？

肥後　裕子かな。

納　おなごの人な。はい、判りました。あの人は蛇について一冊出しておられますね。

肥後　一冊も二冊も。最近もまた出しておられますから。

大田　鶴田町に、鶴田と麓の境界にタッコという所があります。そして鶴田には古代の集石もあります。大体そこら辺で鶴田の人たちは終戦前、雨乞いをしよったのです。終戦後は、そういうことはしませんけど。そのタッコを、私は竜を呼ぶ、あるいは竜神と考えておったのですが、今日ここに来て竜神の話を聞いて興味をおぼえました。集石は昔の祭り場じゃないかと思います。それで水神も昔の雨乞いからだんだん変って来たのじゃないかなと今考えたわけですが。

肥後　それはそうですね。水の神ですから。今、

タッコという地名が出ましたけども、タブの粉からの地名、砕いて線香の材料にする。タッコというのは椨粉。水車を使って椨の粉を作る。それでタッコ山とかタッコとか、そういう地名が付いています。あるいはそれかも知れません。

小園　それは山手でしょう。

大田　はい、山手です。

平田　雨乞いには中国では蛇踊りが出て来るわけだから。

小園　あれは、今でもあるもんなぁ。国分の止上神社には、そう言った雨乞いの竜の頭が沢山ありましたよ。

大田　さっきタッコと言った集石の所が直径 2m、4mと、倍々になったような形になるのですが。

肥後　石がですか。

大田　それで、石がその辺にはないわけです。そこだけが。

平田　その石は山腹、山頂？

大田　まぁ山頂といえば山頂ですけど。古代の石垣の周囲にあるのです。それで、そこを調査してもらいたいと教育委員会の方に言うのですけど、一向してくれません。

肥後　あぁ、そうですか。タッコは水車を使うのですね。川縁です。

大田　川からしたら、もうだいぶ上。

肥後　山の上だったら、この意味はないと思います。タッコの方はですね。竜に関係があるかも判りませんけど。

鉾之原　ガラッパどんと水神は、全然関係はないのですか？山に行ったら山神と言ったり、川に行ったたら河童が水神だという話を聞いたりするわけですが、全然関係はないのですか？ガラッパどんと水神さんと、山神は。（笑い）。

平田　川内川流域では、どうですか？

鉾之原　一緒に言う所がありますよ。二・三日前の「ひろば」に書いてありましたけど鳥がヒーヒョーと鳴いて、山からの鳥の声が。

江之口　今でもおりますか？

鉾之原　おりますよ、河頭の山の所に。

江之口　うちの親父も川べりに行ってしゃがんで待っていたけど、鳴き声は聞けなかった、と。

鉾之原　聞こえるのです。朝６時頃河頭に行けば。

小園　鳥はなんという鳥？

平田　トラツグミ。

鉾之原　トラツグミという鳥がおるのですか？

平田　はい。

小園　ヒョウヒョウと鳴く。しかもお彼岸とか。

鉾之原　ちょうど今頃ですよ。それで、水神さぁとガラッパとは、全然別ですか？

平田　ガラッパが水神になっているのは、戸田観音かな？

江之口　水神というのは、どっちかというと河川の氾濫とかにかかわる。それに大してガラッパというのは悪さをしない。生活に困るような悪さはしないので、大蛇じゃなくて、何ですかね、ミズチの延長だと思います、ガラッパは。水神はどうだったのですかね、判りませんが。ちょっと待って下さい。柳田国男の解釈がどこかにありましたので、それを読みます。抜き書きですけど、これは別の資料です。日本民俗学事典によると、水神を現実に存在するもの、例えば蛇・鰻・大蛇などの概念にまで導き出した。しかし、蛇が水神と結合するに至った本質的なものは何であるか、未だ解明されていない。記紀などの古典にみられるミズチは蛇体のものであると考えられたが、もとはただ水霊というべき内容を表わす言葉であった。霊ですね。霊は神とは別ですね。

鉾之原　ガラッパは河人とか河子・河童とか。

小園　区別してますよね。

平田　興味のある方は地名に残っているそういう民俗神を拾って整理してください。今日はこれで。

‖一般・1‖　改定　水神とマムシの神様

鹿児島地名研究会
江之口汎生

7-3-3作成
41行=5.4P

《はじめに》《》

・マムシ避けの神様とマムシのいない村
・右手に杓、左手に蛇をもった水神像
・池沼の主は大蛇、八頭大蛇伝説と河川

【1.　マムシの神様A＝一般の神社】《》

1　荒田八幡（鹿児島市荒田　祭神＝八幡神）
・社殿下に大キ成蛇がいたがある日居なくなり（垂跡）以来八幡境内に蝮はナシ（神社考）
・当社は蝮を悪み給ふとて荒田一村其虫絶てなし社下の砂を拝請し以て鎮符とす身に帯れば其害に遇ふことなし其虫を見るとき此砂を撒けば則ち痿傷みて働く事あたわず（図会）

2　大穴持神社（国分市広瀬　祭神同前）
・村に麻を栽ることを禁ず又蛇生せず古来当社より蝮蛇を除ぐ神符を出す奇験あり（図会）

3　国玉神社（大口市大田字黒岩　祭神＝・・・・）
・昔は神殿床下の普通の土をマムシ避けの砂としたが現在はシラスを補充する
・昔はマムシはいなかったが今は上流から流れてきて見掛けるが噛まれた人はいない
・祭礼は四月と九月
・聞き取り＝大口市里の茶園　力(つよし・70才)

4　荒田大王神社（球磨郡錦町木上　祭神鎌倉時代初期の領主・平河右衛門義高）
・荒田地区は球磨川沿いの集落だが境内には川砂はない
・馬足に蝮が噛みつき義高落馬で委穂で目を傷め蝮退治以来マムシはいない
・以後キビやトウキビは栽培せず白馬も育たないという
・付近にマムシはいない　噛まれたらお参りすれば治癒
・境内の土（砂に非）を塗って山に入ればマムシに噛まれない

5　高口神社（出水市今釜　祭神＝高口・暗口）
・海浜部
・一に竜王様ともいう（祭神は『出水風土誌』では天水分・国水分）
・神殿下のマムシ避けの砂。海砂を補充する
・以前は無人販売されていた
・蝮は竜王の嫌なりとて同地に蝮を産せず（移入してもたちまち死ぬ）『出水風土誌』
・野田町上特牛の上記勧請の高口神社、大丸の地（池カ）王様も蝮の神様（＝田頭寿雄氏）

【2.　マムシの神様B＝水天宮・水神】《蛇持ちの水神像》

6　前玉神社（溝辺町三縄　祭神＝罔象神＝水神）
・クロミ川右岸の曲流地の砂浜
・右手に宝剣、左手に蛇。頭部に竜
・ここの砂を撒けばマムシがいなくなる
・年号あり、中央部にバンの梵字（梵字の例は多い）
・聞き取り＝塩入長造(86)

7　水天宮（牧園町甲辺＝俗にマムシの神様）
・笹之段地域の灌漑用水守護神
・右手に宝剣、左手に蛇
・砂を撒けばマムシに噛まれない
・例大祭に砂・お札をマムシ避けとしてセット三百円で販売
・砂（俗にセメント砂）は近くにはなく役員が準備する
・手の法索を蝮と誤解、寛政四年頃の建立（教育委員会案内板）
・聞き取り＝永江一二(62)

8　水天宮（牧園町轟＝俗にマムシの神様）
・右手に宝剣、左手に蛇
・砂を撒けばマムシに噛まれない（居なくなる）
・例大祭に砂・米をマムシ避けとしてセット三百円で販売
・砂（俗にセメント砂）は近くにはなく役員が準備する
・関連の民話がある（訪ねようふるさと牧園＝平成四年）
・聞き取り＝若松のぼる(66)

9　水神様（横川町上ノ・下植村）
・植村駅近くの天降川右岸の砂地
・右手に宝剣、左手に蛇
・砂を撒けばマムシに噛まれない（居なくなる）
・また牛馬の神様でもあり難産のとき参詣すれば生まれるという
・聞き取り＝上野正行(74)

10　水神様（栗野町恒次・上村轟坂）
・俗に「マムシの神様」というだけで他に伝承はない
・昔も今もマムシはいる
・寛保三年四月朔日湛水始とあり池塘開発に付随して建立されたカ
・聞き取り＝　　（　）

【3.　蛇持ちの水神像】《》

11　水神様（樋脇町沢牟田字滑）
・池守護水天天明三年三月の銘あり（作者は大磯作弥）
・【2.】と同様に蛇持ち像ながら他に既出の類の伝承はない

沢牟田の水神像＝千台8号

・持ち物はほかとは左右が逆になっている
・聞き取り＝亀田信夫(64)

12　水神様（横川町下ノ上馬渡バス停近く）
・湧水地（湿地）の共同井戸の水神像
・【2.】と同様に蛇持ち像ながら他に既出の類の伝承はない
・聞き取り＝上別府キイチ行(97)氏

【4.　その他の類】《》

13　マムシの神様（横川町つづら原）
・天降川右岸、上巾橋の側
・右手に宝剣、左手に宝珠を持つ
・蛇は描かれぬが天衣を「蛇が首に巻きついている」という
・あくまで「マムシの神様」で水神様とはいわない
・他に既出の類の伝承はない
・聞き取り＝小城ハマ(87)

【5.　分類表】《》

明らかに砂地　1 2 5 6 9 13
マムシが居ない 1 2 3 4 5
砂を撒けば　1 3 4 5 6 7 8 9
：文献記述から「マムシがいない」が「マムシの神様」に先行する
（乾燥地に社殿がありマムシは生息しにくい）
マムシの神様　5 6 7 8 9 10 13
蛇持ち水神　6 7 8 9 10 13（11 12 は全く伝承ナシ）
：上記二項は共通し「マムシの神様」は俗称
：川沿い・湧水地の井戸等水神様の設置条件からして「マムシの神様」は矛盾
：建立当時には蛇の認識があったと推察されマムシ云々は不可解
お守り　1 2 5 7 8

【6.　まとめ】《》

①湿地・日陰を好むマムシは砂地には棲息しない
：砂は浜砂に限定される
⇩　：出水・高口神社や国分・大汝遅神社、鹿児島・荒田八幡宮等など海岸部
〔牧園など内陸部でも川砂（俗にセメント砂）を使用〕
②河川氾濫から村を守る蛇を持った水神像
：八頭大蛇伝承や池沼の主としての大蛇・龍
⇩　〔河川の氾濫は大蛇が暴れることで発生する⇨蛇抜け・蛇喰〕
：水天像の意匠（右に宝剣左に龍・蛇索）は世界的な現象カ
③マムシの神様云々は後年蛇をマムシと考えたため
：同じ意匠でも「神様」「砂」「居ない」の伝承がまったくない例もある

∴横川町上馬渡など「井戸・湧水池」の水神は湿地で「蝮の神様」は不成立

【7.　蛇持ち水神様】《未調査分》

1 国分市府中・祇戸神社境内		右宝剣・左蛇	元禄 5年 2月
2 隼人町・隼人塚横	宮内原用水	右宝剣・左蛇	享保12年 1月
3 隼人町大津・大津好古氏庭	天降川用水	右　左	
4 隼人町内・龍波見家庭		右宝剣・左蛇	文化 3年
5 隼人町小田・旧大迫屋敷		右宝剣・左蛇	以上は肥後芳尚氏調査分
6 栗野町恒次・上村轟	（蝮の神様）水神	明治三十五年二月	『栗野町郷土誌』

【8.　類似の民俗】《日本俗信辞典動・植物編＝角川・昭和五十七年より》

壱岐郡芦辺町の寄八幡も蝮を嫌うので居ず余所から入り込んでもたちまち死ぬ（西海の伝説）
お伊勢さんの砂を持っているとマムシに咬まれない（島根県安来市）
伊勢大神宮のお札はマムシ除けであるから踏むとマムシに咬まれる（和歌山県日高）
知立市の知立神社は除蝮蛇神札を出す氏子地区には蛇は一匹もすまない（中部地方・阿蘇地方）
和歌山近在の矢宮もマムシ除けの守り札を出す
佐賀県東松浦郡浜玉町の諏訪神社に三月節句明けの日～五月節句の間に参詣し神社に飾ってある砂を受けて帰りマムシ除けにする。砂をマムシに掛けると動かなくなるという
四月丑の日に唐津の諏訪神社に参詣し神社の砂を受けて来て門口に撒くとマムシ除けになる
千葉では水天宮様のお札を竹に挟み大きく振り回して蛇除けにする
古川古松軒の四神地名録に多摩郡喜多村の百姓伊右衛門がマムシ除けの札を出している記事
茗荷畑にゃ御用心　マムシが茗荷の花を食いにくるから危険（球磨郡）
蛇が鉄を嫌うことは『古今著聞集・二』に見える　⇨　水神像の宝剣と関係あるカ
マムシが人を咬と必ずそのあとに水を呑む　⇨　砂地・乾燥地では生息しにくい

※伊勢・知立・諏訪・矢宮等類似の習俗があり「海浜」「乾燥地」の仮説はなお問題あり
※マムシ除けは「お札」の一種⇨それだけ切実な問題であった
※上記文献はマムシ・蛇の二項目だけでも全国の俗信を52ページにわたって収録する必見の書

《おわりに＝今後の調査課題》《》

・水神像（文字像、また寺院の水天像ではなく神様として）の全国的な分布調査
・「蛇持ち水神像＝マムシの神様」の全国的な分布
・上記以外に「マムシの神様」と呼ばれるものの調査
・知立・伊勢・矢宮など「マムシ除け」信仰のある神社の背景・歴史調査
：なぜそのような信仰があるのか、またいつごろからあるのか
：他に同様な習俗が行われている神社・寺院はないか
・上記信仰（知立・伊勢・矢宮などの神社）と本県の同類習俗とのかかわり・影響

《調査ご協力ありがとうございました》
個人　＝田頭寿雄　肥後芳尚　藤浪三千尋
教育委員会＝大口市・人吉市・横川町・球磨郡錦町・牧園町　都城市　薩摩町・加治木町

【史料A　大隅国府～島津駅】《》

A　さてはやに夏影、とかみ、あかさかといふ所を打過て、大隅の国けしきのもりにつき給ふ、少将此森を見給ひて

秋近きけしきの森になく蟬の　涙の露や下葉染むらん

と云名所は是やらんとぞ思しめしける、正八幡宮の御あたりをよそながら拝み奉り、宿願をたて丶、通られけり、少将は都にてさつまがたへと聞給ひしかば、さもやはと思給けるに、九州のうちには有ざりけり……　『平家物語』（＝宮崎県史別編　神話・伝承史料編より）

B　…肥後求麻日向須木境也。続山者拘留尊嶽、真幸飯野内諸県郡中自夫般若寺越上丘、久保此峠境也。其大隅国栗野金鳥居尾、大隅桑原郡日向諸県境宮内表者、大津馬場末小森(アリ)、此号日向森境森也。自其霧島山相続而焔之峯者大隅之内、襲之峯日向国坤方角也。自夫庄内赤坂越為界、末吉川切置爰国相松申為堺、赤夫婦石云処、是下大隅肝付境、日向者求仁院求仁郷境如斯　『日向五郡八院旧元集』（＝宮崎県史別編　神話・伝承史料編より）

【史料B　頴娃の訓とその下限】《含む開聞岳の噴火記録》

天武 4　700-6-3 衣評督衣君県　助督衣君弓自美＝続日本紀

和同　6　713-5-　「風土記の撰の詔」＝地名は好字・二字化

貞観 2　860-3-20 薩摩国頴娃郡従五位上開聞神加従四位下＝三代実録

8　866-4-7 薩摩国頴娃郡従四位下開聞神加従四位上＝三代実録

16　874-7-2 薩摩国従四位上開聞神山頂有火自焼…勅奉封二千戸＝三代実録

〃　-8-2 右大臣藤原基經の奉勅あり＝古縁起

元慶 6　882-10-　薩摩国開聞神授正四位下＝神階集

仁和元　885-7-12 薩摩国頴娃郡正四位下開聞明神発怒之時

〃　-8-11 …焼炎甚熾砂雨満地晝而猶夜

〃　-〃-12 自辰至子電電砂降未砂石積地或處一尺已下或處五六寸已上

寛平 7　895-9-11 開聞明神の上に瑞雲あらわる

8　896-10-　上記上表に対し宇多天皇から菅原道真草案の勅を賜る＝本朝文粋

延長 5　927-　-　頴娃郡一座小牧聞神社＝延喜式

承平 4　934-　-　頴娃郡沙＝和名抄

建久 8　1197-　-　頴娃郡　府社領正八幡相論　開聞宮領知覧社注進定＝図田帳

承久 3　1221-8-21 頴娃院道二反…＝新田宮放生会注文

文永 4　1267-12-3 えのこをり＝旧記雑録

弘安10　1287-　-　新田宮との「一宮」の相論

-　-　新田宮との「一宮」の相論

（　以　下　省　略　）

元亨 5　1325-1-22 ゑのこほり＝旧記雑録

元亀 4　1573-2-15 薩摩国ゑ之郡見丶（みやか）原之村＝彦山編年史料舊・他編

寛文11　1671-4-19 薩摩之内鹿児島・ゑの郡・指宿郡＝宮崎県史史料編・中世 2　P300 No27

元禄 9　1696　今薩摩国頴娃郡也＝松下見林・前王廟陵記

正徳 6　1716-　-　…今エイ郡読ンで江乃といふ和名抄に見えし所歟　白石・古史通四

安永 7　1778-7-25 本居宣長・古事記伝浄書（頴娃説⇨神代山陵考説も出す）

文化11　1814-11-　伝御陵＝お祓所・清所として開聞社説を否定（旧史官調）

文政中　1818―　星野葛山・国郡沿革考（頴娃説）

明治39　1905-　-　甚だ不審なり山陵（可愛）とは思われず頴娃郡なるべし＝久米邦武・日本古代史

(年不詳)　頴娃説　谷川士清・藻塩草

《まとめ》《ア行＝衣・愛・埃・榎　　ヤ行＝江・吉・枝》

：初見記事は「え」　頴娃も訓は「えノ」　頴は一字でエイ（穂先の義）

：「風土記の撰の詔」の「好字・二字化」で以後寛文頃までは「えノ」

・襲国⇨曽野郡　　都⇨都於郡の類似例

：可愛山陵の有力候補地

・古代まで逆上れる「エ」（ヱ）の遺称地は他にない

＊「和名抄」の薩摩国鷹屋郷の鷹屋は御陵カ（大隅国鷹屋郷は高屋山陵）

・頴娃・笠狭＝瓊々杵尊・薩摩国鷹屋郷は隣地である

【史料C　永利の訓について】《》

※永利(けかトシ)　ナク・トウシ　ナクは所、トウシは綱にして即ち綱を造る所の意なり

（『鹿児島県地名考』＝最上宏・昭和22年）

＊　建久四年の『薩摩国郡注文』が初見　　『図会』には「ナカリ」のルビ

＊　『義岡氏藩達留』の明治二年 9-17 条では永利(けかり) 郷

＊　同上・同年10-28 条では「永利(けかり) 郷の事」として<一　永利(けかトシ)郷　右之通唱被相替候旨被仰達候祭地頭江申渡向之江可申渡候

＊　北九州のナガリ書店は上記以前、ＮＨＫの永利(けかトシ)記者は上記以後に転出した

＊　百三十年前に呼称変更されたこと、以前はナガリであった事実は地元では確認不可

【史料D　ひられ・ひららの編年】

承平 4　934　薩摩郡避石郷＝和名抄

建仁 3　1203-5-27 譲与　平礼石寺座主職事…　山内氏文書＝市史・統古文書編P100～

寛喜 3　1231-2-19 譲与…平礼石里…平礼石居薗一所　旧雑一No.363

（以下嘉禎四年～嘉暦三年まで十四通を略す）

元徳 2　1330-7-18 さつまこほりのうち、ひられいし寺…

嘉元 3　1305-3-18 北限うきつさかいのひられいし（佐多村元雪名内）　旧雑・家わけ一祢寝No485

応長 2　1312-6-17 …宮里郷内…平良丶田貳段　新田一No24

康永 3　1344-7-6 一所参段ひられ石　豊後国速見郡八坂下荘中村守末名＝角川・大分

嘉慶 カ　1387-4-25 為宮里合戦合力…平良城…（氏久）　旧雑・家わけ一祢寝氏正統No111

文安 5　1448-　-　水田坪付　筑後国下妻郡水田荘（平石・平礼石）＝角川・福岡

《ひられ石の分布》〔〕

★薩摩国薩摩郡（川内市青山町）　★豊後国速見郡八坂下荘中村守末名（杵築市宮司付近＝杵築字平礼石・南杵築字平礼石）　★筑後国下妻郡水田荘（筑後市字上平霊石・下平霊石）　★菊池市（県道日生野～隈府線＝平良々石支石墓）　★大分郡野津原町（奥彦スカイライン今市の西・杵築神社アリ　★佐多町付近　★宮里・平良々川　★出水・平良川